国立大学法人お茶の水女子大学
ジェンダー研究所

IGS

2024年度
事業報告書

Institute
for
Gender Studies
Ochanomizu
University

IGS
Institute for Gender Studies
Ochanomizu University

ジェンダー研究所
2024年度事業報告書によせて

ジェンダー研究所長　　**戸谷　陽子**

お茶の水女子大学ジェンダー研究所2024年度の事業内容および活動の報告をお届けします。

本年度も、所長以下、専任教員、研究員、研究系および事務系のスタッフが協力して研究教育活動および研究交流を進め、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム・IGS セミナー等の開催、学術雑誌の刊行、教育プログラムの実施、国際的学術ネットワークの構築と研究交流の実践、研究成果の発信と社会還元といった事業において、いっそうの成果を上げることができました。

具体的には、国際シンポジウム2件、国際ワークショップ1件、IGSセミナー5件、研究会1 件を主催したほか、後援・共催の学術イベント2 件を開催しました。また、IGS刊行の学術ジャーナル『ジェンダー研究』では「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」を特集テーマとしました。前年度に当研究所が開催した国際シンポジウムでの議論をもとに、セクシュアリティ／ジェンダーが、グローバル政治の領域において、監視・管理・保護・処罰の対象として権力関係のうちに定義されてきたこと、それを根拠に戦争や暴力が発動・行使され、正当化され今日に至っているかを綿密に考察し、問題を明確にする視座を提供する秀逸な論文を掲載しております。

一昨年より本格的に再稼働した海外との研究交流活動も、新型コロナ感染症による活動制限時に得た経験知を活かし、オンラインと対面を丁寧に組み合わせ、着実に企画を充実させました。タイ AIT（アジア工科大学院大学）との交換ワークショップでは、先方から院生2名を受け入れ、本学からは8名の院生を派遣し、調査の活動範囲も大幅に拡大して充実した成果を得ました。また、ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターからはNTNUの研究者と院生が来日して複数回のフォーラムを開催、研究交流を行ったほか、本学からも複数の院生をNTNUに派遣しました。そのほか本学サマープログラム参加のためNTNUから来日した短期留学生、博論を執筆する博士後期院生の指導助言にも力を入れています。2023年に終了したノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 INTPART による共同プロジェクトは、ノルウェー高等教育･技能局との事業に発展的に引き継がれ､UTFORSKプロジェクトとして交流を続けています。

当研究所の目的は「ジェンダーに関する総合的、国際的な研究および調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資する。」と規則に定めており、ジェンダー研究発展のための使命と責任を日々実感する次第です。これを基本理念として、今後も本研究所は確固とした学術的研究成果に支えられた、研究・教育その他の実践活動を推し進め、よりよき社会への還元と啓発を続けてゆく所存です。日頃ジェンダー研究所の活動をご理解くださり、ご支援・ご協力をいただいておりますみなさまに心より御礼を申し上げますとともに、今後ともいっそうのご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

【目　次】

１．ジェンダー研究所 2024（令和６）年度事業概要……5
ジェンダー研究所概要
2024 年度事業概要

２．研究プロジェクト……13
2024 年度研究プロジェクト成果報告
（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト
（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト
（Ⅲ）海外の助成金による研究プロジェクト

３．国際シンポジウム・セミナー……21
国際シンポジウム詳細
フェミニズムとコモニング：ポスト資本主義におけるフェミニズムの位相
中国における農村・ジェンダー・ モダニティ
IGS セミナー詳細
台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり／一緒に学ぼう！性的同意と第三者介入ワークショップ／メディアにおける『炎上』の構造と発信者としての私たち／アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー／国際社会と中国：フェミニスト的好奇心から振り返る／沖縄における共有地とジェンダー：家父長制と軍事化の相関を問う
研究会詳細
IGS 研究協力員研究報告会
後援大会
日本フェミニスト経済学会 2024 年度大会：フェミニスト経済学とエコロジー：人間と環境のウェルビーイングを模索する
共催研究会
国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー（IMAGE）分科会：『在日フィリピン人社会』をジェンダーの視点から読む

4. 国際研究ネットワーク……45
1）国際的な共同研究・研究交流
2）UTFORSK プロジェクト
3）国内外招聘研究者一覧

5. 若手研究者の育成……51
1）AIT ワークショップ
2）大学院における次世代研究者育成
3）専任・特任教員担当講義

6. 学術成果の発信……57
1）学術雑誌『ジェンダー研究』
2）プロジェクト報告書 IGS Project Series

7. 文献収集と公開･史料電子化･ウェブ発信……63
1）文献・資料の収集と公開
2）IGS 史料電子化プロジェクト
3）ウェブサイト等での情報発信

8. 社会貢献……69

【資料】
① 構成メンバー……74
② 研究プロジェクト一覧……85
③ 協力研究者一覧……86
④ 国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧……89
⑤ 新規収蔵図書・資料……92
⑥ 電子化イベント一覧……94
⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則……101
⑧ 『ジェンダー研究』編集方針・投稿規定……103
⑨ ジェンダー研究所ウェブサイト　プライバシー・ポリシー……105

1. ジェンダー研究所 2024(令和 6) 年度 事業概要

ジェンダー研究所概要

2024 年度事業概要

▶ジェンダー研究所概要

学際的・先駆的なジェンダー研究と教育を推進する国際的な学術拠点

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、学際的かつ先駆的なジェンダー研究と若手研究者育成を推進する国際的な学術拠点である。その起源は、1975 年にお茶の水女子大学に創設された「女性文化資料館」という研究機関である。ジェンダーやフェミニズムという言葉が一般的には全く知られていなかった時代から、歴代の所属研究者たちはジェンダー研究に取り組み、学内外・国内外の研究者らと積極的に研究交流を続けてきた。これら先人の研究者たちが培ってきたジェンダー研究の成果と国際的な学術ネットワークを礎に、現在、ジェンダー研究所では、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、若手研究者の育成、学術雑誌『ジェンダー研究』の編集・刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

［参照：本報告書 101 頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」］

ジェンダー研究所（Institute for Gender Studies（IGS））の沿革と本学ジェンダー研究教育の動き

1875	東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）開校
1949	お茶の水女子大学設立
1975	**女性文化資料館設立**
1986	**女性文化研究センター設立**
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
1996	**ジェンダー研究センター（IGS）設立（国内大学初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設）**
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
2003	**21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」採択**
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
2015	**グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立**

▶ジェンダー研究所 2024 年度事業概要

1. 研究プロジェクト

2024 年度は IGS 研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が 7 件、研究代表者または分担者として科研費を獲得しての研究プロジェクトが 8 件、そして海外の助成金によるプロジェクト 1 件の、計 16 件のプロジェクトが進められた。IGS 所属研究者らは、研究会やセミナー、国際シンポジウムを企画開催したほか、学会発表や論文投稿、書籍刊行、学術誌『ジェンダー研究』の編集刊行により成果発信にも努めた。［参照：本報告書 13 頁「研究プロジェクト」、57 頁「学術成果の発信」］

1）IGS 研究プロジェクト

	プロジェクト名	担当
1	「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	申
2	東アジアにおけるエコロジーと生存のフェミニスト分析	大橋
3	資本と身体のジェンダー分析	大橋・足立・板井
4	性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析	嶽本
5	反公害／環境運動史におけるジェンダー／フェミニズム分析	嶽本
6	グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー	本山
7	文学・芸術文化表象とジェンダー	戸谷

2）外部資金による研究プロジェクト

	財源	テーマなど	担当
1	科研費　挑戦的研究（萌芽）	課題番号：24K21404 ジェンダーパリティ議会の実態調査による日韓比較　（2024～2025 年度）	申
2	科研費基盤 B	課題番号：23H03654 フェミニズム理論による新たな国家論の構築：ケア概念と安全保障概念の再構想から［研究代表者：岡野八代（同志社大学）］（2023～2026 年度）	申 本山
3	科研費基盤 B	課題番号：23H00888 日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究［研究代表者：定松文（恵泉女学園大学）］（2023～2025 年度）	大橋 平野
4	科研費（国際共同研究強化 B）	課題番号：21KK0033 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー ［研究代表者：堀口正（大阪公立大学）］（2021～2024 年度）	大橋
5	科研費基盤 C	課題番号：19K12603 香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析　（2019～2024 年度）	大橋
6	科研費基盤 C	課題番号：23K11676 「からゆきさん」にみる性・移動・再生産領域　（2023～2025 年度）	嶽本
7	科研費基盤 A	課題番号：24H00106 「奴隷制の想像力」：地中海型奴隷制度論の動態的検討［研究代表者：清水和裕（九州大学）］（2024～2027 年度）	嶽本
8	科研費若手研究	課題番号：23K17134 日本による親ジェンダー外交の展開：安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析　（2023～2027 年度）	本山

3）海外の助成金によるプロジェクト

ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku の UTFORSK プロジェクト（戸谷）2021 年 8 月～2025 年 7 月

2. 国際シンポジウム等の開催

IGS 主催のシンポジウムやセミナーは、ジェンダー研究所所属研究者が、自身の研究成果と国際的な人脈を生かして企画しており、研究所の研究・教育事業と有機的に連携している。2024 年度には国際シンポジウム 1 件、国際ワークショップ 1 件、IGS セミナー5 件、研究会 1 件を主催し、共催シンポジウム・セミナーを 3 件開催した。

7 月に開催した国際シンポジウム「フェミニズムとコモニング：ポスト資本主義におけるフェミニズムの位相」では、資本主義と人間中心主義の限界を超えるような資源や財の共有、さらにその中にあるインターセクショナルな関係性について、オランダおよび日本の研究者たちが討議を行った。また、IGS セミナー「沖縄における共有地とジェンダー：家父長制と軍事化の相関を問う」では、軍事基地として接収された共有地の使用料の事例を通じて、コモンズをめぐるジェンダー化された権力関係をさらに掘り下げた。これらの議論の内容は、『ジェンダー研究』第 28 号（2025 年 7 月刊行予定）に掲載される予定である。

2024 年度は中国のジェンダー研究者との学術交流も活発に行った。中国女性史研究会と共催した国際シンポジウム『中国における農村・ジェンダー・モダニティ』では、近現代中国における政治経済秩序の変容と農村におけるリプロダクション、医療、家族、土地といった問題をめぐる分析を通して、フェミニスト・アプローチによる中国研究の蓄積と可能性を討議する貴重な機会となった。また国際ワークショップ「アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー」では、中国による途上国開発援助および日本の安全保障政策におけるジェンダーの位置づけについて討論が行われた。

このほか、「台湾と日本におけるトランス・インクルーシブなキャンパスづくり」「メディアにおける『炎上』の構造と発信者としての私たち」「一緒に学ぼう！性的同意と第三者介入ワークショップ」など、よりよい学びの場とジェンダー公正な社会づくりという内外の関心に応え、学術的にも充実したセミナーを開催した。

［参照：本報告書 21 頁「国際シンポジウム・セミナー」］

●2024 年度 IGS 国際シンポジウム

フェミニズムとコモニング：ポスト資本主義におけるフェミニズムの位相
［本報告書 23 頁］

中国における農村・ジェンダー・ モダニティ ［本報告書 26 頁］

国際シンポジウム「フェミニズムとコモニング：ポスト資本主義におけるフェミニズムの位相（2024 年 7 月 31 日）」にて。佐藤千寿氏（ワーゲニンゲン大学）とウェンディ・ハーコート氏（エラスムス・ロッテルダム社会科学大学院大学）。

国際シンポジウム「中国における農村・ジェンダー・ モダニティ（2024 年 12 月 7 日）」。

● 2024 年度 IGS 主催・共催イベント

IGS セミナー

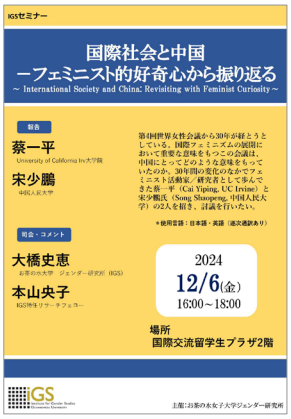
台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり［本報告書 29 頁］

一緒に学ぼう！性的同意と第三者介入ワークショップ［本報告書 31 頁］

メディアにおける『炎上』の構造と発信者としての私たち［本報告書 33 頁］

IGS セミナー

アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー［本報告書 35 頁］



国際社会と中国：フェミニスト的好奇心から振り返る［本報告書 37 頁］

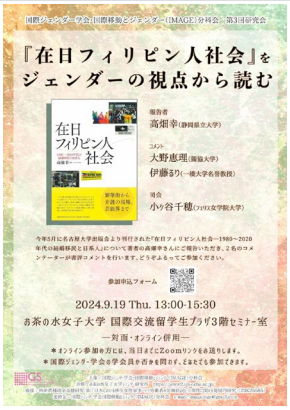
沖縄における共有地とジェンダー：家父長制と軍事化の相関を問う［本報告書 39 頁］

IGS 研究会

IGS 研究協力員研究報告会［本報告書 41 頁］

IGS 共催

日本フェミニスト経済学会 2024 年度大会
フェミニスト経済学とエコロジー：人間と環境のウェルビーイングを模索する［本報告書 43 頁］



国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー（IMAGE）分科会
『在日フィリピン人社会』をジェンダーの視点から読む［本報告書 44 頁］

3. 国際研究ネットワーク

2024 年度には 7 月と 12 月に国際シンポジウムや国際ワークショップが開かれた。

2024 年 7 月 31 日には、IGS 国際シンポジウム「フェミニズムとコモニング：ポスト資本主義におけるフェミニズムの位相」を開催した。ワーゲニンゲン大学（オランダ）の佐藤千寿（Chizu Sato）氏と、エラスムス・ロッテルダム社会科学大学院大学（オランダ）のウェンディ・ハーコート（Wendy Harcourt）氏が報告を行い、東京外国語大学の小田原琳氏、京都大学の岩島史氏、IGS の大橋史恵の 3 名がコメンテーターとして討議を行った。

2024 年 12 月 5 日には IGS 国際ワークショップ「アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー：フェミニスト国際政治経済分析に向けて」を開催した。カリフォルニア大学アーバイン校／DAWN（Development Alternatives with Women for a New Era）の蔡一平（Cai Yiping）氏と、IGS の本山央子が報告を行い、同志社大学の秋林こずえ氏のコメントを受けてディスカッションを行った。続けて 7 日には国際シンポジウム「中国における農村・ジェンダー・モダニティ」を開催した。中国人民大学の宋少鵬（Song Shaopeng）氏による基調報告の後で、大阪公立大学の姚毅氏、東京大学の田原史起氏、宇都宮大学の李亜姣氏がそれぞれ報告を行い、上智大学のリンダ・グローブ（Linda Grove）氏がコメントを行った。これらのイベントの合間には、中国のフェミニスト研究者とのネットワーク形成の機会を広げる目的において非公開ワークショップも開かれ、留学生を含む大学院生たちが宋少鵬氏や蔡一平氏と議論を深めることができた。

このほか 2021 年度から大阪公立大学堀口正教授による国際共同研究プロジェクト「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」に大橋史恵が参加し、中国社会科学院や華東師範大学の研究協力者とともに共同研究に取り組んだ。

［参照：本報告書 21 頁「国際シンポジウム・セミナー」、45 頁「国際研究ネットワーク」］

4. 若手研究者の育成

AIT ワークショップ、博士前期課程ジェンダー社会科学専攻・博士後期課程ジェンダー学際研究専攻の指導

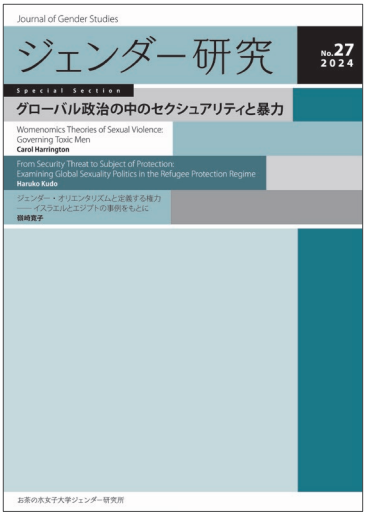
IGS 所属の特任講師が担当する大学院科目「国際社会ジェンダー論」は IGS の国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」の一環であるが、これはタイにあるアジア工科大学院大学（Asia Institute of Technology、以下 AIT と表記）との短期交換研修プログラムの必修科目である。この研修プログラムとは、AIT から博士前期課程の院生が来日し、自らの研究テーマに沿ってフィールドワークを実施すると共にお茶大院生と研究交流を行う。お茶大からも博士前期課程の院生たちがタイに派遣され、フィールドワークや、AIT でのアジア各国の若手研究者らとの研究交流を行うほか、帰国してからの AIT ワークショップ・プログラムの報告会、報告書作成などに参加し、海外におけるフィールドワークの基礎を学ぶプログラムである。2024 年度は、お茶大からは 8 名の院生が参加し、貴重な学びの経験を得た。

また 2024 年度は所属教員指導のもと、博士前期課程の 3 名がジェンダー社会科学専攻を修了した。

［参照：本報告書 51 頁「若手研究者の育成」］

AIT ワークショップ・プログラムで来日したタイのアジア工科大学院大学の院生による研修報告会。お茶の水女子大学大学院ゼミの一環として開催された。

5. 学術雑誌『ジェンダー研究』刊行と学術成果発信



国際的学術雑誌『ジェンダー研究』第 27 号（2024 年 7 月刊行）は「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」を特集した。本特集は、2023 年 12 月に開催した IGS 国際シンポジウムでの議論をもとにしている。特集論文として、Carol Harrington 氏（ニュージーランド、ヴィクトリア大学）の「Womenomics Theories of Sexual Violence: Governing Toxic Men」、工藤晴子氏（神戸大学）の「From Security Threat to Subject of Protection: Examining Global Sexuality Politics in the Refugee Protection Regime」、嶺崎寛子氏（成蹊大学）の「ジェンダー・オリエンタリズムと定義する権力：イスラエルとエジプトの事例をもとに」の 3 本を掲載した。投稿論文については厳正な審査を通過した 4 本を掲載した。また書評セクションでは、近年に刊行されたジェンダー・フェミニズム関連書籍の中から 19 冊を取り上げた。［参照:本報告書 57 頁「学術成果の発信」］

6. 文献収集・史料電子化、ウェブ発信、社会貢献

ジェンダー研究所では、出版社や著者から寄贈される図書の受け入れを行っている。また主催するシンポジウム・セミナーや『ジェンダー研究』の関連書籍の購入のほか、個人では購入しづらいジェンダー研究領域の歴史資料等の収集も進めている。たとえば本年度は、まとまった資料集としては『台湾愛国婦人〈明治編〉【復刻版】』、『戦前日本の社会事業・社会福祉資料第 6 期』を購入した。これらは図書館の本研究所書架等に置かれ、広く利用が可能になる。また同時に、ジェンダー研究所が設立から 50 年の間に行ってきた様々な事業の記録の電子化も進めており、本研究所のウェブサイトで閲覧が可能になるように引き続き整理を進めていく予定である。

日本語版および英語版のウェブサイトによる情報発信は、本研究所が力を入れている事業の一つである。各イベントの事前案内に加え、「IGS 通信」というかたちでイベントの開催報告を発信しているほか、『ジェンダー研究』の最新号およびバックナンバーを公開し、ジェンダー研究の最先端の情報を、分かりやすく、国際的に発信している。さらにウェブサイトをより使いやすいものにするための作業を継続的に続けており、準備が整い次第、新ウェブサイトとして公開する予定である。［参照:本報告書 63 頁「文献収集公開・史料電子化・web 発信」、69 頁「社会貢献」］

7. 構成メンバー

教員を含む研究所の中核となるメンバーは前年度から変化がなかったが、そのうち申琪榮教授がサバティカルに入られた。スタッフにおいては、前年度に着任したアカデミック・アシスタントの花岡奈央氏が退任し、新たに許美善氏が着任した。許氏は花岡氏から業務を引き継ぎ、ウェブ関係の作業を中心に貢献してくれている。ほかに研究協力員として、英美由紀（藤女子大学）教授、および左髙慎也氏（日本学術振興会特別研究員 PD）が加わり、セミナー・報告会等をとおして研究成果を発表した。［参照:本報告書 101 頁資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」、74 頁資料①「構成メンバー」］

2. 研究プロジェクト

2024 年度研究プロジェクト成果報告

（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト

（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト

（Ⅲ）海外の助成金による研究プロジェクト

▶ 2024 年度研究プロジェクト成果報告

学際的、先駆的ジェンダー研究を目指して

ジェンダー研究所は 2015 年以来、グローバル女性リーダー育成研究機構の中核的な研究機関として先端的ジェンダー研究に取り組んできた。その前身であるジェンダー研究センターは、国際的なジェンダー研究のネットワークにおける東アジアにおける重要なハブとして活動し、21 世紀 COE プログラム『ジェンダー研究のフロンティア』（2003～2007 年度）をはじめとした研究プロジェクトを通じて広く注目を集めてきた。ジェンダー研究所はジェンダー研究センターが積み重ねてきた研究成果を引き継ぎつつ、伝統的な学問分野に縛られない学際的で先駆的なジェンダー研究を志している。アジアにおけるジェンダー研究の拠点を目指し、国際的な共同研究と、その成果発信を積極的に進めており、蓄積された研究成果を広く社会へ還元していく。

先端的な研究を推進し、広い学術ネットワークを構築

ジェンダー研究所は、（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト、（II）外部資金研究プロジェクト、（III）海外の助成金によるプロジェクトにおいて、先端的な研究を推進している。とりわけ IGS 研究プロジェクトでは学内研究員、客員研究員、研究協力員の協力を得ながら広い学術ネットワークを構築し、その成果を意欲的に発信している。2024 年度もそれぞれの研究分野において研究会や公開セミナー、国際シンポジウムを実施したほか、成果出版物の刊行、国際共同研究や国際ネットワークの構築に取り組んだ。

アジア工科大学院大学（AIT）における院生交流（本報告書 52～53 頁参照）は、派遣 8 名・受け入れ 2 名が参加した。また研究所メンバーも国内外での学術ネットワークを拡大させ、学会発表や講演などを活発に行った。個々のプロジェクトの研究概要については、本報告書 16～20 頁を参照していただきたい。

国際シンポジウム、IGS セミナー、研究会の開催と学術雑誌『ジェンダー研究』の刊行

各研究分野におけるシンポジウムやセミナーの開催と、『ジェンダー研究』の刊行により、成果発信に力を入れた。

2020 年度から 2023 年度頃まで、ジェンダー研究所は Zoom を利用したオンライン配信やハイブリッドでのシンポジウムやセミナーを数多く開催していた。この試みは新型コロナウイルス感染症の対策であったが、地理的距離や生活パターン、健康上の理由などさまざまな事情のためにお茶の水女子大学に直接足を運ぶことが難しい方々の参加が可能になるという利点があった。2024 年度は、7 月 31 日の国際シンポジウムを Zoom ウェビナーによるハイブリッド開催とした。Zoom ウェビナーは同時通訳の使用においても利便性が高く、また対面に比べて圧倒的に多くのオーディエンスの参加を実現することができた。一方でオンラインやハイブリッドでの実施では、直接的なコミュニケーション機会が限定されるという問題もある。2024 年度の企画は、7 月の国際シンポジウム以外は対面で実施され、登壇者とオーディエンスが活発な交流を行うことができた。

ジェンダー研究所は、年に 1 度、学術誌『ジェンダー研究』の刊行を続けている。最新刊である第 27 号は、2023 年度に実施された IGS 国際シンポジウムにおけるディスカッションを受け、研究論文 3 本から成る特集「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」が巻頭を飾っている。第 27 号は、この特集に加えて投稿論文 4 本、書評 19 本を収録し、2024 年 7 月に刊行された（本報告書 58～60 頁参照）。

2024 年度研究プロジェクト　分野別一覧

（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト
「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究
東アジアにおけるエコロジーと生存のフェミニスト分析
資本と身体のジェンダー分析
性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析
反公害／環境運動史におけるジェンダー／フェミニズム分析
グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー
文学・芸術文化表象とジェンダー

（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト
科学研究費 挑戦的研究（萌芽）（課題番号：24K21404） ジェンダーパリティ議会の実態調査による日韓比較
科学研究費基盤研究 B（課題番号：23H03654） フェミニズム理論による新たな国家論の構築：ケア概念と安全保障概念の再構想から
科学研究費基盤研究 B（課題番号：23H00888） 日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究
科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）（課題番号：21KK0033） 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー
科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603） 香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析
科学研究費基盤研究 C（課題番号：23K11676） 「からゆきさん」にみる性・移動・再生産領域
科学研究費基盤研究 A（課題番号：24H00106） 「奴隷制の想像力」：地中海型奴隷制度論の動態的検討
科学研究費若手研究（課題番号：23K17134） 日本による親ジェンダー外交の展開：安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析

（Ⅲ）海外の助成金による研究プロジェクト
ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku（UTF-2020/10135） UTFORSK プロジェクト「Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan」

（Ｉ）IGS 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト
「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】申琪榮（IGS 教授）
【概要】
東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本と韓国、台湾の議員を対象としたアンケート調査による国際比較分析を行ない、東アジア地域において、女性の政治代表性を向上または妨げる要素は何か、政治制度におけるジェンダー多様性を実現させるにはどのようにしたらよいかを検討する。

IGS 研究プロジェクト
東アジアにおけるエコロジーと生存のフェミニスト分析

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）
【共同研究者】岩島史（京都大学講師）
【概要】
気候変動や資源をめぐる国家間の対立など、さまざまな地球規模での「危機」が人びとの生存のありかたに深刻な影響をもたらしている。このような局面において、資本主義において自明とされてきた「所有」概念を中心とした経済システムを批判的に再考し、民主主義的なコモンズ（共有財、公共財）の可能性を切り開こうとする議論が注目されている。一方で、これまでの科学知のありかたにおいて資源や財をめぐる問題系は、ジェンダー、階級、人種・民族といったインターセクショナルな抑圧・排除の構図を度外視してきたが、上記のような研究潮流においてこのことは十分に議論されていない。本プロジェクトではこうした状況を鑑み、コモンズやサブシステンスに関するフェミニスト理論を再検討し、アジアの農山漁村をフィールドとした現状分析をおこなうための基礎研究に取り組む。

IGS 研究プロジェクト
資本と身体のジェンダー分析

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）
【共同研究者】足立眞理子（IGS 客員研究員）、板井広明（専修大学教授／IGS 研究協力員）
【概要】
本プロジェクト「資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々」は、グローバル金融危機以降の資本の中枢機能の変化を分析する。サスキア・サッセンの「放逐 expulsions」概念に着目して、従来の身体の断片化や排除／包摂の概念では把握不能な「放逐」の「常態化」をジェンダーの視点から分析する。

（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト
性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析

【研究担当】嶽本新奈（IGS 特任講師）
【概要】
本研究プロジェクトは、開国以降に海外へ渡航し、渡航先で性売買をしていた女性たち（「からゆきさん」）の実態を再生産領域の観点から考察することを目的としている。性売買の問題のみに注目されがちな「からゆきさん」だが、彼女たちの再生産領域の問題にも深くかかわる「経験」でもあるため、女性たちの生涯を視野に入れて考察をしていく。

IGS 研究プロジェクト
反公害／環境運動史におけるジェンダー／フェミニズム分析

【研究担当】嶽本新奈（IGS 特任講師）
【共同研究者】西亮太（中央大学准教授）、番園寛也（熊本学園大学水俣学研究センター客員研究員）
【概要】
天草に建設された石炭火力発電所への反対運動として始まった天草環境会議は 2023 年で 40 回目を迎えた。天草環境会議は石炭火力発電所建設を公害と環境の複合的な問題としてとらえており、国内外の運動ネットワークと知的影響関係を持っていた。この運動の歩みと実践をジェンダー／フェミニズムの視点によって検討する。

IGS 研究プロジェクト
グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー

【研究担当】本山央子（IGS 特任 RF）
【概要】
グローバル市場や国家間の地政学的闘争によって国際秩序が大きく変化するなかで、多様なアクターがジェンダーに関わる理念や規範をどのように理解して実践しているか、そのことがグローバル・ガバナンスや国家の再構築にどのような役割を果たしているかについて分析する。

IGS 研究プロジェクト
文学・芸術文化表象とジェンダー

【研究担当】戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授）
【概要】
文学や芸術文化表象（ポップカルチャーおよびやサブカルチャーを含む）、広告を対象にそのジェンダー表象を分析し、日常にみられるジェンダー意識の変遷を跡づける。

（II）外部資金研究プロジェクト

科学研究費 挑戦的研究（萌芽）（課題番号：24K21404）

ジェンダーパリティ議会の実態調査による日韓比較

【研究代表者】申琪榮（IGS 教授）
【期間】2024 年 6 月 28 日～2026 年 3 月 31 日
【概要】
政治分野に女性の過小代表性が問題視され始めて久しいが、近年女性が半数又はマジョリティを構成する地方議会（ジェンダーパリティ議会）が複数現れたのはこれまで経験したことのない新しい現象である。ジェンダーパリティ議会についてはクオータのような制度的な取り組みやフランスの実践が注目を集めてきたが、女性がマジョリティとなった議会にもたらされた変化、すなわち数の均等がもたらす質的な変化についていまだに研究が乏しい。本研究は日韓におけるジェンダーパリティ地方議会の質的分析を行い、今後増えていくだろうこれらの議会に対する学術的な知見を生み出す。

科学研究費基盤研究 B（課題番号：23H03654）

フェミニズム理論による新たな国家論の構築：ケア概念と安全保障概念の再構想から

【研究担当】申琪榮（IGS 教授）［研究分担者］、本山央子（IGS 特任 RF）［研究分担者］
【研究代表者】岡野八代（同志社大学教授）
【期間】2023～2026 年度
【概要】
現在、政治学の主要な研究対象であった国家は、市民社会との関連だけでなく、より広くより複雑な形で、国際社会、環境、経済、そしてジェンダーといった視点から、その歴史を踏まえて問い直される時がきている。そこで、本研究では、第二波フェミニズム運動を受けて深化した 90 年代以降のフェミニズム理論を批判理論として捉え、男性中心主義を克服するための鍵をケア労働の配置とその権力的分配の在り方の刷新のなかに見出すことによって、武力を背景とした安全保障概念を見直し、環境や国際社会にまで射程を拡げたフェミニズム理論に依拠した国家論を構想する。

科学研究費基盤研究 B（課題番号：23H00888）

日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）［研究分担者］、平野恵子（横浜国立大学准教授／IGS 研究協力員）［研究分担者］
【研究代表者】定松文（恵泉女学園大学教授）
【期間】2023～2025 年度
【概要】
本研究は以下二つの課題から構成される。課題 I では現在の家事・ケア労働市場・準市場・非市場における需要と労働者および経験者の労働実践と就業選択の理由に関する定性的調査として、現在の移住家事・介護労働者および日本での介護・ケア労働の経験者への聞き取り調査を計画している。課題 II は移住家事・ケア労働者の連帯と社会変革の主体性の研究である。調査からキーパーソンを選び、複数回の聞き取り調査により地域社会の再生産を行う主体性を析出する。アジア諸国と国際労働組合総連合（ITUC）等における家事・ケア労働者の運動と連帯の動向を調査し、グローバルな潮流の中での日本の移住労働者との連携や運動の展開について考察する。

（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト

科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）（課題番号：21KK0033）

人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）［研究分担者］

【研究代表者】堀口正（大阪公立大学教授）

【期間】2021～2024 年度

【概要】

人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダーについて、実証的に検討することを目的とする。人民公社期の同種の研究蓄積は非常に少なく、歴史学、政治学、社会学などの学術的領域で断片的に行われてきた。したがって、本研究では、1950 年代から 70 年代の共有資源の維持・分配のあり方や、世帯内外の生産・再生産労働の労働力配置などに着目しながら、ジェンダーの視点から議論・検討する。

科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603）

香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析

【研究代表者】大橋史恵（IGS 准教授）

【期間】2019～2024 年度

【概要】

本研究は、香港社会において異なる移住女性による再生産労働力がどのように配置されてきたかを、中国人家事労働者と外国籍家事労働者およびその雇用主を対象としたオーラル・ヒストリーの聞き取りから明らかにするものである。香港が輸出志向工業化路線から東アジアの金融・貿易サービスの中枢を成す「グローバル・シティ」へと転換した時期は、外国籍の家事労働者の受け入れが拡大していくとともに、主に広東省に出自をもつ中国人女性の労働力配置に変化が生じた時期と重なる。1980 年代末から今日までの香港の社会経済構造の変動において、トランスナショナルにあるいはトランスローカルに移動して家事労働者になった女性たちはどのように受け入れられたのか。異なるケアの担い手たち（移住女性）と受け手たち（雇用主）の「ケアの記憶」を通じて香港の再生産領域の変化をとらえたい。

科学研究費基盤研究 C（課題番号：23K11676）

「からゆきさん」にみる性・移動・再生産領域

【研究代表者】嶽本新奈（IGS 特任講師）

【期間】2023～2025 年度

【概要】

「からゆきさん」の移動を現地における再生産労働の需要と供給の観点から把握することで、その移動現象を構造的に解釈することが可能になる。と同時に、娼館を出て以降の女性の選択を「経済的営為」の選択肢として解釈し、女性たちの生涯の経験をより包括的に分析対象とする。最終的な目標としては、再生産労働概念を用いて彼女たちのミクロな経験と、国家・植民地・コミュニティというマクロな動きを接合し、その構造を明らかにしていきたい。

（II）外部資金研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 A（課題番号：24H00106）

「奴隷制の想像力」：地中海型奴隷制度論の動態的検討

【研究担当】嶽本新奈（IGS 特任講師）［研究分担者］
【研究代表者】清水和裕（九州大学教授）
【期間】2024～2027 年度
【概要】
本研究は、古代地中海世界から近世・近代大西洋奴隷交易へと展開した地中海型奴隷制度について、「奴隷制の想像力」がその変容過程に及ぼす影響に着目しつつ、グローバルで動的な展開を描き出す。「奴隷制の想像力」とは実際の奴隷制と隷属に関する言説や表象が作り出していく「奴隷制／隷属イメージ」が歴史的現実を変えていく力である。本研究においては、地中海型奴隷制度と地域的な隷属関係の交差のなかに成立する「奴隷制の想像力」の検討に当たり、ジェンダーと労働形態、奴隷の逃亡・抵抗・解放といった諸元に注目して分析を行うものである。

科学研究費若手研究（課題番号：23K17134）

日本による親ジェンダー外交の展開：安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析

【研究代表者】本山央子（IGS 特任 RF）
【期間】2023～2027 年度
【概要】
本研究は、日本が国内ジェンダー秩序との矛盾をいかに統制しながら、国際ジェンダー規範との交渉を通して「先進国」としてのアイデンティティを構築し特権的地位を主張してきたのか明らかにすることを目的としている。明治期以降の外交を通じた国際ジェンダー規範との交渉を包括的に把握し、特に 2010 年代以降の外交におけるジェンダーの位置づけの変化について、歴史的植民地主義、安全保障の再定義、新自由主義的ガバナンスの台頭という 3 つの要因に注目して分析を行う。

（III）海外の助成金による研究プロジェクト

ノルウェー高等教育・技能局（HK-dir）による助成金プロジェクト（UTF-2020/10135）

UTFORSK プロジェクト「Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan」

【研究担当】
小林誠（基幹研究院人間科学系教授）［本学側代表］、戸谷陽子（IGS 所長）［本学側プロジェクト・コーディネーター］、石井クンツ昌子（理事・副学長）ほか
ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター研究者
【期間】2021～2025 年度
【概要】
ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築するプロジェクト。学生、若手研究者、教員が、パートナー大学での共同セミナーや共同指導を経験するなど、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。研究発表や産学連携への参与など若手研究者への機会提供や、論文の共同執筆など研究者同士の将来的なパートナーシップ発展につながる活動も行う。また、SDGs のジェンダー・ダイバーシティ関連の目標達成に資する成果を目指す（本報告書 49 頁参照）。

3. 国際シンポジウム・セミナー

2024 年度 国際シンポジウム・
IGS セミナー・研究会詳細

▶ 2024 年度 国際シンポジウム・セミナー概要

2024 年度は IGS 主催国際シンポジウム 1 件、IGS 共催国際シンポジウム 1 件、IGS セミナー6 件、研究会 1 件を主催したほか、共催・後援イベント 2 件を開催した。詳細は次頁以降を参照いただきたい。

IGS 主催国際シンポジウム	
フェミニズムとコモニング：ポスト資本主義におけるフェミニズムの位相	23 頁
IGS 国際シンポジウム（共催）	
中国における農村・ジェンダー・ モダニティ	26 頁
IGS 主催セミナー	
台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり	29 頁
一緒に学ぼう！性的同意と第三者介入ワークショップ	31 頁
メディアにおける『炎上』の構造と発信者としての私たち	33 頁
アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー	35 頁
国際社会と中国：フェミニスト的好奇心から振り返る	37 頁
沖縄における共有地とジェンダー：家父長制と軍事化の相関を問う	39 頁
IGS 主催研究会	
IGS 研究協力員研究報告会	41 頁
IGS 共催・後援イベント	
日本フェミニスト経済学会 2024 年度大会 フェミニスト経済学とエコロジー：人間と環境のウェルビーイングを模索する	43 頁
国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー（IMAGE）分科会 『在日フィリピン人社会』をジェンダーの視点から読む	44 頁

IGS セミナー「台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり」

▶ 2024 年度 主催国際シンポジウム詳細

IGS 国際シンポジウム

フェミニズムとコモニング
ポスト資本主義におけるフェミニズムの位相

【日時】2024 年 7 月 31 日（水）14:00〜17:00

【会場】ハイブリッド開催（人間文化創生科学研究科棟 604 室、Zoom ウェビナー）

【報告】

佐藤千寿（ワーゲニンゲン大学講師）

「気候変動の時代に「コモニング」はフェミニストポリティクスの再考をいかに促すか」

ウェンディ・ハーコート（エラスムス・ロッテルダム社会科学大学院大学教授）

「地球をケアするということ：環境正義とフェミニズムの交差における積極的研究実践」

【コメンテーター】

小田原琳（東京外国語大学教授）

岩島史（京都大学講師）

大橋史恵（IGS 准教授）

【司会】本山央子（IGS 特任リサーチフェロー）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳有）

【参加者数】204 名（対面参加 23 名、オンライン参加 181 名）

【趣旨】

近年、人間の経済活動によってさまざまな危機が引き起こされていることへの問題意識において、ポスト資本主義的な「コモニング」の構想が注目されている。コモニングのアプローチでは、資源や財の所有-共有をめぐるコモンズ論を越えて、分かち合い、管理し、そしてケアしていく関係論的プロセスに関心が向けられる。このように再生産過程までを含めてコモニングをとらえるというとき、そのプロセスに女性やマイノリティがどのように位置づけられていくかということは大きな課題となる。実際、コモニングをめぐる議論では、インターセクショナリティの問題が意識されるとともに、社会的包摂や民主主義の重要性が示唆されてきた。コモニングは、これまでの「合理的経済人」の仮想の社会経済モデルを批判的に乗り越え、「人間以上」の多様な存在の共生基盤を切り開くにあたっての、豊かな可能性を秘めているといえよう。

一方でポスト資本主義の展望において、コモニングは必ずしも市場経済からの脱却を志向するとは限らず、むしろ市場経済との溶蝕において実践されてもいる。フェミニズムは、グローバル資本主義の拡張が土地や天然資源だけでなく空間、知識、身体などの新たな「囲い込み」をもたらしていることをとらえ、絶え間のない

抽出/採取主義と収奪、そして社会的再生産の枯渇に警鐘を鳴らしてきた。このような趨勢において、コモニング・アプローチは抵抗の機軸となりうるのだろうか。

フェミニスト政治経済学およびフェミニスト・ポリティカル・エコロジーの領域においてコモニングのアプローチを議論してきた佐藤千寿氏とウェンディ・ハーコート氏とともに討議し、コモニングを論じることがフェミニズムにどのような視座を切り開くのか、そしてフェミニズムにおいてコモニングのアプローチはいかに問い直されていくのかを考えていきたい。

【開催報告】

はじめに大橋史恵氏が本シンポジウムの趣旨を説明したのち、第一部ではフェミニスト、政治、経済学およびフェミニスト・ポリティカル・エコロジー（FPE）の領域において、コモニングのアプローチを議論してきた佐藤千寿氏とウェンディ・ハーコート氏が報告した。第一報告者の佐藤氏は、気候変動の時代においてコモニングのアプローチが、フェミニストの政治学を再興し、家父長制や資本主義の制約の下にありながらも、より公正で持続可能な社会生態学的関係性を築く可能性を提示した。報告は、コモンズやコモニングの形成を FPE の視点から読み解き、そのプロセスを分析することで、二元論的な考え方の脱構築を図ること、多様なエコロミーにおける女性と男性の役割遂行を再考すること、人間中心主義を乗り越え「人間以上」（more than human）の存在との交差を意識することが可能になっていくと強調した。さらにメキシコと日本の事例を通じて、搾取的な社会生態関係からの脱却や、親族によるコミュニティの形成、多種間の絡み合いによる変革の必要性が議論された。

第二報告者のハーコート氏は、 FPE の視点からケアとコモニングの関係を考察し、フェミニストの視点でケアと知識をどのように捉えるべきか、個人的かつ実践的な生活世界を再構築、再創造する重要性を強調し、特に自然との関係の再考や先住民の知識から学ぶことの意義に言及した。報告ではオーストラリアの事例を用いて、環境危機に対する理解の深化、個人的なジレンマや経験を共有しつつ、公正で持続可能な生活世界の構築に向けた実践的なアイデアを提供した。資源配分や開発プロセスにおける不公正は、権力の不均衡を引き起こし、利益と苦痛の不平等な分配をもたらす。そうしたインターセクショナルな差別や抑圧をめぐり、FPE は資源や環境、知識へのアクセスとコントロールに関する不公正を再考し、多様な知識や視点を統合して権力構造と生活世界への影響を包括的に理解する視点や、不公正な社会構造を批判的に捉える視点を提供できるとした。ハーコート氏の報告は、FPE は単なる権力構造の分析に留まるものではなく、歴史的背景を踏まえて生活世界への権力の影響を包括的に理解するアプローチが重要であることをおさえていた。コモニングを他者とのケアに基づいた共同の取り組みとしてとらえ、国家や市場に埋め込まれた社会的・制度的形態に代わる変革をもたらす手段として実践していくことが重要であると述べた。人間および非人間のエージェンシーの認識に基づく協働とケアの倫理は、研究者と被研究者、管理者と被管理者といった偽りの二分法を超えた新たな関係性を築くうえで重要であると論じた。

第二部では異なる専門領域の 3 名のコメンテーターが発言し、パネリストが応答した。まず日本の戦後農村社会を研究してきた岩島史氏が、次のような問いを示した。(1)コモニング・コミュニティとそうでないものの区別、コミュニティのメンバーになりうるのは誰か、どのように特定できるか (2)コモニング・コミュニティを分析ツールとして使うことで、家父長制やその他の不平等な社会関係を可視化できるのか (3)日本の農山村における共有林の利用に関連して、「人間以上」との関係性をどのように理解すべきか (4)日本とメキシコの事例の違いや、フェミニニティとマスキュリニティの変化をどのように捉えるか。特に、日本の事例では、高齢女性がコミュニティに貢献する一方で、政府や地方自治体をコ

モニング・コミュニティの一員と見なすことで、再生産労働が女性に押し付けられている側面が見過ごされる可能性はないのか。(5)先住民コミュニティにおける労働はジェンダー化されているのか。

続いてコメントした小田原琳氏は、フェミニストの思潮に根ざしながら現代世界に向き合うという切り口において、「More than human を想像する」というテーマを中心にコメントした。現代社会において、人間が資本のための労働力再生産の単なる機械のように扱われ、無償またはほとんど無償の労働力として利用され、使い捨ての資源として見なされている。こうした状況を顧みるとき、オーストラリア先住民や日本、メキシコの事例では「人間性の回復」というテーマがどのように現れるのか。また、資本主義化と軍事化が極度に進んだ現代世界において、「人間以上」の回復がどのように実現されるかについて話した。

最後の大橋史恵氏は、マルクス派フェミニズムにおける議論をおさえつつ(1)ポスト資本主義のフェミニストは、コモニングにおけるケアや社会的再生産の重要性をとらえる際に、労働という概念を議論の中にどう位置づけるのか (2)フェミニスト的なコモニングの実践に関する議論は、ジェンダーに基づく構造的暴力の問題に対してどのような新たな視点や解決策を提示しているのか (3)オーストラリアの先住民たちは長い間、土地のアクセス、管理、ケアをめぐって闘ってきた。権利回復が行われたのはどのような経緯によるか。また、再所有、再構築、再創造のプロセスは、先住民コミュニティにおけるジェンダー関係に変化を及ぼしたのだろうかという質問を提起した。

３名のコメンテーターはそれぞれ非常に大きな問いを示したが、時間の制約上、すべてに網羅的に回答するのではなく、佐藤氏とハーコート氏がそれぞれ最大限に可能なかたちで応答するかたちでフィードバックがなされた。佐藤氏は、コモンズは自然資源に限らず、たとえば岩島氏がコメントにおいて示した日本の農村における共同洗濯機の導入は社会的コモンズにあたると述べた上で、そのようなコモニング・コミュニティにおける社会的再生産の変革実践において、ジェンダー関係には変化が起きうること、一方で洗濯石鹸の使用が生態系に及ぼす影響を「人間以上」の視点から考慮すべきという新しい課題が出てくることを示唆した。また資本主義とオルタナティブキャピタリズムにおける搾取を異なったものとして理解した上で、コミュニティに利益を還元する方法を模索していくことが重要だと述べた。次にハーコート氏は、「人間以上」の権利のバランスを取り、共存するための視点が重要であると強調した。たとえばプラスチック汚染は「ネガティブコモンズ」の一例であり、全員が関与している問題として認識すべきであると述べた。また先住民の権利回復の過程においてジェンダー関係にどのような変化があったか、再所有や再構築がジェンダーにどのような影響を与えたかを調査していくことは、重要な課題であると応答した。

参加者からは「コモンズやコモニングを作る過程において、スキルや知識はどのように共有されているのか」「コモニングの実践と資本主義的枠組み内での「脱コモディフィケーション」はいかに可能になるか」「『人間以上』の概念において、宗教的要素や先住民族のコスモロジーがコモニングにどのように関わっているか、特にフェミニスト・ポリティカル・エコロジーの観点からどのような議論がなされているか」などの質問があった。

記録担当：余 楽（お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

IGS 国際シンポジウム

中国における農村・ジェンダー・ モダニティ

【日時】2024 年 12 月 7 日（土）13:00～17:30
【会場】国際交流留学生プラザ 2F 多目的ホール（対面）
【基調報告】
宋少鵬（中国人民大学教授）
「政治的変動とともに:農村部の母子衛生事業としての新式出産普及運動（1949 年-1978 年）」
【報告】
姚毅（大阪公立大学客員研究員）
「人民性・地方実践とジェンダー：はだしの医者の経験から」
田原史起（東京大学教授）
「中国農村における『家族主義』の現在：モダニティとジェンダーの視点から」
李亜姣（宇都宮大学助教）
「『農嫁女問題』の行方：『農村集団経済組織法』と世帯の一体化」
【ディスカッサント】リンダ・グローブ（上智大学名誉教授）
【司会】大橋史恵（IGS 准教授）
【閉会挨拶】戸谷陽子（お茶の水女子大学教授／IGS 所長）
【主催】ジェンダー研究所
【共催】中国女性史研究会
【言語】日本語、中国語普通話（逐次通訳有）
【参加者数】85 名
【趣旨】

本シンポジウムは、現代中国史における農村、ジェンダー、モダニティの位相の変遷を討議する試みとして開催された。宋少鵬氏は、中華人民共和国成立初期から改革開放前夜までの農村におけるリプロダクティブ・ポリティクスを分析し、フェミニストアプローチの有効性を提示した。さらに、姚毅氏、田原史起氏、李亜姣氏が、医療・家族・土地を軸に具体的な論点を提起した。現代中国の農村ジェンダー史に向き合ってきたリンダ・グローブ氏をディスカッサントに迎え、学術的対話が活発に行われた。

【開催報告】

2024 年 12 月 7 日に開催された国際シンポジウム「中国における農村・ジェンダー・モダニティ」では、基調講演 1 本と個別報告 3 本、そしてディスカッサントを交えた討議が行われた。

基調講演者の宋少鵬氏は、中国の基層母子衛生体制をマクロとミクロの視点から紹介した。マクロ視点からは、「三転三落」をたどった新法接生（新式助産）運動から見る、国家の基層母子衛生体制の転換過程が解説された。中国母子衛生事業の体制化は国家衛生体系の改良と発展の過程と関わっており、政

治運動とも密接に結びついた。中華人民共和国成立初期から母子衛生の取り組みが制度に組み込まれ、新法接生がその重要な内容の一つとされた。当初接生所（助産施設）や保健所の設立を通じて体制化が進められ、接生人員（助産者）の専門化が図られた。かつて血縁関係のなかで行われていた助産は、行政システムに統合されるとともに、近隣関係が中心となった。これらは本来都市部の体制に基づいており、農村の実情とは乖離していたため、農村の従来の人間関係を壊す結果となった。1958 年前後には産院が整備され助産の職業化が徐々に進んだ一方で、分娩の場は家庭へと移行した。当時は、助産と出産にかかる金銭のやりとりが社会的に受け入れられなかったのである。1974 年から改革開放初期にかけては、体制化が回復・強化され、助産の完全な職業化が進むとともに、分娩は徐々に入院中心へと移行していった。ミクロ視点からは、陝西のある村における四世代の助産者及び村の出産の歴史が紹介された。フロアから「助産者と妊婦との信頼関係の構築」について質問があり、当時の独特な関係作りについて宋氏が追加説明を行った。

続いて 3 本の報告が行われた。第一報告者の姚毅氏は、中国農村における「はだしの医者」について報告した。はだしの医者は、貧農・下中農などの階級的出自で、ある程度の教育を受けた若い農民から選ばれ、農民に奉仕する精神が重視された。頭脳労働/肉体労働、都市/農村の格差をなくす平等社会のシンボルであった。報告では、まず免許と学歴が要求されない中国の「非西洋型医療」体系が説明された。そしてケーススタディを通して、医療がいかに政治化され、政策がどのように個人に浸透していったのかが説明された。まず、選抜訓練においては、政治学習や思想教育が必須であった。また、医療資源が十分にない地域では民間の医師が利用されることが多かった。階級的出自が重要視されたことで貧農など特に望ましい出自の青年がリーダー的な役割を果たしたが、特定の階級が排除されたことで逆に不平等が進行する傾向が見られた。技術性よりも政治性が優先される中で、不平等が固定化される現象が起きていたといえる。

第二報告者の田原史起氏は 2023 年中国で公開され大ヒットした『小さき麦の花（中国語：隠入尘烟）』という映画が、その後上映中止となった出来事を切り口にし、中国農村における家族主義を考察した。家族主義について田原氏は、先行研究に即して「家族の現世における発展を最優先し、その目的に従って合理的に生きる精神的態度」と説明する。中国では家族の経済的繁栄を志向する考え方が非常に強い。農民の行動ロジックについて歴史的に見ると、1960～70 年代は都市と農村の二元構造の下で、農民家族と都市の家族は異なる原理によって統治されていた。このため人びとは都市と農村の格差には関心を向けなかったが、農村内部の格差には非常に敏感であった。1980 年代生産請負制の導入後農地は各世帯に平均的に分配された。その後、2000 年頃から出稼ぎが一般化し、同じ村内での競争が激化した。さらに、2006 年以降は農村優遇政策が進み、2012 年からは「新型都市化政策」として農民を県城へ集住させる施策がとられた。この過程で、家族の経済戦略が形成される。親世代は平等に配分された農地を経営し、子ども世代は出稼ぎに出て賃金を稼ぎ、資金が貯まると県城にマンションを購入する。この構造の中で、女性は「便利な駒」として位置づけられ、必要に応じて家に留まり、機会があれば外に出て収入を得る。こうした戦略により、女性たちは農村、大中都市、県城という三拠点を循環しつつ、地域ごとに異なる様相を呈しながら移動する。この循環的な移動は、マイグレーションではなく「サーキュレーション」であると田原氏は提示し、これを踏まえ、上映禁止となった背景を考察した。習近平時代においては、大中都市と県域社会の間に新たな二元構造が形成されている。政府は農民を県城に集め、安定した生活を送らせることで、社会全体の安定を図っている。一方、大中都市の 4 億人は国際競争の最前線に立ち、高度人材としての役割を果たすことが求められている。映画は「競争しなくても、静かな幸せが得られ

る」というメッセージを示したことから、田原氏は、映画が上映禁止となったのは、このメッセージが政府の推奨する「ポジティブなエネルギー」（中国語：正能量）と逆行していたためではないかという視点を提起した。

第三報告者の李亜姣氏は土地権利の配分から排除された「農嫁女」（出身村から婚出する女性、Married-out Women）問題について議論した。1983 年以降、中国の土地所有制度の変化に伴い、女性にも 1 人分の土地使用権が与えられるようになった。しかし、多くの地域では、結婚した女性は夫の村へ移住するべきとする伝統的なジェンダー秩序（中国語：从夫居）に基づき、村内での財産分配ルールが制定されている。結果、一部の女性とその子供が土地収用補償金の分配から排除される。また、土地請負権や農村集団組織の収益分配、土地株式の配当金、住居用地の分配においても、女性が排除されるケースが多発している。1990 年代以降、排除された女性たちは各地でグループを結成し、隣村と連携しながら土地を巡る権利剥奪に対して抗議を行い、地方政府や婦女連合会などに陳情を行っている。さらに、結婚した女性を「よそ者」とみなす考え方が、財産分配に影響を与えている。特に問題となるのは、「村規民約」である。地方政府は村規民約の合法性を審査する権限を有するものの、その範囲は文化的な規定に限定されており、経済的な規定には及ばない。そのため、農嫁女が提訴した場合でも、経済的規定が「村民自治の産物」として保護される。この状況を受け李氏は、農嫁女問題は、単なる文化的慣習の問題ではなく、経済的問題であると強調した。2024 年 6 月には待ち望まれていた「農村集団経済組織法」が可決されたが、結果として統一基準は設定されず、村レベルでの土地権利の侵害が引き続き発生する可能性が高い。最後に李氏は、農嫁女問題を解決するためには、一つ目に女性の生産能力を強調することで土地公有性に女性が関与することの正統性を強化すべきとし、二つ目に資本に対抗する農村集団経済組織の主体性を強調すべきと提言した。

各報告の後、リンダ・グローブ氏がディスカッサントとして登壇し、自身のフィールドワークの知見を交えながら、議論を深めた。まず、政策研究の重要性を認めつつ、それが民衆レベルでどのように経験され、地域ごとではどう違うかを考察することが必要であると指摘した。家族主義の問題は、生殖、土地・財産権、そして移動の問題のすべてに関わる。特に、一人っ子政策の導入後、家族関係や女性の役割、出産に関する選択がどのように変化したかについても考えなければならない。また移住労働に目を向け、出稼ぎ労働者と残された家族の関係、また都市と農村間の人口循環の影響についての議論を行うことが重要である。さらに、医療と生殖の問題について、過去の医療制度の中で、一人っ子政策の徹底がどのように行われていたのか、出産の計画的管理、また売春や性病の問題がどのように地域社会に影響を及ぼしたのかを問題提起した。グローブ氏は過去のフィールドワークにおいて、さまざまな異なる医療形態が共存していた実情を観察したことにふれ、医療報酬の形態として貨幣ではなく物品の授受が行われていたことも紹介した。また「過剰化した独身女性（中国語：剰女）」問題に触れ、都市部だけでなく農村地域でも結婚に関する問題が発生していることを指摘した。

フロアからは、サーキュレーションという言葉の解釈や家族主義と個人主義の関係性、助産の女性化、政策提言の依拠など様々な質問があり、活発かつ有意義な議論になった。

記録担当：張曼青（京都大学フィールド科学教育研究センター特定助教）

▶ 2024 年度 主催 IGS セミナー詳細

IGS セミナー

台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり

【日時】2024 年 4 月 17 日（水）15:00-17:00

【会場】国際交流留学生プラザ 2F 多目的ホール（対面）

【講師】

許秀雯（台湾伴侶権益推進連盟弁護士）

簡至潔（台湾伴侶権益推進連盟事務局長）

【進行・コメント】長島佐恵子（中央大学教授）

【コメント】

石丸径一郎（お茶の水女子大学教授）

河野禎之（筑波大学助教）

【総合司会】戸谷陽子（お茶の水女子大学教授／IGS 所長）

【通訳】

八木はるな（中央大学准教授）、魏韻典（東京大学博士後期課程）

【主催】ジェンダー研究所

【共催】中央大学ダイバーシティセンター

【言語】日本語、中国語（逐次通訳有）

【参加者数】44 名

【開催報告】

開催に先立ち IGS 戸谷所長より、2024 年 4 月 3 日に発生した台湾東部沖地震で亡くられた方々に対する哀悼の意と、被災された方々へのお見舞い、そして一日も早い復旧と復興への祈念が述べられた。登壇者および通訳者の簡単な紹介に続き、第一部では台湾伴侶権益推進連盟の共同創設者の許秀雯弁護士と簡至潔事務局長が、台湾のトランスジェンダーに関する状況とトランス・インクルーシブな教育環境とその取り組みについて報告、第二部では、これをふまえ、日本国内の大学の現状と課題についての報告と意見の交換が行われた。

第一部では、許弁護士と簡氏により、台湾のトランスジェンダーを取り巻く環境の変化とキャンパスライフの変化について以下のような報告があった。

台湾は、2004 年にジェンダー平等教育法が制定され、今年で 20 年目を迎える。許氏らが設立した台湾伴侶権益推進は数年前から教員と協力し、英語教材をはじめとする様々な資料をもとにジェンダーに関わる教案を作成している。2008 年に台湾内政部は、性別変更を行う場合、精神科医二名の証明書の提出と生殖器の摘出を要件とする行政命令を出したが、この要件には法的な許可が欠如している。当連盟は行政命令に不服を唱え、2021 年に性別適合手術を受けていないトランスジェンダーの E さんの性別変更に関する訴訟を代行し勝訴した。これは、生殖器を摘出せず性別変更を行った台湾で初めてのケー

スである。引き続き五件の訴訟を代行し、多くのケースで違憲の疑いがあるという判決が下された。つまり、司法の面でのトランスジェンダーに関する法律改正は前進しているが、行政の動きは鈍いというのが現状である。

簡氏は、昨年台湾で開始されたトランス・インクルーシブなキャンパス作りに関する指標を紹介した。教育現場でトランスジェンダーへの対応が開始したのはごく最近のことであり、当事者の不満を耳にしてきたという。この問題を解消するため、トランス・インクルーシブなキャンパスに関する評価指標を作成し、2023 年には台湾の八校がこの評価に参加した。その結果、全ての大学が性別については戸籍上の性別の記載を求めていること、ジェンダーフリーなトイレは全ての大学に設置されているがその設置数は少ないということが明らかになった。さらに、トランスジェンダー学生の入寮に関する明確な規定はないことも明らかになった。ゆえに、安心して大学生活を送るトランスジェンダーの学生は少なく、さらなる具体的な指標や取り組みを提供することが大切であると語る。一回の大きな運動で社会が変わることはないが、小さなアクションの積み重ねが変化をもたらすと強調する。

第二部は、国内三大学でこの問題にかかわる大学教員により報告が行われた。お茶の水女子大学の石丸径一郎教授は、本学が性別未変更のトランス女性の入学を受け入れるまでの経緯（2018 年 7 月 10 日に会見を行い、2020 年度から受け入れ開始）について報告した。欧米の女子大学がトランス女性の受け入れを表明した当時は、トランスに対する風当たりは強くなく、文部科学省と日本学術会議は、トランス女性が女子大学に進学できないとすれば、それは学ぶ権利の侵害であると明言するなど日本側の反応も早かった。こうした風潮の中、本学は 2017 年夏ごろから検討を開始、ワーキンググループを発足して検討し、教授会と役員会で審議し受け入れを決定した。各方面への説明会を経て、2019 年 5 月にガイドラインを策定し、翌年の受け入れに至る。トランス女性の受け入れの有無や人数に関しては未公表としている。学長（当時）は、トランス女性を受け入れる理由として、本学は全ての女性にとっての大学であることと、多様性を構成することの重要性を掲げている。

筑波大学の河野禎之助教は、トランスジェンダーに関する調査の結果と課題について報告した。筑波大学は、日本の大学で公式に LGBTQ＋に関するガイドラインを策定し公表した最初の大学である。例えば、氏名は戸籍変更や医師の診断なしでも変更可能である。同大学は、同性パートナーのいる教職員への対応もあり、福利厚生制度を整備している。全国調査は、国立・公立大学と私大連盟に加盟している大学 308 校を対象に実施した。そこから、日本の大学ではトランスジェンダーに関する制度が整備されているように見えるが、当事者の声が拾われていない現状が浮き彫りになったという。ゆえに、当事者の声を聴くことが今後の課題だと指摘する。

中央大学ダイバーシティセンターの長島佐恵子教授は、センターの活動について報告を行った。当大学は、2017 年に中央大学ダイバーシティ宣言を公表し、多様性を持つ人々が学びと働く機会を損なわない環境づくりを宣言した。ダイバーシティを守ることは命を守ることだという考えを学内で共有し、2020 年にはダイバーシティセンターを設置した。大学入学はトランジション（性別移行）を開始した学生にとって重要な時期であり、入学センターと連携し学生生活を円滑に開始することができるように支援している。

その後、質疑応答が行われ、その熱量からトランスジェンダー、トランス・インクルーシブな環境への関心の高さがわかった。今回のセミナーを通して、基本的人権が守られた社会づくりと、そしてトランスジェンダーの学生が安心して勉学に勤しむことができる環境整備が喫緊の課題だということが明確になった。

記録担当：お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科 4 年 S.M.

IGS セミナー（学内限定）

一緒に学ぼう！性的同意と第三者介入ワークショップ

【日時】2024 年 4 月 24 日（水）16:00～18:00

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604 室（対面）

【講師】

Misha Cade（東京大学総合文化研究科博士後期課程）

今村さくら（一般社団法人ちゃぶ台返し女子アクション、お茶の水女子大学大学院ジェンダー社会科学専攻卒業生）

【司会】

花岡奈央（IGS アカデミック・アシスタント）

【主催】

ジェンダー研究所

『リプロダクティブ・ジャスティス』翻訳プロジェクト

【言語】日本語

【参加者数】18 名

【趣旨】

本セミナーは、「性的同意」「第三者介入」について学ぶ参加型の学内限定ワークショップである。2023 年 7 月 13 日に「強制性交等罪」が「不同意性交等罪」に改正、施行されたことをきっかけに、近年「同意」という概念への注目度は高まり続けている。本セミナーでは、ロールプレイングやグループワークを通して安全で具体的な「性的同意」の例について学ぶ。また、性暴力が起きてしまった時、起きそうな時に重要な「第三者介入」についても理解することができる。

【開催報告】

2024 年 4 月 24 日、「性的同意」を広めるさまざまな活動を行ってきた Misha Cade さんと今村さくらさんをお招きして、「一緒に学ぼう！性的同意と第三者介入ワークショップ」を開催した。

冒頭、参加者らは 3 人グループを作り、ピザを注文するというアイスブレイクを行った。グループで 1 つのピザを注文すると仮定して、どのようなピザを注文するかをみんなで話し合うというものである。サイズは何か、アレルギーはないか、そもそもピザは好きかどうか、今おなかは空いているかなど、日常の中で自然に行われる会話のやり取りは、まさしく「同意」を取る行為そのものであることを確認した。

「同意」が取れていない状況では、相手のバウンダリー（自分と他人の適切な境界線）を侵害することになり、性暴力につながる恐れがある。また、性暴力は、属性に関わらず誰しもが被害者・加害者にな

る可能性がある。子どもや LGBTQ、身近な関係性（家族、友人間）であるなど、より声を上げづらい立場や環境であるほど性暴力に合いやすいという統計調査もある。自分や大切な人を性暴力から守るためには、「性的な言動の前に積極的に意思確認を行う」という意味での「性的同意」が必要不可欠である。

次に、性暴力を未然に防ぐ方法として、被害者・加害者ではない「第三者」の存在も非常に有効であることが提示された。「サークルの飲み会で酔っ払った友人が、その後先輩から性被害にあった」というシナリオを元に、どのように「第三者介入」ができたのかをグループで話し合い、発表を行った。「第三者介入」の方法として、加害者にやめてもらうように声をかけることが想像されがちであるが、５D’s（直接介入、気をそらす、委任する、証拠を残す、後から介入する）など他にも様々な方法があることが紹介された。

最後に、「性的同意」だけでは性暴力は根絶しない現状も触れられた。性暴力は不平等を生み出す社会構造を改善しない限り解決はされず、法律上で定義される「性的同意」だけでは限界がある。私たちが持つ自己決定権（自分の身体のことを自分で決める権利）が侵害されない状況、つまり正義（ジャスティス）が達成されるためには、単なる「同意」だけではなく、妊娠、中絶、親になること、子育てなどの権利も同時に考えなければならない。こうして初めて、リプロダクティブ・ジャスティスの実現に近づくことができる。しかし、はじめの一歩として、個人の恋愛関係の中で「同意」を積み重ねていくことが、ジェンダー不平等な世界で生きていく上での日常的な「プチ・レジスタンス」につながるというポジティブなメッセージと共に終了した。

記録担当：花岡奈央（IGS アカデミック・アシスタント）

IGS セミナー（学内限定）

メディアにおける『炎上』の構造と発信者としての私たち

【日時】2024 年 6 月 14 日（金）14:00～13:20
【会場】人間文化創成科学研究科棟 604
【基調講演】
治部れんげ（ジャーナリスト、東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授）
【パネリスト】
宮川さおり（共同通信津支局長）
河原千春（お茶の水女子大学博士前期課程ジェンダー社会科学専攻／信濃毎日新聞社記者）
【司会】
浅野優菜（お茶の水女子大学博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）
唐井梓（お茶の水女子大学博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）
【主催】ジェンダー研究所
【言語】日本語
【参加者数】34 名
【趣旨】

本セミナーでは SNS などのメディアにおける特定の主張・広告に対する大規模な否定的な反応、すなわち「炎上」が再生産される構造をジェンダーの視点から検討する。第一部では、メディア業界で活躍する講演者がメディア業界のジェンダーバランスやバイアス、またそれを変革するためにできることなどを述べ、第二部では新聞社に勤務するパネリストらが加わり、ジェンダー意識やジェンダー視点の偏った認識を内面化した人々が報道機関にも存在する現状にどう対抗すべきかなどについて議論した。

【開催報告】

第一部ではジャーナリストであり、東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授の治部れんげ氏が登壇した。講演ではまず、テレビや新聞、雑誌などのオールドメディアと、インターネット普及後に発達した web 媒体のニュースや SNS などのニューメディアにおける作り手や経営形態、規制などの特徴についての整理が行われた。次に、日本マスコミ文化情報労組会議の『メディアの女性管理職割合調査の結果について』（2020）をもとに、新聞 3.1%[1]、放送 1.5%[2]、出版 8.3%[3]という、メディア業界に女性役員が未だ少ないという問題点が指摘された。

さらにメディア業界が他業種と比べて高収入であるがゆえに、片働きで家族を扶養できるという状況が、長時間労働や男性大黒柱モデルという旧態依然とした働き方を存続させていると指摘され、このようなジェンダー規範を内面化した作り手が制作する番組や記事などのコンテンツには、この偏ったジェ

[1] 新聞労連に労組が加盟する新聞社・通信社（回答 41 社）の女性役員割合
[2] 在京・在阪のテレビ局（回答 12 社）の女性役員割合
[3] 出版労連に労組が加盟する出版関連企業ならびにそれ以外の出版関連企業（回答 41 社）の女性役員割合

ンダー規範が反映されるという、ジェンダーバイアスが再生産される仕組みが説明された。最後に、ジェンダーバイアスのある記事や番組に対し受け手として何ができるかに関して、第一に、意見を送る時は宛先を明確にすること、つまり媒体や掲載時期、問題的な箇所を正確に把握し送り先の焦点を定めること。第二に、異なる立場の人にも伝わるように学術的専門用語ではなく、伝わる言葉で表現することという戦略的で具体的なアクションが示された。

続いて第二部では、共同通信津支局長である宮川さおり氏と信濃毎日新聞社の記者であり、お茶の水女子大学博士前期課程の河原千春氏を加え、治部氏と 3 名でパネルディスカッションが行われた。

宮川氏は、記者やデスクとして活躍してきた自身の経験に触れながら、メディア業界のジェンダーやセクシュアルマイノリティの問題の捉え方の変化や、社内でも部署によってジェンダーの視点を記事に盛り込む難しさが異なることなどを述べた。宮川氏は報道各社で原稿作成時に用いられる共同通信社の記者ハンドブックの LGBT に関する箇所の作成にも携わっており、差別を再生産しないために原稿で使う言葉を慎重に選択することの重要性を指摘した。

次に、河原氏が共同通信社と地方新聞社が補完の関係にあることを説明し、自身の経験を振り返りながら産業的な構造と関係した新聞社の長時間労働の問題を提示した。河原氏が所属する信濃毎日新聞では共同通信社の記者ハンドブックを使用しており、ジェンダーに関する用語が記載されたハンドブックを示すことで、性差別的な表現について社内で指摘することが可能になったと述べた。

その後 3 氏によるパネルディスカッションが行われ、メディア業界における以下の問題が共有された。

（1）ジェンダーの視点を入れた記事を紙面や web 上で公開することやジェンダー差別的な表現を指摘することの難しさと葛藤
（2）ジェンダーの問題は女性だけのものとして捉えられる風潮
（3）メディア業界の給与の相対的な高さから男性稼ぎ型モデルが強く残っており、パートナーに献身的で家事に従事する専業主婦規範が崩れにくいこと
（4）報道各社ともに制度上・規則上は、昇進などにおいて明確な男女差別が規定されているわけではないが、結局トップに選任される女性が少ないこと

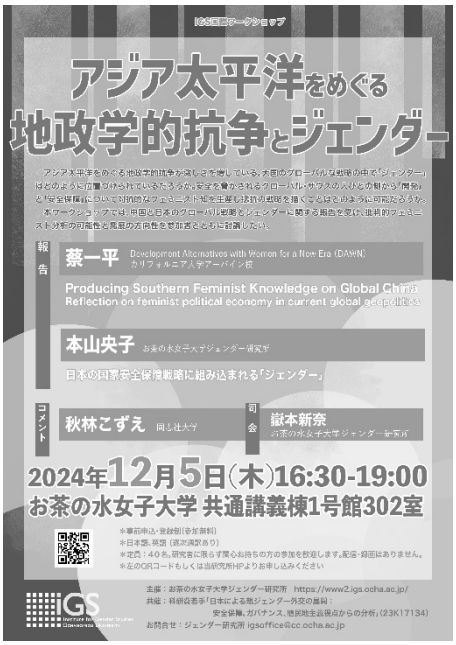
また、2015 年以降の SDGs の普及や 2017 年の#MeToo 運動の影響などから、社会の規範やマーケティング、広告の面からメディア業界も変化していることも指摘された。

その後質疑応答が行われ、「差別的な意見を持つ人にどのように対応するか」という問題について、治部氏から、デジタル上でのアプローチは限界がある一方、対面で継続的な関係においては自分の発言から相手が変わることもあると回答があった。また、宮川氏からは、半径 1m 以内、非常に身近な存在については自分の意見を表し続けることでその人の意識は変革されるという考えが示され、記者であれば記事、研究者であれば論文という表現手段がある、ということも述べられた。河原氏からも、実際に自身も記事を書く時に差別的な発言をする人がどうしてそうなってしまったのか歴史的・社会構造的な視点からも考え、ときほぐすような記事を書けるように努力しているとの回答があった。また治部氏から、どのような伝え方をすれば相手に効果的に訴えかけることができるかを考慮し、時には数字や経済的な指標を用いて説明することの重要性も示された。

最後に参加者から、自身が経験したジェンダー問題を共有できる、今回のセミナーのような場があるということ、問題を共有し話し合える対話の場をつくり続けることの必要性が述べられ、セミナーは終了した。　　記録担当：小林咲嬉（お茶の水女子大学博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）

IGS 国際ワークショップ

アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー



【日時】2024 年 12 月 5 日（木）16:30～19:00

【会場】共通講義棟 1 号館 302 室（対面）

【報告】

蔡一平（カリフォルニア大学アーバイン校博士後期課程／Development Alternatives with Women for a New Era （DAWN））「Producing Southern Feminist Knowledge on Global China: Reflection on feminist political economy in current global geopolitics」

本山央子（IGS 特任リサーチフェロー）

「日本の国家安全保障戦略に組み込まれる『ジェンダー』」

【コメント】秋林こずえ（同志社大学教授）

【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【共催】科研費若手「日本による親ジェンダー外交の展開：安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析」（23K17134）

【言語】日英（逐次通訳有）

【参加者数】38 名

【趣旨】

近年、アジア太平洋をめぐる地政学的抗争の緊張度が高まっているが、日本と中国はイデオロギー的に「異なる」のか、双方のグローバルな戦略の中で「ジェンダー」はどのように位置づけられるのか。さらに、グローバル・サウスの側から「開発」と「安全保障」について対抗的なフェミニスト知を生産し、抵抗の戦略を描くことは可能だろうか。本ワークショップでは、中国と日本のグローバル戦略とジェンダーに関する二つの報告を受け、批判的フェミニスト分析の展望についてコメンテーターそして参加者からの質問を交えた討論が行われた。

【開催報告】

報告者の一人目の蔡一平氏は、冒頭で中国の国際社会における影響力が拡大する中で、それに対する研究やメディアの関心は高まっている一方、女性の発展やジェンダー平等に関する国際的取組が強化されている側面には十分な注意が払われていないことを指摘した。このため、グローバル・サウスのフェミニスト研究者・活動家のネットワークである DAWN は、2022 年から中国のグローバル・サウスへの関与におけるジェンダー影響を分析する研究プロジェクトを立ち上げた。報告では、まず中国の開発協力おけるジェンダー概念に関して三つの特徴が示された。第一に、中国の公式言説において女性は子ども、高齢者、障害者と並ぶ脆弱な集団に分類されているが、同時にその潜在能力とエージェンシーも認識され、女性の能力の発展が社会の繁栄や国家の経済発展に資するとされている。また、ジェンダーは男女の二項に焦点が当てられ、性的指向やジェンダー・アイデンティティへの支持は消極的である。この戦略的曖昧さは中国政府の外交原則「求道存异」を反映している。第二に、南南協力ではノン・コン

ディショナリティと領域外義務の間に緊張関係があり、ジェンダー主流化のための一貫したアプローチは存在していない。第三に、国際開発イニシアティブの言説と現実の間にはギャップがあり、公的文書にはジェンダー平等に関する記載はあっても、中国側および受入国側のジェンダー意識は低い。次に、DAWN の調査から得られた主な結果が共有された。ジェンダー影響については正と負の両面があり、インフラや人道プロジェクトは女性たちに利益をもたらしている一方、市民社会や女性団体の参加が欠如した状況でジェンダー平等に変革をもたらすかは疑問がある。考察では、DAWN の研究がジェンダーの視点から南南協力を再考する必要性を示唆しており、特に国際開発協力においてジェンダー平等の達成や女性の人権尊重はコンディショナリティとしてではなく、各国の開発アジェンダに統合されるべき目標であることが強調された。連帯と対話を通じてフェミニスト・アジェンダを再想像することが今後の重要な課題である。

次に本山央子氏は、日本が中国のような権威主義的国家からの脅威に対し、民主主義、人権、法、支配など「普遍的価値」に基づく地域秩序を守るため、急速に軍事大国として台頭しつつあること、その中でジェンダーが安全保障戦略の一部として継続的に推進されてきたことを指摘した。報告ではまず、冷戦後の日本の安全保障の再構築とジェンダー主流化の概略が説明された。1990 年代の湾岸戦争を契機に日本は非軍事的憲法から離脱し、「共通の価値」に基づく「日米の固い絆」を強調しながら、国際秩序を維持する責任を持つ新たな「男性的な日本」の再構築を試みた。しかし同時期の「慰安婦」被害者による正義の要求は、保守派の反発を招いた。2000 年代に日本はアフガン戦争の復興支援を通じて、ジェンダー主流化を推進する WPS（女性・平和・安全保障）の重要性を認識し、対テロ戦争への関与の中で、自国の安全保障と経済成長のために国際安全保障に関与する必要性を再認識した。2010 年代に成立した第二次安倍政権は「積極的平和主義」を掲げ、2013 年に国家安全保障戦略を策定した。この文脈で「普遍的価値」に基づく国際秩序の維持は「国益」の一部となり、女性活躍や女性保護に向けた国際協力が強調された。こうした状況は 2022 年のウクライナ侵攻以降、さらに変化している。岸田政権は軍事能力の拡張を強力に促進し、2017 年から「普遍的価値」に基づく地政学的・地経学的地域戦略である FOIP（自由で開かれたインド太平洋）が推進されてきた。しかし「普遍的価値」は日本の利益促進を国際的公共善として正当化するものであり、この中で中国は「普遍」に反する危険で異常な他者として位置づけられ、ジェンダー平等は「弱者」を保護する権力主張として表れている。こうした「普遍的価値」を掲げた軍事力の拡大と国際安全保障の推進は、人権侵害を悪化させる危険性を持つ。これに対抗するフェミニスト実践の可能性として、報告では政策対話に関与し、その枠組みを問うこと、さらにフェミニスト政治経済学の視点から国家予算や資源配分を検討する必要性が提起され、その過程でグローバル・サウスとの節合が不可欠であることが強調された。

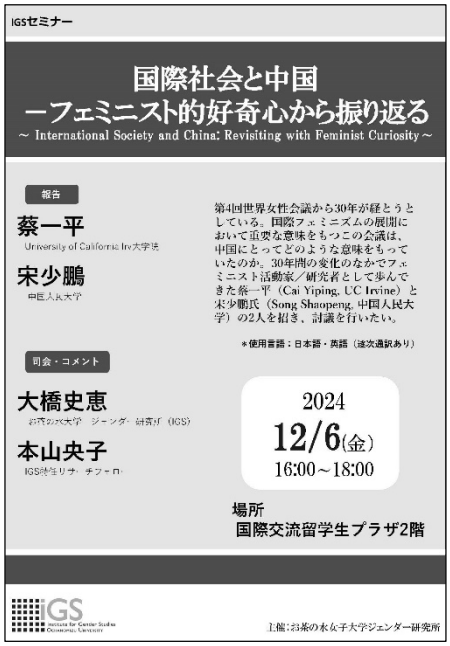
コメンテーターの秋林こずえ氏からは、トランスナショナルなフェミニストたちの連帯による平和活動の実践として「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク（IWNAM）」および「武力紛争予防のためのグローバルパートナーシップ 北東アジアプロセス(GPPAC NEA)」の取組が紹介された。また、蔡氏には北東アジアにおけるフェミニストと市民社会の対話構築の可能性、本山氏には WPS の地域計画の策定に向けた展望について質問がなされた。さらにフロアからは、現在の中国における変革の難しさや、日中の立場を越えたフェミニスト対話構築について質問があった。過去の歴史を踏まえた対話の再活性化と、地政学とフェミニスト政治経済学の両視点から新しいフレームワークを形成する重要性が再認識され、ワークショップは閉幕となった。

記録担当：高橋麻美（お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

IGS セミナー

国際社会と中国

フェミニスト的好奇心から振り返る



【日時】2024 年 12 月 6 日（金）16:00～18:00

【会場】国際交流留学生プラザ 2F 多目的ホール（対面）

【報告】

蔡一平（カリフォルニア大学アーバイン校博士後期課程／Development Alternatives with Women for a New Era （DAWN））

宋少鵬（中国人民大学教授）

【司会・コメント】

大橋史恵（IGS 准教授）

本山央子（IGS 特任リサーチフェロー）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（逐次通訳有）

【参加者数】23 名

【開催報告】

本ワークショップでは、北京で開催された第 4 回国連世界女性会議から 30 年という節目において、国際社会と中国の関係をフェミニスト的視点から振り返ることを目指した。大学院生をはじめとした若手研究者らを主たる参加者として設定し、フェミニスト活動家／研究者の蔡一平氏（Cai Yiping, UC Irvine）と宋少鵬氏（Song Shaopeng, 中国人民大学）の 2 人とともに、この 30 年間の変化についてともに考え、討議を行った。

ワークショップでは最初に宋少鵬氏から、gender という概念が中国大陸に導入される経緯を振り返る報告がなされた。社会主義中国では、マルクス主義女性解放理論において女性の解放はすでに達成された課題と位置づけられ、女性の課題を問うことは、封建遺制やブルジョワイデオロギーの問題とみなされていた。改革・開放を経た 1980 年代以降の中国社会において、女性たちはさまざまな問題に直面していたのだが、そのような課題に取り組むには合理的な説明が必要であった。この局面において gender は非常に有効な理論的視点を提供した。ジェンダー分析の枠組みを導入することによって、次のような説明が可能になった。1 つには縦の時間軸の比較において、女性の物質的生活条件が発展し、生活水準が向上していくことで、客観的にどのような変化が起きたのかということをとらえられるようになった。さらに横軸の比較を行い、女性と男性の間の格差が際立っていることを指摘できるようになった。ジェンダーという視点が導入されたことで、伝統的な理論（マルクス主義女性解放論）や主流の価値観（改革開放や経済発展）と対立することなく、経済改革や現代化の路線を支持する態度を保ちながらも、その過程で生じる女性たちの課題に向き合うことが可能になった。

1990 年代に世界女性会議を経て、国際援助機関とその支援プロジェクトの後押しが広がると、「女性と発展/開発」(WID)や「ジェンダーと発展/開発」(GAD)の言説が学術界と実践界の双方で急速に広まっ

た。この流れは、時代的なタイミングに合致するものであったとともに、中国婦女連合会の能動的参与があったことで実現した。中国国内における女性の動員において婦女連は強力なパートナーシップを発揮した。またかつて「知識青年」として農村改革に熱心に身を投じた社会層が、再び自らの知識やネットワークを生かして農村女性たちのエンパワーメントに取り組んだことの意味も大きかった。宋少鵬氏は、1990 年代の中国において gender 概念が導入されたことの背景には、社会主義的な国家のイデオロギーとガバナンスのシステムのなかに正統な位置を占め、共通の人生経験や理想の情熱をもっていた人びとが、体制内外の力を容易に結びつけることができたのだと解説した。

次に蔡一平氏は、1995 年に北京で開催された国連第 4 回世界女性会議と、1949 年に北京で開催されたアジア女性会議という 2 つの会議を振り返りながら問題提起を行った。

1995 年の第 4 回世界女性会議（4WCW）、NGO フォーラム、そしてその影響については、30 年にわたる膨大な物語、回想、研究がある。これらの物語は、誰がどの部分を語るか、誰の経験が考慮され、誰が排除されるかによって異なる。国連会議では、ヒラリー・クリントンが「女性の権利は人権であり、人権は女性の権利である」と語ったことが知られる。一方で北京郊外の懐柔県において開催された NGO フォーラムは、中国の参加者にとって、トランスナショナルなフェミニズム運動、新しい用語や概念（ジェンダーや NGO など）、さらにはレズビアン活動や障害者権利活動といった新しい世界に初めて触れる機会となった。

1949 年の「アジア女性会議」は、WIDF 主催、中華全国民主婦女聯合会（ACDWF）共催によって北京で開催された。この会議には、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、ヨーロッパ、そしてアメリカから 23 カ国 197 名の代表が参加し、中国国内からは 2000 人以上の代表者が傍聴した。この会議は、社会主義陣営における女性組織が戦後の女性の新しい秩序を共同で計画するための重要なアクションとなり、世界中の左派女性たちが反帝国主義と反植民地主義を目標に強力な連帯を築く場となった。

蔡はこうした経緯をふまえつつ、「女性」を進歩やモダニティの表徴としようとする支配的な国家ナラティブを覆す上で、フェミニズムという運動のトランスナショナルな性質を考え続けていくことの重要性を示唆した。

会場にはフェミニズムに心を寄せる中国出身の留学生や、日本の学生たち、またそれ以外の国の学生たちが集まり、熱心に質疑応答に参加していた。そのような姿に、互いの状況について知り、考え、有効な手段を学びあっていくことが、言論や集会に対する制約や、安定的な社会的再生産に資するような「女性」像の称揚を乗り越えていく歩みになるのだという思いを新たにした。

記録担当：大橋史恵（IGS 准教授）

IGS セミナー

沖縄における共有地とジェンダー

家父長制と軍事化の相関を問う

【日時】2025 年 2 月 10 日（月）16:00〜18:00

【会場】共通講義棟 2 号館 102 室（対面）

【報告】

桐山節子（同志社大学嘱託研究員）

「沖縄における共有地の軍事化と女性の立場」

【コメント】

戸邉秀明（東京経済大学教授）

大橋史恵（IGS 准教授）

【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】73 名

【趣旨】

近代資本主義の基盤となってきた私的所有に対し、オルタナティブな経済社会のあり方を構想する基盤として、〈コモンズ〉が注目されている。本セミナーは、2024 年 7 月開催 IGS 国際シンポジウム「フェミニズムとコモニング」に続くものであり、家父長制と所有の問題について議論が交わされた。

沖縄において土地や資源の共有は家父長制秩序と密接に結びついてきた。この結びつきは近代化の中でも解体されることはなく、米軍統治を経てさらに強固に再秩序化されてきた。本セミナーでは、米軍基地の軍用地料をめぐる沖縄の女性たちの闘争について、桐山節子氏が報告し、沖縄近現代史を専門とする戸邉秀明氏と、現代中国研究を専門とする大橋史恵氏がコメントを行った。

【開催報告】

報告者の桐山節子氏は、2019 年刊行の単著『沖縄の基地と軍用地料問題――地域を問う女性たち』（有志舎）に新たな知見を加え、「沖縄における共有地の軍事化と女性の立場――接収された総有の軍用地から」と題する報告を行った。

桐山氏の報告は、1990 年代から 2000 年代にかけて沖縄県国頭郡金武町で展開された、米軍基地の軍用地料獲得をめぐる女性たちの運動をとりあげた。金武町金武区の入会団体（共有地である入会地を共同で利用・管理する団体）では、設立以来、軍用地料の配分対象であり議決権を持つ正会員は男子孫のみに限定されてきた。女子孫が正会員から除外される状況は、女性差別として問題視された。2002 年に始まった杣山訴訟では、金武区の女子孫によって結成された「人権を考えるウナイの会」（以下、「ウナイの会」）のメンバーが原告となり、金武入会団体を提訴。特に、他出自の配偶者と婚姻した女子孫の入会資格が争点となった。桐山氏によれば、「ウナイの会」の特徴は、会則の改正を求めつつ、基地賃貸料の獲得と同時に地域の基地被害への抗議も行っていた点にあるという。原告らは戦中・占領期を経験し、

男性と同様に働き続けてきた労働者であったことが、女性差別を許さない運動へとつながったのではないかと指摘する。また、軍用地料獲得の動きの背景には当時の経済悪化も存在し、「金目の問題」と評されることもあった。しかし現在では、ジェンダー問題として認識され、議論されている。

第一コメントとして戸邉氏は、主に 3 点を指摘した。1 つ目は、入会権を男系直系子孫に限定する家父長制的な「旧慣」は、近現代沖縄の政治のなかで形成された比較的新しい「創造された伝統」ではないかという点である。桐山氏の単著は、この「作られた伝統」としての家父長制を実証的に跡付けた労作であると評価する。2 つ目は、反基地運動への参加と軍用地料の獲得を求める運動は「矛盾」であるのかという点である。戸邉氏は、人権や生存、解放を求める際に「矛盾」と映るのは、その要因が社会構造の側にあると指摘する。3 つ目は、女子孫の権利拡大は本当に女性たちの「勝利」と言えるのかという点である。コミュニティの再生産危機によって会員資格の変更が容認されたが、ウナイの会等の女性メンバーの高齢化が進むなかで、その継承が可能なのかという疑問が呈された。また、土地所有権からの女性排除を、前近代の家父長制以来の普遍（自然）とみなして議論するのではなく、土地所有史の議論がジェンダー研究を含めた近接する研究領域へ開かれることの重要性を強調した。

第二コメントとして大橋氏は戸邉氏の議論を受け、沖縄の地代上昇の契機として、島ぐるみ闘争・本土復帰・1995 年の少女暴行事件が大きく関与している点を指摘した。新開地の女性たちとウナイの会の複雑な関係に触れ、少女暴行事件を契機に地代が上昇したこと、そしてその支払い・受け取りの決定から女性が排除されている点に注目する必要があると述べた。また、中国においては農地の使用権が世帯単位であることを指摘する。背景には、夫方居住婚を前提とした男性優位主義や、一人っ子政策と結びついた男児選好があり、そのために女性は土地を分配されず、結婚時に土地へのアクセスを失うことで社会的地位の低下につながるという。大橋氏はこのようなローカルな「伝統」が市場経済の中で深刻な問題として顕在化しており、沖縄の状況とも連動していると述べ、「伝統」の見直しが必要だと指摘した。植民地化の歴史的過程において、新開地は生産手段（土地）へのアクセスから排除されてきた女性たちを包摂してきたのではないかと指摘する。性暴力問題や新開地の盛衰と、入会地といった土地への女性のアクセスとの相互関係についても言及し、桐山氏へ「フェミニスト的なコモニングの模索は可能か」と問いかけ、コメントを締めくくった。

質疑応答では、琉球王国時代から続く沖縄の門中制度と、議論の対象となった分配金制度との関連性、本土と沖縄の入会地制度の相違点について質問が寄せられた。また、本セミナーのポスターにある趣旨説明についても解説を求める声が上がった。本セミナーは、本学外部からの参加者が多く、属性や年代も様々であった。質疑応答でも普段のジェンダー研究を扱うセミナーとは異なる雰囲気で、戸邉氏が積極的に応答する場面が多かった。沖縄の軍用地という複雑な問題は、入会地の利権や運動のみならず、歴史的な経済状況、相続・所有をめぐる政治・法律の視点からの議論が必要である。戸邉氏のコメントにもあったように、歴史学的な土地をめぐる議論にはジェンダー視点が非常に欠けており、これは土地所有とも関連する反基地闘争においても同様である。米軍基地・軍用地、ひいては土地・所有とジェンダーについての議論は今後も深めていくことが望まれる。

記録担当：髙橋奏音（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻）

▶ 2024 年度 主催 IGS 研究会詳細

IGS 研究会（学内限定）

IGS 研究協力員研究報告会

【日時】2025 年 3 月 7 日（火）11：00～15：00

【会場】人間文化創成科学研究科棟 408 室

【報告】

板井広明（専修大学教授／IGS 研究協力員）

「ベンサムの性的快楽主義の位相:同性愛行為の非犯罪化論と女性の地位の変革」

左高慎也（独立行政法人日本学術振興会特別研究員（PD）／IGS 研究協力員）

「フェミニスト制度論的政治理論に基づいた『ジェンダー平等のための議会』の考察：制度の『経験的分析』から『規範的構想』へ」

仙波由加里（一般社団法人ドナーリンク・ジャパン代表理事／IGS 研究協力員）

「日本における精子の親族提供」

英美由紀（藤女子大学教授／IGS 研究協力員）

「モナ・アワド『ファットガールをめぐる 13 の物語』：ケア、ネットワーク、第四波フェミニズム」

平野恵子（横浜国立大学准教授／IGS 研究協力員）

「インドネシア家事労働者保護法案を取り巻く現状」

【挨拶・コメント】戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授）

【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】18 名

【趣旨】

お茶の水女子大学ジェンダー研究所では研究所に在籍している研究協力員に自身の研究紹介も兼ねて、研究報告することを義務づけている。2024 年度は板井広明氏、左高慎也氏、仙波由加里氏、英美由紀氏、平野恵子氏の 5 名が当研究所の研究協力員として研究活動を行い、その成果報告として 2025 年 3 月 7 日に IGS のメンバーや学内研究者に向けてそれぞれの研究について報告した。

【開催報告】

2025 年 3 月 7 日、お茶の水女子大学ジェンダー研究所の研究協力員研究報告会を開催し、2024 年度の IGS 研究協力員であった板井広明氏（専修大学）、左高慎也氏（学振 PD）、仙波由加里氏（ドナーリンク・ジャパン）、英美由紀氏（藤女子大学）、平野恵子氏（横浜国立大学）の 5 名が報告した。

板井氏は「ベンサムの性的快楽主義の位相：同性愛行為の非犯罪化論と女性の地位の変革」というタ

イトルで報告した。哲学者であり経済学者でもあるジェレミ・ベンサムは功利主義を提唱したことで有名だが、板井氏は、ベンサムが功利性の原理に基づき同性愛の非犯罪化について論じたテクストを取り上げ、その理論的根拠を提示した。「正不正の規準」によって判断される功利性の原理においては、同性愛は加害/被害の関係を生まないために犯罪ではないとの帰結が導かれる。こうした既存の性道徳批判が必然的に宗教批判に留まらず、性別役割分業への懐疑、女性参政権の推進、中絶の非犯罪化、性的快楽に関する職業、さらには結婚制度への再検討へつながっていったことが示された。

左髙氏は「フェミニスト制度論的政治理論に基づいた「ジェンダー平等のための議会」の考察：制度の「経験的分析」から「規範的構想」へ」というタイトルで報告した。2000 年代から提唱され始めたフェミニスト制度論は、一見ジェンダー中立的な政治制度が実のところジェンダー不平等を再生産していることを経験的、実証的に明らかにしてきた。しかし左髙氏は、現実政治に存在する制度を経験的に説明するための枠組みとして理解されてきたフェミニスト制度論を、むしろジェンダー平等を実現するための望ましい制度を構想するための理論として活用すべきという立場に立つ。報告では、ジェンダー平等の実現に向けた未来のあるべき議会制度として、現在各国で実施されている「ジェンダーに配慮した議会」の構想を批判的に検討したうえで、左髙氏が構想する「ジェンダー平等のための議会」が紹介された。

仙波氏は「日本における精子の親族提供」というタイトルで報告した。日本では日本産科婦人科学会のガイドラインによって精子ドナーは匿名を原則としてきたが、ドナーの匿名性が保障できない時代となりドナー不足が深刻化しているという。仙波氏は、無精子症カップルに親族や知人から提供された精子で体外受精や顕微授精を実施したクリニックの実施データとこの医療を希望した無精子症カップルへの面談に基づいて親族間提供の実態を調査し、丁寧な説明と面談を重ねることによって非匿名提供でもトラブルの発生は抑制できることを提示し、同時に、当事者のみならず社会一般でも不妊カップルへの理解や精子提供への意識改革を促す必要性を説得的に提起した。

英氏は「モナ・アワド『ファットガールをめぐる 13 の物語』：ケア、ネットワーク、第四波フェミニズム」というタイトルで報告した。『ファットガールをめぐる 13 の物語』はカナダ出身のモナ・アワドが 2016 年に上梓したデビュー作で高い評価を受けた作品である。主人公の高校時代から大学進学、卒業後の派遣の仕事、結婚、離婚を経て数年後までを断続的に描いた 13 の短編は、彼女の肥満した体型やダイエットによる変化、そしてそれらと関連する人間関係を軸に展開される。報告では、作中に描かれる美容行為を「ケア」や「ネットワーク」の観点から読み解きつつ、作品には第四波フェミニズムの思潮とも合致する日常的差別の政治問題化という通奏低音が一貫して流れていることを提示した。

平野氏は「インドネシア家事労働者組織化を取り巻く現状」というタイトルで報告した。2025 年 2 月に 21 年目を迎えたインドネシア家事労働者保護法案は 2020 年に優先審議法案に昇格するも国会で主要 2 政党の反対によって最終審議が通らないまま会期が終了してしまった。この結果を受けて平野氏は、家事労働者組織化の経緯と現状を整理すべく、家事労働者アドボカシー国内ネットワークである Jala PRT の活動経緯を分析した。インドネシアにおいて家事労働者は労働法の適用除外とされ、権利が保障されていないがゆえに家事労働者保護法案の成立を求めて活動が始まったこと、しかし、同じ家事労働者でも移住家事労働者は外貨獲得の手段として国家開発計画に入ったが、国内の家事労働者は政治的経済的戦略性が見出せないために不可視化されたままであることが報告された。

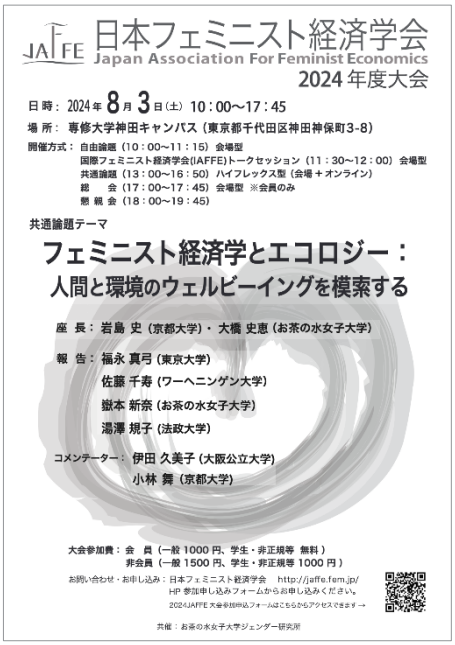
5 名からの多岐にわたるテーマの報告に、参加者の間からも様々な質問やコメントが寄せられ、活発で充実した議論が交わされた。

記録担当：嶽本新奈（IGS 特任講師）

▶ 2024 年度 IGS 後援・共催イベント

日本フェミニスト経済学会 2024 年度大会

フェミニスト経済学とエコロジー
人間と環境のウェルビーイングを模索する



【日時】2024 年 8 月 3 日（土）10:00〜17:45

【会場】専修大学（神田キャンパス）2 号館

【座長】岩島史（京都大学）、大橋 史恵（お茶の水女子大学）

【報告】

佐藤千寿（ワーゲニンゲン大学）
「ケアリング経済に向けて：ポスト資本主義フェミニスト・ポリティカル・エコロジーの視点から」

湯澤規子（法政大学）
「女性の社会活動とヒューマン・エコロジー：19 世紀〜20 世紀のアメリカ合衆国と日本を事例として」

嶽本新奈（お茶の水女子大学）
「反公害／環境運動で見落とされてきたケア労働：苓北石炭火力発電所建設反対運動を事例として」

福永真弓（東京大学）
「あわいものから見る世界：サーモンとエコフェミニズムの交わるところ」

【コメント】

小林舞（京都大学）、伊田久美子（大阪公立大学）

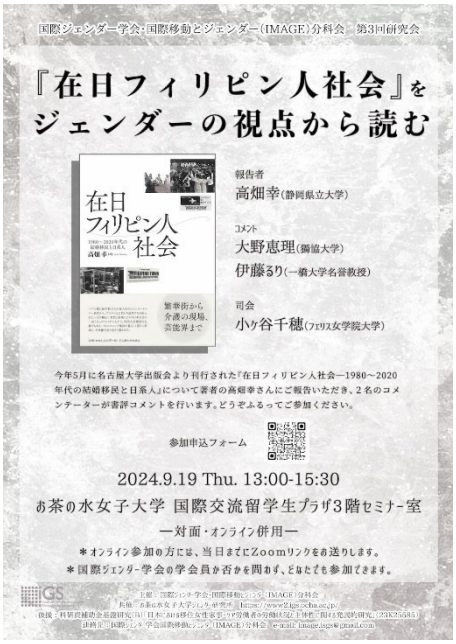
【主催】日本フェミニスト経済学会

【後援】お茶の水女子大学ジェンダー研究所

IGS 共催研究会

国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー（IMAGE）分科会

『在日フィリピン人社会』をジェンダーの視点から読む



【日時】2024 年 9 月 19 日（木）13:00～15:30

【会場】ハイブリッド開催（お茶の水女子大学国際交流留学生プラザ 3 階セミナー室、Zoom ウェビナー）

【報告者】

高畑幸（静岡県立大学）

「『在日フィリピン人社会』をジェンダーの視点から読む」

【コメント】

大野恵理（獨協大学）

伊藤るり（一橋大学名誉教授）

【司会】

小ヶ谷千穂（フェリス女学院大学）

【主催】

国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー（IMAGE）分科会

【共催】ジェンダー研究所

【後援】科研費基盤研究（B）「日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究」（課題番号：23H00888）

4. 国際研究ネットワーク

1）国際的な共同研究・研究交流

2）UTFORSK プロジェクト

3）国内外招聘研究者一覧

１）国際的な共同研究・研究交流

■ジェンダー研究所所属の研究者が 2024 年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

海外研究者氏名	所属機関（職位）
黄長玲	国立台湾大学（教授）
楊婉瑩	台湾国立政治大学（教授）
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所（研究委員）
Jiso Yoon	韓国女性政策研究院国際協力センター（センター長）
Devin K. Joshi	Singapore Management University（准教授）
日下部京子	アジア工科大学院大学（AIT）（教授）
Jung Hwan Lee	ソウル大学（准教授）
Eun Jeong Cho	韓国国家安保戦略研究院（研究員）
Ji Hyung Lee	淑明女子大学（教授）
Eun Kyung Lee	ソウル大学（准教授）
Celeste Arrington	George Washington University（准教授）
Kazue Harada	Miami University (Associate Professor)
Sunyoung Yang	The University of Arizona (Assistant Professor)
Andrea Gevurts Arai	University of Washington (Assistant Professor)
Chong Eun Ahn	Central Washington University (Associate Professor)
Lin Li	University of St. Thomas (Assistant Professor)
Belinda Qian He	University of Oklahoma (Assistant Professor)
Linda White	Middlebury University（Professor）
Ayako Kano	University of Pennsylvania（Professor）
Melissa Deckman	Public Religion Research Institute（CEO）
Yumi Moon	Stanford University（Professor）
Chizu Sato（佐藤千寿）	Wageningen University (Lecturer)
Wendy Harcourt	Erasmus University in The Hague (Professor)
宋少鵬	中国人民大学（教授）
Cai Yiping（蔡一平）	University of California Irvine (Ph.D. Candidate)

■ジェンダー研究所所属の研究者が 2024 年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

海外研究者氏名	所属機関（職位）
鐘仁耀	華東師範大学（教授）
李晶	華東師範大学（副教授）
張継元	華東師範大学（講師）
王橋	中国社会科学院（研究員）
Petrice R. Flowers	University of Hawai'i—Mānoa (Professor, Political Science)
france rose hartline	日本学術振興会外国人特別研究員

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

アジア工科大学院大学（AIT）環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

【担当】日下部京子（AIT 教授）、申琪榮（IGS 教授）、嶽本新奈（IGS 特任講師）
【共同研究・研究交流の概要】
国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」（本学と AIT の博士前期課程の院生が双方の国を訪問し、研究調査ならびに研究交流を行う短期交換研修プログラム）を 2001 年の開始時から毎年、ジェンダー研究所とともに運営しているほか、所属教員らが研究交流を続けている（本報告書 52 頁参照）。

ソウル大学日本研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）
【共同研究・研究交流の概要】
学術雑誌『日本批評』海外編集委員を務める。

西江大学社会科学研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）
【共同研究・研究交流の概要】
『社会科学研究』編集委員。

釜山大学女性学研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）
【共同研究・研究交流の概要】
『女性学研究』編集委員。

イギリス政治学会学術雑誌 *Politics*

【担当】申琪榮（IGS 教授）
【共同研究・研究交流の概要】
Politics 編集委員。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

George Washington University, Elliott School of International Affairs, Sigur Center for Asian Studies

【担当】申琪榮（IGS 教授）
【共同研究・研究交流の概要】
サバティカル中の Visiting Scholar として所属

華東師範大学

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）
【共同研究・研究交流の概要】
科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」の分担者として現地研究者との協力において調査を実施している。

中国社会科学院

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）
【共同研究・研究交流の概要】
科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」の分担者として現地研究者との協力において調査を実施している。

ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

【担当】戸谷陽子（IGS 所長）、石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長）、吉原公美（お茶の水女子大学リエゾン・URA センターリサーチ・アドミニストレーター）ほか
【共同研究・研究交流の概要】
UTFORSK プロジェクト「Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan」：日本とノルウェーにおけるジェンダー、ダイバーシティについての国際比較研究と、大学院レベルのジェンダー研究教育ペダゴジー開発と実践の共同研究。ノルウェー高等教育・技能局（HK-dir）の UTFORSK 助成金プロジェクト（2021 年 8 月～2025 年 7 月）とバーチャル・エクスチェンジ／COIL パートナーシップ・イニシアチブ（2023 年 3 月～12 月）の活動と並行して実施している（本報告書 49 頁参照）。

【国内外関連研究会】

○政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Women and Diversity in East asian political Representation（WondeR））（申）

○日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会（申）

○国際移動とジェンダー研究会（大橋）

○経済理論学会分野別分科会・ジェンダー（大橋）

○ International Studies Association: Feminist Theory and Gender Studies （FTGS）（本山）

○ Gender and Diplomacy (GenDip)（本山）

○国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク
ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加　ほか

２）UTFORSK プロジェクト

国際比較研究とその最新成果を研究教育に応用する国際共同事業

UTFORSK プロジェクト

UTFORSK プロジェクト「Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan」：日本とノルウェーにおけるジェンダー、ダイバーシティについての国際比較研究と、大学院レベルのジェンダー研究教育ペダゴジー開発と実践の共同研究プロジェクト。5 年間にわたる INTPART プロジェクト（ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 International Partnerships for Excellent Education, Research and Innovation（INTPART）による、Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity（NJ_BREGED）プロジェクト。ノルウェー科学技術大学（NTNU）のジェンダー研究センターと IGS とで、2019 年 4 月～2023 年 9 月の期間、教員・研究者・院生の相互派遣および、ノルウェーと日本のジェンダー平等についての比較研究、セミナーやワークショップの開催などを進め、共同研究の成果を書籍として刊行）の実績が評価され採択されたプロジェクト。ノルウェーDIKU: Norwegian Agency for International Cooperation and Quality Enhancement in Higher Education の助成を受け、ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築するプロジェクトを展開（2021 年 8 月～2025 年 7 月）。学生、若手研究者、教員が、パートナー大学での共同セミナーや共同指導を経験するなど、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。研究発表や産学連携への参与など若手研究者への機会提供や、論文の共同執筆など研究者同士の将来的なパートナーシップ発展につながる活動も行う。また、SDGs のジェンダー・ダイバーシティ関連の目標達成に資する成果を目指す。2024 年度は、NTNU より博士課程大学院生 3 名・修士課程院生 2 名を各 2 ないし 3 か月間受け入れ、本学からは 2 名の博士前期課程院生を派遣し、次年度に向けてさらに博士前期課程院生 2 名の派遣候補者を選考した。

2024 年度 UTFORSK プロジェクトメンバー

《NTNU》グロ・コースニス・クリステンセン（学際的文化研究学部長・教授：プロジェクトマネージャー）、ジェニファー・ブロンラ（准教授：プロジェクト・コーディネーター）、プリシラ・リングローズ（教授）、シリ・エイスレボ・ソレンセン（ジェンダー研究センター長・教授）

《IGS および本学》小林誠（基幹研究院人間科学系教授）［本学側代表］、戸谷陽子（IGS 所長）［本学側プロジェクト・コーディネーター］、石井クンツ昌子（理事・副学長）、吉原公美（リサーチ・アドミニストレーター）

３）国内外招聘研究者一覧

■ 2024 年度　海外からの招聘研究者

Chizu Sato（ワーゲニンゲン大学・オランダ）
　IGS 国際シンポジウム「フェミニズムとコモニング」（23 頁参照）
Wendy Harcourt（エラスムス・ロッテルダム社会科学大学院大学・オランダ）
　IGS 国際シンポジウム「フェミニズムとコモニング」（23 頁参照）
宋少鵬（中国人民大学・中）
　IGS 国際シンポジウム「中国における農村・ジェンダー・ モダニティ」（26 頁参照）
　IGS セミナー「国際社会と中国」（37 頁参照）
許秀雯（台湾伴侶権益推進連盟・台）
　IGS セミナー「台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり」（29 頁参照）
簡至潔（台湾伴侶権益推進連盟・台）
　IGS セミナー「台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり」（29 頁参照）
蔡一平（カリフォルニア大学アーバイン校・米）
　IGS 国際ワークショップ「アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー」（35 頁参照）
　IGS セミナー「国際社会と中国」（37 頁参照）

■ 2024 年度　国内招聘研究者

小田原琳（東京外国語大学）IGS 国際シンポジウム「フェミニズムとコモニング」（23 頁参照）
岩島史（京都大学）IGS 国際シンポジウム「フェミニズムとコモニング」（23 頁参照）
姚毅（大阪公立大学）IGS 国際シンポジウム「中国における農村・ジェンダー・ モダニティ」（26 頁参照）
田原史起（東京大学）IGS 国際シンポジウム「中国における農村・ジェンダー・ モダニティ」（26 頁参照）
李亜姣（宇都宮大学）IGS 国際シンポジウム「中国における農村・ジェンダー・ モダニティ」（26 頁参照）
リンダ・グローブ（上智大学）IGS 国際シンポジウム「中国における農村・ジェンダー・ モダニティ」（26 頁参照）
長島佐恵子（中央大学）IGS セミナー「台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり」（29 頁参照）
河野禎之（筑波大学）IGS セミナー「台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり」（29 頁参照）
Misha Cade（東京大学）IGS セミナー「一緒に学ぼう！性的同意と第三者介入ワークショップ」（31 頁参照）
治部れんげ（東京工業大学）IGS セミナー「メディアにおける『炎上』の構造と発信者としての私たち」（33 頁参照）
秋林こずえ（同志社大学）IGS 国際ワークショップ「アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー」（35 頁参照）
桐山節子（同志社大学）IGS セミナー「沖縄における共有地とジェンダー」（39 頁参照）
戸邉秀明（東京経済大学）IGS セミナー「沖縄における共有地とジェンダー」（39 頁参照）

5. 若手研究者の育成

1）AIT ワークショップ

2）大学院における次世代研究者育成

3）専任・特任教員担当講義

1）AIT ワークショップ

ジェンダー研究所が運営主体を務める国際研究交流プロジェクト

タイのアジア工科大学院大学（AIT）とジェンダー研究所による若手研究者国際交流プログラム

AIT ワークショップは、ジェンダー研究所と、タイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology（AIT））とにより実施されている、国際研究交流プログラムである。

2001 年に、ジェンダー研究センター（現ジェンダー研究所）所属教員と、AIT「ジェンダーと開発」専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められ、2004 年には、本学と AIT との間で大学間学術交流協定が結ばれた。以降、協定に基づき、日本ではジェンダー研究所が、タイでは AIT・環境資源開発研究科が運営主体となり、AIT で実施されるワークショップへの本学院生派遣と、AIT 大学院生の日本国内での研修受入による、国際研究交流事業をほぼ毎年実施している。お茶大ではもっとも歴史が長い国際研究交流プログラムである。

2009 年度からは、AIT ワークショップ・プログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013 年度はサマープログラムを活用して AIT 院生の日本国内研修を実施し、2014 年度からは大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」（2020 年度から「研究方法論コースワーク（フィールドワーク）」）を国内事前研修として取り入れた。

大学院講義「国際社会ジェンダー論」での学習とグローバルなフィールドでの実践・交流

本ワークショップの日本からの参加者は、春学期に大学院科目「研究方法論コースワーク（フィールドワーク）」を履修し、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査方法を学ぶ。その後にアジア諸国の将来を担う多彩な人材が集う AIT での研修に参加し、フィールドワークに基づく研究の基礎を実践的に学習する。また各国の院生たちとワークショップで研究交流することで、彼らの熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから研究者としての刺激を得る。帰国してからはジェンダー研究所所属の特任講師が担当する「国際社会ジェンダー論」（本報告書 56 頁参照）にて、タイで得た知見を共有し、国際社会におけるジェンダーの問題の理論的検討を通じて、さらに理解を深める。また参加者は毎年、タイでの研修内容を報告書にまとめている。

ジェンダー研究所は、このような大学院生の国際研究交流プログラムを提供し、大学院生の教育カリキュラムを補強することで、次世代のジェンダー研究者、あるいは、NGO や国際機関で国際協力の仕事につく人材の養成に持続的に取り組んでいる。

■2024 年度 AIT ワークショップについて

AIT ワークショップへの本学院生の参加者は、まず国内事前研修に相当する「研究方法論コースワーク（フィールドワーク）」の授業をとり、AIT への派遣に備えて学ぶこととなる。

7 月に AIT 院生が来日をしたが、本年度の AIT 院生たちの研究テーマは、農業とジェンダーについてであった。そうしたテーマに合わせて IGS 所属教員と、学外の関連団体や研究者からも多大なる協力を得て、日本における農業と女性の政策および取り組み、農とジェンダーにおける歴史と現状、海外の農業に対する日本の支援について学び、さらに実際に農園に行くプログラムを組み、インタビューやフィールドワークを実践する機会を設けた。プログラム参加の本学院生はすべての日程でサポートに入り、適宜、通訳や説明の補足を行なったが、これもまたこのプログラムならではの実践の一つである。

AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ
2001	Gender and Development
2002	Gender, Work and Globalization
2003	Women, Globalization and Home-based Work
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women
2006	〔実施せず〕
2007	Gender, Rights and Empowerment
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan
2011	Gender and Disaster〔特別プログラム：本学でのシンポジウム開催〕
2012	Sexuality
2013	Global Justice, Women’s Health and Prostitution
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment
2015	Labor, Sexuality and Empowerment
2016	Labor and Association from Gender Perspective
2017	Sexual minority and migrant workers from gender perspectives
2018	Power and Sexuality from Gender perspectives
2019	Gender and Empowerment in Urban Space
2020、2021	〔院生派遣は見送り〕
2022	Education from intersectional Perspective
2023	After Covid-19
2024	Gender issues and Youth

9 月には本学院生がタイへと派遣され、AIT の日下部京子教授のもとで組まれた充実したプログラムに沿って研修を行ってきた。本年度は 8 名の参加者だったが、しっかりと問題意識を持った院生たちは自身の関心に基づいたインタビューをし、各種レクチャーを受け、貴重な経験を積んできた。日本とタイからの参加者によるそれぞれの報告会では、充実したフィールドワークの成果が報告され、質疑応答も活発に行われた。

タイからの帰国後に本学の参加者たちは「国際社会ジェンダー論」で、タイでのフィールドワークや AIT での学びを言語化し、報告会と報告書作成に向けて共同作業で準備を進めていった。これは派遣されたという経験で終わらせることなく、その経験を咀嚼し、グローバルな流れの中に位置づけ直し、自身の見聞きした情報を体系づけていく作業を通してより理解と思索を深める機会を得るためである。

「ジェンダーと開発（Gender and Development: GAD）」にかかわる課題群の分析方法や視座、また海外におけるフィールドワークの基礎を学ぶことが目的の本プログラムによって、参加者は国際協力や開発援助、市民運動に直に触れ、フェミニスト視点から議論する機会を得ることができたといえるだろう。

２）大学院（人間文化創成科学研究科）における次世代研究者育成

ジェンダー研究所はジェンダーの視点から学際的･国際的な研究を推進する次世代の研究者育成も行っている。IGS 所属教員の指導のもと、2024 年度は以下の院生が博士前期課程・博士後期課程を修了した。

2024 年度　博士前期課程（ジェンダー社会科学専攻）修了者

● IGS 所属教員が主査を務めた 2024 年度博士前期課程修了者と論文タイトル

【氏名】渋谷　明香

【主査】大橋　史恵（IGS 准教授）

【修士論文タイトル】

タイの女性監督が挑むインディペンデント映画の新たな潮流――ニューウェイブ以降の動向に着目して――

【要旨】

本研究は、タイ出身のインディペンデント映画の女性映画制作者にフォーカスを当て、彼女たちが映画産業に参入するのにどのような障壁があったのか、また表現の自由に対してどのような課題をかかえてきたのかを探求するものである。タイの映画産業は歴史的に男性中心的であったが、タイ・ニューウェイブ・シネマと呼ばれる 1990 年代後期の映画運動以降になると女性たちの参入が増えていった。さまざまな制約がある中で、短編作品・長編作品を継続的に制作し続けてきた女性監督たちがどのようにしてそれを達成できたのかを、作品の分析と映画監督の経験から明らかにした。

【氏名】髙橋　奏音

【主査】大橋　史恵（IGS 准教授）

【修士論文タイトル】

米軍基地周辺地域におけるセクシュアリティの統制――戦後の立川・国立における浄化運動を事例に――

【要旨】

本論文は、女性のセクシュアリティをめぐる規範が近代化の下での都市形成やそのなかで生きる人びとの社会意識にどのような影響をもたらしてきたのかを、戦後の旧米軍立川基地周辺の砂川・国立の事例から考察するものである。1955 年からの反基地拡張運動である砂川闘争の「成功」の背後では、女性差別の問題が不可視化されてきた。「パンパン（占領軍相手の売春女性、とくに街娼)」が風紀を取り締まる目的において排斥され、一方で反基地拡張運動に参加する女性たちが称揚された。本研究は戦後近代化のなかで廃娼・浄化運動を推進した砂川村と国立町の事例を通して、運動に関わったアクターたちの「パンパン」らに対する意識や排除の動機、背景に存在する規範を検討する。

● IGS 所属教員が主査を務めた 2024 年度博士前期課程修了者と論文タイトル

【氏名】田中　青葉

【主査】大橋　史恵（IGS 准教授）

【修士論文タイトル】

アメジョとは誰か――コンタクト・ゾーンとしての沖縄で交差する経験から――

【要旨】

本研究では、米軍基地が未だに残存し、反基地運動が絶えない中で、米軍人と親密な関係を結ぶアメジョと呼ばれる女性たちに着目する。日頃から米軍関連の報道やニュースを見て、基地の戦闘機の音を聞いて育った沖縄の女性たちが、そのような状況においてもなお沖縄の中で米軍人とともに生きることは、 沖縄の社会でどのような意味をなすのかを検討する。そして、沖縄というポストコロニアルな空間で生きるアメジョたちに焦点を当て、彼女たちのライフストーリーを記述することで、コンタクト・ゾーンとしての沖縄で生きる複雑性を解明することを目的とする。

2024 年度　博士後期課程（ジェンダー学際研究専攻）学位取得者

● IGS 所属教員が副査を務めた 2024 年度博士後期課程学位取得者と論文タイトル

【氏名】新村　恵美

【副査】大橋　史恵（IGS 准教授）

【博士論文タイトル】

インドの就業構造の変化と有配偶女性の世帯内意思決定
――エンパワーメントの枠組みを使った分析――

３）2024 年度 IGS 専任・特任教員担当講義

《人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻》

申琪榮（教授）
ジェンダー学際研究報告（総集）（通年不定期）
ジェンダー学際研究報告（発展）（通年不定期）
比較政治論（前期）

大橋史恵（准教授）
ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年）
ジェンダー学際研究報告（総集）（通年）
ジェンダー学際研究報告（発展）（通年）
ジェンダー政治経済学（前期）
ジェンダー政治経済学演習（後期）

《人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻》

申琪榮（教授）
フェミニズム理論の争点（前期）
国際社会ジェンダー論（後期）
国際社会ジェンダー論演習（前期）

大橋史恵（准教授）
ジェンダー社会経済学（前期）
ジェンダー社会経済学演習（後期）

嶽本新奈（特任講師）
国際社会ジェンダー論（後期）
※（本報告書 52～53 頁「AIT ワークショップ」参照）

《学部》

戸谷陽子（教授）
ジェンダー３　文化メディアとジェンダー
英文学特殊講義VI Advanced Lectures in English Literature VI

大橋史恵（准教授）
アジア社会とジェンダーⅠ（後期）
アジア社会とジェンダーⅡ（前期）
グローバル文化学実習Ⅱ（通年不定期）
グローバル文化学総論（前期）
ジェンダー２　グローバル経済とジェンダー（前期）

6. 学術成果の発信

1）学術雑誌『ジェンダー研究』

2）プロジェクト報告書
IGS Project Series

1）『ジェンダー研究』

『ジェンダー研究』は本研究所が編集・発行している査読付きの国際学術雑誌で、特集論文、特別寄稿論文、投稿論文、書評から構成される。巻頭に掲載される特集論文はその年に特に注目されたジェンダー関連のテーマについて世界第 1 級のジェンダー学研究者が執筆し、外部評価を得た論文で組まれており、学術研究としての寄与も大きい。特別寄稿論文は、編集部によるオリジナル企画として、学際的・国際的なジェンダー研究の成果を世に問う論文を掲載している。投稿論文は、国内外から投稿された日本語もしくは英語の論文で、国際的に活躍する研究者による外部審査を経て採用された質の高い論文である。書評も近年ジェンダー関連分野で注目された著書をジェンダー研究および隣接分野の研究者が評しており、最新のジェンダー研究の動向を示すものである。

『ジェンダー研究』27 号（2024 年 7 月刊行）概要

特集「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」

『ジェンダー研究』27 号では、暴力とセクシュアリティ／ジェンダーの関係をグローバル政治の領域において考察する特集を企画した。

フェミニズムは、長らく恥と沈黙に支配されてきた性暴力を可視化し、被害者が自らの言葉で語ることのできる空間を切り開いてきた。しかしグローバル政治において、セクシュアリティと暴力をめぐる言説は、被害者をエンパワーする側面だけでなく、ネイションや人種の境界を管理し、家父長制や異性愛主義を強化するような側面ももっている。2023 年 12 月に開催したシンポジウムでは、セクシュアリティとジェンダーに関する言説を通して、何が暴力であり誰が保護／排除の対象であるかを定義し統制するような権力のありかたについて討論が行われた。本特集は、このシンポジウムでの報告をもとに、3 本の研究論文を掲載した。

Carol Harrington 氏（ヴィクトリア大学、ニュージーランド）による研究論文「Womenomics Theories of Sexual Violence: Governing Toxic Men」は、ウィメノミクス言説における「有害な男性性」に注目する。先進国の福祉政策や途上国開発政策において、またグローバルなビジネスセクターにおいて、「有害な男性性」は女性に対する暴力や貧困をひき起こすものとして問題化されている。しかしこの新自由主義的言説の焦点は女性の生産性を引き出すことにあり、「解決策」として、より生産的な異性愛家族に向けた男性性を提示することになる。

工藤晴子氏（神戸大学）の研究論文「From Security Threat to Subject of Protection: Examining Global Sexuality Politics in the Refugee Protection Regime」は、かつてクィアの人びとを国家安全保障上の脅威と位置付けてきたグローバルノースの外交政策における LGBTQ+難民の保護というナラティブを批判的に問い直す。そこには、自らを進歩の側に位置づけつつ境界を管理しようとするセクシュアリティの政治がなお作動しているのである。

嶺崎寛子氏（成蹊大学）の論文「ジェンダー・オリエンタリズムと定義する権力：イスラエルとエジ

プトの事例をもとに」は、イスラエルによるピンク・ウォッシングを例に、東洋に西洋世界にない独特／特殊な女性差別や女性蔑視を見出し、その「後れ」や「退廃」などの証左とする「ジェンダー・オリエンタリズム」が、いかに暴力を正当化するために動員されているか論じる。同時にエジプトの事例を通して言説と実態の落差に注意をうながし、感情の動員に抵抗するよう訴える。

投稿論文のセクションでは、厳正な審査を通過した 4 本の論考を掲載した。また書評セクションでは、近年に刊行されたジェンダー・フェミニズム関連書籍の中から 19 冊を取り上げ、三木那由他、板井広明、山岸大樹、小口藍子、古橋綾、関根麻里恵、荒木和華子、戸谷知尋、新井美佐子、金井郁、杉浦浩美、松浦優、酒井晃、山本めゆ、マグダレナ・コウオジェイ、菊地優美、嶽本新奈、宋連玉、Nozomi Lynette Uematsu の各氏による書評を掲載した。

■『ジェンダー研究』27 号（2024 年 7 月刊行）編集委員会

編集委員長

申　琪榮　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所

編集委員

天野　知香　　お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系
石丸　径一郎　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
大橋　史恵　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所
倉光　ミナ子　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
宝月　理恵　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
森　義仁　　お茶の水女子大学基幹研究院自然・応用科学系
脇田　彩　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

学外編集委員

板井　広明　　専修大学経済学部
金井　郁　　埼玉大学経済学部
北原　恵　　大阪大学文学研究科
仙波　由加里　　一般社団法人ドナーリンク・ジャパン
平野　恵子　　横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院
三浦　まり　　上智大学法学部
Jan Bardsley　　ノースカロライナ大学

編集事務局

本山　央子　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所
嶽本　新奈　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所
黒岩　漠　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所

『ジェンダー研究』27 号（2024 年 7 月刊行）目次

巻頭言 ..... 申琪榮

特集：グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力

Womenomics Theories of Sexual Violence: Governing Toxic Men ..... Carol Harrington
From Security Threat to Subject of Protection:
Examining Global Sexuality Politics in the Refugee Protection Regime ..... Haruko Kudo
ジェンダー・オリエンタリズムと定義する権力――イスラエルとエジプトの事例をもとに ..... 嶺崎寛子

投稿論文

国際協力 NGO のネット広告にみるジェンダー表象――ポストフェミニズムと結託する植民地主義 ..... 近藤凜太朗
母たちが／と読む『母親になって後悔してる』 ..... 北村文
自治体非正規雇用の官民比較――男女共同参画センター相談員の全国調査結果から ..... 横山麻衣・瀬戸健太郎
なぜ経済的リソースは「世帯内意思決定」に活かされないのか
――インド都市の有配偶就業女性のエンパワーメント ..... 新村恵美

書評

ミランダ・フリッカー著, 佐藤邦政監訳、飯塚理恵訳, 勁草書房
『認識的不正義　権力は知ることの倫理にどのようにかかわるのか』 ..... 三木那由他
江原由美子著, 有斐閣
『持続するフェミニズムのために　グローバリゼーションと「第二の近代」を生き抜く理論へ』 ..... 板井広明
メアリー・ホークスワース著, 新井美佐子、左髙慎也、島袋海理、見崎恵子訳, 明石書店
『ジェンダーと政治理論　インターセクショナルなフェミニズムの地平』 ..... 山岸大樹
レイウィン・コンネル著, 伊藤公雄訳, 新曜社
『マスキュリニティーズ　男性性の社会科学』 ..... 小口藍子
クォンキム・ヒョンヨン著, 影本剛、ハン・ディディ訳, 解放出版社
『被害と加害のフェミニズム　#MeToo 以降を展望する』 ..... 古橋綾
アンジェラ・マクロビー著, 田中東子、河野真太郎訳, 青土社
『フェミニズムとレジリエンスの政治　ジェンダー、メディア、そして福祉の終焉』 ..... 関根麻里恵
カイラ・シュラ―著, 飯野由里子監訳、川副智子訳, 明石書店
『ホワイト・フェミニズムを解体する　インターセクショナル・フェミニズムによる対抗史』 ..... 荒木和華子
アミア・スリニヴァサン著, 山田文訳, 勁草書房
『セックスする権利』 ..... 戸谷知尋
長田華子、金井郁、古沢希代子編, 有斐閣
『フェミニスト経済学　経済社会をジェンダーでとらえる』 ..... 新井美佐子
クラウディア・ゴールディン著, 鹿田昌美訳, 慶応義塾大学出版会
『なぜ男女の賃金に格差があるのか　女性の生き方の経済学』 ..... 金井郁
額賀美紗子・藤田結子著, 勁草書房
『働く母親と階層化　仕事・家庭教育・食事をめぐるジレンマ』 ..... 杉浦浩美
アンジェラ・チェン著, 羽生有希訳, 左右社
『ACE　アセクシュアルから見たセックスと社会のこと』 ..... 松浦優
杉浦郁子・前川直哉著, 青弓社
『「地方」と性的マイノリティ　東北６県のインタビューから』 ..... 酒井晃
平井和子著, 岩波書店
『占領下の女性たち　日本と満洲の性暴力・性売買・「親密な交際」』 ..... 山本めゆ
吉良智子著, 平凡社
『女性画家たちと戦争』 ..... マグダレナ・コウオジェイ
飯田祐子・中谷いずみ・笹尾佳代編著, 青弓社
『プロレタリア文学とジェンダー　階級・ナラティブ・インターセクショナリティ』 ..... 菊地優美
寺澤優著, 有志舎
『戦前日本の私娼・性風俗産業と大衆社会　売買春・恋愛の近現代史』 ..... 嶽本新奈
高雄きくえ編, インパクト出版会
『広島 爆心都市からあいだの都市へ「ジェンダー×植民地主義　交差点としてのヒロシマ」連続講座論考集』 ..... 宋連玉
Amanda Kennell 著, University of Hawai'i Press
ALICE IN JAPANESE WONDERLANDS: TRANSLATION, ADAPTATION, MEDIATION ..... Nozomi Lynette Uematsu

編集方針・投稿規定

2）プロジェクト報告書 IGS Project Series の刊行

ジェンダー研究所では、開催したシンポジウムやセミナーでの講演や、特別招聘教授プロジェクトの成果をまとめた報告書、IGS Project Series を刊行している。2024 年度現在までの既刊は以下の通り。

IGS Project Series 1（2016 年 3 月刊） IGS Seminar “Choice and Consent in Prenatal Testing”
IGS Project Series 2（2016 年 3 月刊） 国際シンポジウム「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？ 人類学の視座から改めて問う」
IGS Project Series 3（2016 年 4 月刊） 特別招聘教授プロジェクト　マリー・ピコーネ
IGS Project Series 4（2017 年 2 月刊） 特別招聘教授プロジェクト　アン・ウォルソール
IGS Project Series 5（2016 年 7 月刊） 国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較」
IGS Project Series 6（2016 年 7 月刊） 特別招聘教授プロジェクト　スーザン・D・ハロウェイ
IGS Project Series 7（2016 年 12 月刊） 国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考」
IGS Project Series 8（2017 年 3 月刊） 特別招聘教授プロジェクト　エリカ・バッフェッリ
IGS Project Series 9（2017 年 3 月刊） IGS Seminar （Reproductive Area）、2016　The Ethics of Prenatal Testing
IGS Project Series 10（2017 年 3 月刊） 国際シンポジウム　金融化、雇用、ジェンダー不平等
IGS Project Series 11（2017 年 3 月刊） IGS セミナー報告書　訳者と語る『京城のモダンガール：消費・労働・女性から見た植民地近代』
IGS Project Series 12（2017 年 11 月刊） 国際シンポジウム　明治期のジェンダー、宗教、社会改良
IGS Project Series 13（2018 年 3 月刊） IGS セミナー　日本における女性と経済学
IGS Project Series 14（2021 年 3 月刊） 国際シンポジウム　哲学者と皇太子妃：冷戦期日本における自由と愛と民主主義
IGS Project Series 15（2022 年 3 月刊） 特別招聘教授プロジェクト　ラウラ・ネンツィ
IGS Project Series 16（2022 年 3 月刊） 特別招聘教授プロジェクト　アネッテ・シャート＝ザイフェルト
IGS Project Series 17（2018 年 2 月刊） 2016 年度生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会　報告書
IGS Project Series 18（2021 年 3 月刊） IGS 国際セミナー（生殖領域）報告書
IGS Project Series 19（「東アジアにおけるジェンダーと政治」Booklet Series 3）（2021 年 3 月刊） ジェンダー・選挙・女性の政治的代表性：2019 年インドネシア総選挙に関する分析
IGS Project Series 20（「東アジアにおけるジェンダーと政治」Booklet Series 1）（2019 年 3 月刊） 台湾におけるジェンダークオータ
IGS Project Series 21（2022 年 2 月刊） IGS オンライン国際セミナー（生殖領域）記録集「商業的精子バンクに関する問題：倫理・ジェンダー・社会的側面から」
IGS Project Series 22（2022 年 2 月刊） IGS オンライン国際セミナー（生殖領域）記録集「生理の貧困」
IGS Project Series 23（2022 年 2 月刊） IGS オンライン国際セミナー（生殖領域）記録集「不妊と男性のセクシュアリティ」
IGS Project Series 26（2022 年 2 月刊） IGS オンライン国際フォーラム（生殖領域）記録集「出自を知ることがなぜ重要なのか：提供精子で生まれた人たちの経験と思い」
IGS Project Series 27（2023 年 7 月刊） ロー判決以後のアメリカ合衆国におけるリプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）

7. 文献収集と公開・史料電子化・ウェブ発信

1）文献・資料の収集と公開

2）IGS 史料電子化プロジェクト

3）ウェブサイト等での情報発信

1）文献・資料の収集と公開

ジェンダー研究の知の基盤の一層の充実を図る

ジェンダー研究所は、1975 年に「女性文化資料館」として創立以来、ほぼ半世紀にわたり、女性学・ジェンダー研究の文献資料の収集を絶え間なく続けてきた。女性学分野の文献資料を特に多く所蔵する、一般利用も可能な機関として、東京都立図書館がウェブ上で運営する「専門図書館ガイド」（https://senmonlib.metro.tokyo.lg.jp/）にも紹介されている。（ただし、学外者の場合は、附属図書館への事前の手続きが必要。）日本のジェンダー平等が遅々として進まない状況が続く中、女性やジェンダーにまつわる問題が、長い年月の中でどのように扱われてきたのかを知るための場所として、今後ますます活用されることを期待したい。

2024 年度は、新たな文献・資料収集においては、貴重な資料集成などの購入、配架を進めた。一方で、女性文化資料館、女性文化センター時代に収集されたとくに古い資料は、状態の劣化が見られるものが増えてきた。貴重な蓄積が今後も確かに受け継がれていくよう、図書館担当者や必要に応じて専門業者にも相談しながら、保管方法にも配慮していく。

■附属図書館専用書架での蔵書貸出・閲覧

ジェンダー研究所収蔵文献（書籍約 25,000 冊、雑誌約 340 種）は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外の学生や研究者に利用されている。

《図書館利用案内》

〇開館日

・月～金　8:45～21:00　（授業のない日は 17:00 まで）

・土　9:00～17:00　（夏・冬・春期休業期間中は閉館）

・日　12:00～17:00

〇閉館日

・日曜日、国民の祝日、年末年始、大学夏季一斉休業日

・夏・冬・春期休業期間中の土曜日

・蔵書点検

・徽音祭当日、創立記念日、入学試験日当日、卒業式

※最新情報は付属図書館ウェブサイト（https://www.lib.ocha.ac.jp/）を参照。

■蔵書・研究者に関する情報提供

附属図書館収蔵文献・資料のほかに、ジェンダー研究所内にて、購入雑誌・寄贈雑誌の最新号、研究所の過去の成果刊行物、事業の記録、所属研究者執筆の書籍のほか、全国のジェンダー研究施設や男女共同参画団体の定期刊行物を閲覧することができる。

資料閲覧対応のほか、研究者及びジェンダーに関心を持つ方々に、これらの文献や資料、研究所に蓄積された知識を広く活用してもらうため、メールや電話による外部からの問い合わせ、訪問依頼にも随時対応している。

■お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでの資料公開

https://www.lib.ocha.ac.jp/archives/
（デジタルアーカイブズトップ）

https://www.lib.ocha.ac.jp/06/researcher.html
（女性研究者名鑑）

お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでは、本学を卒業し、女性の先駆的研究者として活躍した保井コノ、黒田チカ、湯浅年子、辻村みちよの研究業績をまとめた資料目録などが公開されている。

これらの資料は、女性文化資料館時代の 1981 年の文部省特定研究「女性高等教育とその成果に関する総合的研究」における 2 つのプロジェクト、「III 婦人研究者の活動状況に関する調査研究—自然科学分野を中心に—」「IV 女性文化に関する文献・資料の収集及び調査研究」の中で、それぞれのご遺族の協力を得て収集した遺品のうち、研究関連のものを整理し、長い時間を掛けて目録化したものである。

目録化は本研究所の前身機関のプロジェクト成果であるが、これを大学の歴史資産として広く公開するよう、2007〜2009 年にデジタルアーカイブズ化された。現在、資料現物は理学部棟内に設置された「女性科学者資料室」に保管され、その管理は、本学図書・情報課 大学資料担当（歴史資料館）が行なっている。資料閲覧や出版物への利用申請、貸出等の依頼も同担当（shiryo@cc.ocha.ac.jp）が窓口になって応じている。

2）IGS 史料電子化プロジェクト

ジェンダー研究所は 2017 年度に、「IGS 史料電子化プロジェクト」を始動した。ジェンダー研究所の前身であるジェンダー研究センター（1996 年設立）、女性文化研究センター（1986 年設立）、女性文化資料館（1975 年設立）において、所属の研究者たちが企画開催してきた研究会やセミナー、国際シンポジウム等のイベントの記録・資料を電子化し、「IGS デジタルアーカイブ」として後世に残すことで、ジェンダー研究のさらなる発展に寄与することを目的とするプロジェクトである。

■ 電子化済イベント件数

女性文化資料館時代と女性文化研究センター時代に開催されたイベントの記録は、主にカセットテープに録音された音声である。そのほかに、写真（ネガフィルムと紙焼き）と、印刷物や手書きの資料・記録等の紙媒体の史料が残されている。2017 年度以来これらアナログデータの調査を進め、バラバラに保管されていた史料を過去の彙報などを参考に整理していく作業と、それと並行して個別のアナログデータをデジタルデータへと変換する電子化作業を進めてきた。

2024 年度も新たに 45 件のイベントをデジタル化することができた。2025 年 6 月現在の電子化済イベント件数は【表 1】の通りである。

【表 1】電子化済イベント件数（※1,2）

時期（年度）	組織名	イベント件数	電子化済イベント件数			
			ドキュメント（PDF）	画像（JPEG）	音声（mp3）	動画（mp4）
1975-1985	女性文化資料館	75			54	
1986-1995	女性文化研究センター	136	1	23	85	
1996-2014	ジェンダー研究センター	211	4	91	146	45
2015-2021	ジェンダー研究所	157	151	153	144	37
合計		579	156	267	429	82

※1）現在も調査中のため、イベント件数は今後増える見込

※2）女性文化資料館時代と女性文化研究センター時代のイベント一覧は本報告書 94～100 頁参照

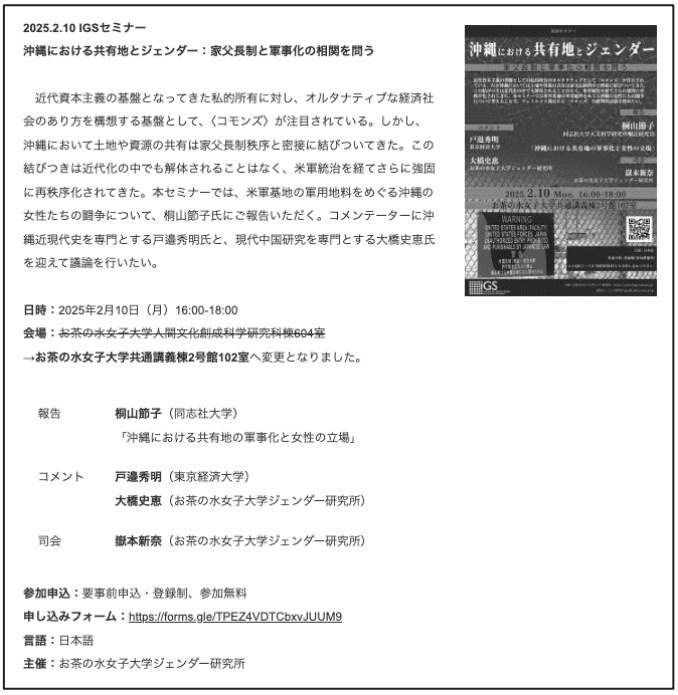
3）ウェブサイト等での情報発信

ウェブサイト全体の情報整理とデザイン整備

2023 年度に続き 2024 年度は、ウェブサイト全体の情報整理とデザイン整備を進めた。その際、サイト全体の軽量化を図るため、画像のリサイズやファイル形式の見直しを行い、PDF の圧縮処理を行った。また、サイト読み込みの遅滞を減らすため、使用していないウィジェットの整理や、使用フォントの統一、SNS 等の埋め込みの削減等、外部リソースの読み込みを最適化する作業を行った。さらに、ページのレイアウト崩れを防ぐため、プラグインを使用しないレイアウト構築を図っている。これによりページ内で情報が前後することなくスムーズに表示され、ユーザーにとって一貫性のある快適な閲覧環境が実現される見込みである。

また、WordPress を用いたサイトの再構築作業を進めた。これまで日英ページともに本番環境のみでサイトの管理・更新を行っていたため、開発・検証用のローカル環境が存在してしなかった。2025 年度以降の新サイト立ち上げに向けて安定した開発体制を整える必要があることから、2024 年度はローカル環境の構築を進め、ローカル上での WordPress 動作および既存データの複製・移行作業を進めた。移行対象は記事コンテンツ、メディアファイル、『ジェンダー研究』用のカスタム投稿タイプ等である。

さらに、移行に伴い、サイトの表示速度を改善するために画像および PDF ファイルの最適化作業を実施した。これにより、読み込み速度の改善とサーバー負荷の軽減が期待される。さらに、現サイトがスマートフォン表示に対応していない問題を改善するため、新サイト移行の際にはテーマの見直し（必要に応じて再設計）と PHP バージョンの更新検討を行う。その上で、ローカル環境上でのサイト再現と動作検証の実施を進める予定である。また、現行ウェブサイトでは表示速度の改善を優先し、SNS の埋め込み機能を停止しているが、本来はサイトと SNS との相互連携を強化し、インタラクティブ性を高めたいと考えている。今後は、これを両立可能とする最適な手法の検討を進めていきたい。



2025.2.10 IGSセミナー

沖縄における共有地とジェンダー：家父長制と軍事化の相関を問う

近代資本主義の基盤となってきた私的所有に対し、オルタナティブな経済社会のあり方を構想する基盤として、〈コモンズ〉が注目されている。しかし、沖縄において土地や資源の共有は家父長制秩序と密接に結びついてきた。この結びつきは近代化の中でも解体されることはなく、米軍統治を経てさらに強固に再秩序化されてきた。本セミナーでは、米軍基地の軍用地料をめぐる沖縄の女性たちの闘争について、桐山節子氏にご報告いただく。コメンテーターに沖縄近現代史を専門とする戸邉秀明氏と、現代中国研究を専門とする大橋史恵氏を迎えて議論を行いたい。

日時：2025年2月10日（月）16:00-18:00
会場：~~お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科棟604室~~
→お茶の水女子大学共通講義棟2号館102室へ変更となりました。

報告　**桐山節子**（同志社大学）
「沖縄における共有地の軍事化と女性の立場」

コメント　**戸邉秀明**（東京経済大学）
大橋史恵（お茶の水女子大学ジェンダー研究所）

司会　**嶽本新奈**（お茶の水女子大学ジェンダー研究所）

参加申込：要事前申込・登録制、参加無料
申し込みフォーム：https://forms.gle/TPEZ4VDTCbxvJUUM9
言語：日本語
主催：お茶の水女子大学ジェンダー研究所

表ツールを使用し階層化した
イベントページのレイアウト例

8. 社会貢献

▶社会貢献

ジェンダー研究所所属研究者は、行政機関が開催する男女共同参画関連講座の講師を担当したり、メディアの専門家取材に応じるなど、研究成果の社会還元に取り組んでいる。2024 年度もオンラインならびに対面の講演会での講演や各種メディアの取材対応など、ジェンダー研究の成果を積極的に発信した。

■ 他大学や研究機関での講演等

戸谷陽子（教授）

・ 東京女子医科大学主催「第 90 回東京女子医科大学学会総会　公開シンポジウム『女子大教育の将来』」（オンライン開催）、講演「今日の女子大学の存在意義」、2024 年 9 月 28 日
https://www.twmu.ac.jp/gakkai/meeting/soukai_90.pdf

嶽本新奈（特任講師）

・ 福岡県人権研究所・福岡女子大学女性リーダーシップセンター共催講演会、講演「北の「からゆきさん」と尼港事件――国家と家父長制が切断したもの」、福岡女子大学地域連携センター、2025 年 1 月 6 日

本山央子（特任リサーチフェロー）

・ 東京大学大学院・教養学部附属 教養教育高度化機構シンポジウム 2025「多様性と安全（Diversity and Safety）」、講演「安全保障における多様性と包摂の推進――何のために？」、東京大学駒場キャンパス、2025 年 3 月 9 日

■ 男女共同参画センターや NPO 法人等での講演

申琪榮（教授）

・ おんな・こどもをなめんなよ！の会主催「女が声を上げて「変わらない」を変えよう。」、講演「私たちのための政治は私たちの力で作り上げる」、大阪ドーンセンター、2024 年 4 月 13 日

・ 仙台市男女共同参画推進センター エル・パーク仙台主催 ジェンダー論公開講座「私たちの政治と暮らし」、エル・ソーラ仙台、2024 年 7 月 27 日

本山央子（特任リサーチフェロー）

・ 一般社団法人核兵器をなくす日本キャンペーン主催「被爆 80 年核兵器をなくす国際市民フォーラム」、パネル「核兵器とジェンダー～核被害から政策まで～」講演「核・安全保障・ジェンダー」、聖心女子大学、2025 年 2 月 9 日

・ 公益財団法人名古屋 YWCA 主催「平和集会」、講演「フェミニズムの視点から考える――日本の「戦後平和」と「新しい戦争」」、名古屋 YWCA ビックスペース、2025 年 2 月 11 日

■ 地方公共団体の男女共同参画事業への参与

申琪榮（教授）

・ 明石市主催「ウィメンズ・アカデミー in 明石～めざせ！女性リーダー」、講師、2024 年 11 月 24 日

■ NPO 事業への参与

申琪榮（教授）

・ 女性政治リーダーを養成する一般社団法人「パリテ・アカデミー」（Academy for Gender Parity）共同代表。一般向けオンライン講座や講演会を企画・開催。

■ 新聞等記事へのコメント提供ほか

申琪榮（教授）

・『立憲民主党機関紙・ウェブサイト』2024 年 4 月 8 日「【対談】まっとうな政治へ　個人寄付を広げて政治の文化を変える　申琪榮教授×落合貴之衆院議員」https://cdp-japan.jp/news/20240403_7553

・ TBS ラジオ『荻上チキ・Session』2024 年 4 月 10 日「韓国総選挙について」

・『東京新聞』2024 年 9 月 20 日「女性議員増　具体性を欠く 議連アンケート「クオータ制」否定的」

・『毎日新聞』2024 年 11 月 5 日「男性大統領求める米国　ハリス氏勝てば世界の女性に勇気」

・『時事ドットコム』2024 年 11 月 7 日「「高い壁」「また挑戦を」ハリス氏「ガラスの天井」破れず―米大統領選で日本国内識者ら」https://www.jiji.com/jc/article?k=2024110701111&g=pol

・『The New York Times』2024 年 11 月 12 日「Hanako Okada Beat the Odds to Upend a Male Political Dynasty in Japan」https://www.nytimes.com/2024/11/12/world/asia/japan-women-politics-election.html

・『沖縄タイムズ』2024 年 11 月 19 日「ジェンダー平等進まぬ背景」

・『マスコミ市民 2024 年 12 月号（No.671）』2024 年 12 月 1 日「今回も破れなかったガラスの天井 ハリス敗北の背景にあるレイシズムとジェンダーの問題」

・『ildaro.com』（韓国のウェブメディア）2024 年 2 月 10 日「지 또 하나의 공학이 탄생하는 게 무슨 의미인가? 동덕여대 공학 전환 논란, '여자대학'의 비전을 묻다」https://www.ildaro.com/10066

・『読売新聞』2024 年 12 月 12 日『回顧 2024 衆院当選女性最多を記録』

本山央子（特任リサーチフェロー）

・『JAWW NGO レポート ―北京+30 に向けて』2024 年 9 月「E. 女性と武力紛争」

・『JAWW NGO Report for Beijing + 30』2024 年 10 月 "E. Women and Armed Conflicts" https://jaww.info/doc/JAWW-NGO-Report-2024.pdf

・『エトセトラ Vol.22』2024 年 11 月「新しい戦争の時代における軍事主義とフェミニズム」

資料

① 構成メンバー

② 研究プロジェクト一覧

③ 協力研究者一覧

④ シンポジウム・セミナー一覧

⑤ 新規収蔵図書・資料

⑥ 電子化イベント一覧

⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学
ジェンダー研究所規則

⑧『ジェンダー研究』編集方針・
投稿規定

⑨ ジェンダー研究所ウェブサイト
プライバシー・ポリシー

【資料】①構成メンバー

［所長］	**《任期》**
戸谷陽子（基幹研究院人文科学系・文教育学部教授）	2021（R3）年4月1日～2025（R7）年3月31日
［専任教員］	
申琪榮（ジェンダー研究所教授）	2015（H27）年4月1日～
大橋史恵（ジェンダー研究所准教授）	2018（H30）年9月1日～
［学内研究員］	
棚橋訓（基幹研究院人間科学系・文教育学部教授）	2021（R3）年4月1日～2025（R7）年3月31日
小玉亮子（基幹研究院人間科学系・文教育学部教授）	2021（R3）年4月1日～2025（R7）年3月31日
石丸径一郎（基幹研究院人間科学系・生活科学部教授）	2021（R3）年4月1日～2025（R7）年3月31日
［特任講師］	
嶽本新奈	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
［特任リサーチフェロー］	
本山央子	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
［特任アソシエイトフェロー］	
黒岩漠	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
［アカデミック・アシスタント］	
稲垣明子	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
梅田由紀子	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
関根里奈子	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
滝美香	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
花岡奈央	2024（R6）年4月1日～2024（R6）年7月31日
許美善	2024（R6）年8月1日～2025（R7）年3月31日
和田容子	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
［客員研究員］	
足立眞理子（お茶の水女子大学名誉教授）	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
［研究協力員］	
板井広明（専修大学経済学部教授）	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
平野恵子（横浜国立大学大学院都市ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ研究院准教授）	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
仙波由加里（一般社団法人ドナーリンク・ジャパン代表理事）	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
英美由紀（藤女子大学教授）	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日
左髙慎也（独立行政法人日本学術振興会特別研究員（PD））	2024（R6）年4月1日～2025（R7）年3月31日

所長 戸谷 陽子

基幹研究院人文科学系・教授
文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コース
博士前期課程比較社会文化学専攻英語圏・仏語圏文化学コース
博士後期課程比較社会文化学専攻言語文化論領域

専門分野: 舞台芸術論、パフォーマンス研究、アメリカ演劇、文化政策、比較演劇論

所属学会等

日本英文学会
日本アメリカ文学会（東京支部評議員・編集委員）
日本アメリカ演劇学会（評議員）
日本アメリカ学会
独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（学位審査会専門委員会座長代行）

主な業績

《競争的資金》

・科学研究費基盤研究 C（課題番号：20K00385）「米国舞台・表象空間における日本人ストックキャラクターの系譜と展開」、2020 年度～2024 年度、研究代表者

専任教員（教授） 申　琪榮

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻（専攻長） ジェンダー論領域
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻
生活科学部生活社会科学講座

2024 年 10 月 1 日～2025 年 9 月 30 日
George Washington University, Elliott School of International Affairs Visiting Scholar

専門分野：ジェンダーと政治、比較政治学（東アジア）、
フェミニズム理論、＃MeToo、クオータ制、男女共同参画政策

所属学会等 International Political Science Association, American Political Science Association
European Conference on Gender and Politics, International Association for Feminist Economics
日本政治学会、日本比較政治学会、日本社会政策学会、日本フェミニスト経済学会、
「女性・戦争・人権」学会（運営委員）
ソウル大学日本研究所『日本批評』、西江大学社会科学研究所『社会科学研究』、
釜山大学女性学研究所『女性学研究』、イギリス政治学会『Politics』、ECGP 学会誌『European Journal of Politics and Gender』 編集委員
『ジェンダー研究』編集長
文部科学省科学技術人材育成費補助事業 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型） 岩手大学『I.W.A.T.E. 1 in 3 女性リーダー職研究者倍増プラン』アドバイザリーボード委員会委員長

主な業績

《論文等》

Shin, Ki-young and Ah-ran Hwang, 2024. “Who Support Gender Quota Legislation and Why?” Taiwan Journal of Democracy 20(1): 95-113

신기영, 2024.「2000 년대 이후 일본에서 나타난 두 번의 젠더 백래시（Two Gender Backlashes in Japan Since the 2000s）」『일본학보』139: 53-72.

『はじめて向きあう韓国』「コラム　#MeToo 社会変革を導いた連帯の力」p.154（2024 年　浅羽祐樹編　法律文化社）

『ジェンダー・クオータがもたらす新しい政治』「第 5 章　韓国：クオータ制の成果と分かれる国会議員の意識」pp. 127-146（2024 年　三浦まり編　法律文化社）

申琪榮、2025.「女性運動」『比較政治学事典』日本比較政治学会編　丸善出版

《招聘講演》

“Why Do We Need More Women in Politics in East Asian States?” Open Society Workshop, Taipei 2024. 4. 22

DEMOCRACY AND GENDER INEQUALITY IN EAST ASIA: INSTITUTIONAL AND PERCEPTIVE、Discussant, American University School of International Service 2024.11.11

“Backlash Against Gender Quotas to Enhance Women’s Political Representation in South Korea” University of Pennsylvania James Joo-Jin Kim Center for Korean Studies 2025.1.30

“How Far Have We Come to Achieve Justice?” Middlebury University Japanese Studies Department 2025.2.27

《競争的資金》

・ 科学研究費 挑戦的研究（萌芽）（課題番号：24K21404）「ジェンダーパリティ議会の実態調査による日韓比較」、2024 年 6 月 28 日～2026 年 3 月 31 日、研究代表者

・ 科学研究費基盤研究 B（課題番号：23H03654）「フェミニズム理論による新たな国家論の構築：ケア概念と安全保障概念の再構想から」、2023～2026 年度（研究代表者：岡野八代・同志社大学）、研究分担者

専任教員（准教授） 大橋 史恵

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース
文教育学部グローバル文化学環

専門分野: ジェンダー研究、国際社会学、中国地域研究

所属学会等 International Association for Feminist Economics
日本社会学会、関東社会学会、
日本フェミニスト経済学会（幹事会役員、『経済社会とジェンダー』編集長）
ジェンダー史学会、現代中国学会、中国女性史研究会
経済理論学会分野別ジェンダー分科会

主な業績

《論文》

大橋史恵「現代中国におけるフェミニズムの連帯の系譜――セクシュアリティの自由をめぐって」、鄭浩瀾編著『流動する中国社会――疎外と連帯』、慶應義塾大学出版会、2025 年、pp.183-207。

大橋史恵「植民地期香港における家事使用人の『老後』――クィア・アプローチから考える――」『現代中国』第 98 号、pp.5-19、2024 年。

《学会報告》

OHASHI, Fumie “Who Took Care of Migrant Care Workers?: Retirement Plans of Cantonese Domestic Servants in Colonial Hong Kong”, Paper presented at the 2024 IAFFE Annual Conference, Sapienza University in Rome, Italy.

《競争的資金》

科学研究費基盤研究 B（課題番号：23H00888）「日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究」、2023 年度～2025 年度（研究代表者：定松文・恵泉女学園大学）、研究分担者

科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603）「香港における移住女性の再生産労働力配置―「グローバル・シティ」のジェンダー分析」、2019 年度～2024 年度、研究代表者

科学研究費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）（課題番号：21KK0033）「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」、2021～2024 年度（研究代表者：堀口正・大阪公立大学）、研究分担者

特任講師 嶽本 新奈

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース

専門分野:歴史学、歴史社会学、ジェンダー研究

所属学会等 ジェンダー史学会
総合女性史学会
歴史科学協議会
女性・戦争・人権学会
社会学研究会
日本フェミニスト経済学会

【担当業務】

- 研究プロジェクト「性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析」(17 頁参照)/「反公害/環境運動史におけるジェンダー分析」(17 頁参照)/「『からゆきさん』にみる性・移動・再生産領域」(19 頁参照)
- IGS セミナー 「沖縄における共有地とジェンダー」コーディネーター・司会(39 頁参照)
- IGS-AIT 交流事業:「AIT ワークショップ報告会」企画・コーディネーター・司会(52〜53 頁参照)/IGS-AIT 交流事業:『2024 年度 AIT ワークショップ実施報告書』編集担当(52〜53 頁参照)
- 「国際社会ジェンダー論」講義担当
- 担当セミナーのウェブサイト用報告書(各日本語・英語)の翻訳・監修
- 『ジェンダー研究』編集スタッフ(58〜60 頁参照)。主に特集、一般投稿論文担当。ほか『ジェンダー研究』編集刊行業務全般の統括
- IGS 研究協力員研究報告会、企画・コーディネーター・司会(41 頁参照)ならびにウェブサイト用報告原稿作成。

主な業績

《書評》

2024 「書評・寺澤優『戦前日本の私娼・性風俗産業と大衆社会——売買春・恋愛の近現代史』」、「ジェンダー研究」お茶の水女子大学ジェンダー研究所、27 号。
2024 「書評・山家悠平『生き延びるための女性史——遊郭に響く〈声〉をたどって』」、「図書新聞」、3641 号。

《学会報告・講演》

2024 「反公害/環境運動で見落とされてきたケア労働——苓北石炭火力発電所建設反対運動を事例として」、日本フェミニスト経済学会、2024 年 8 月 3 日(専修大学)
2024 「Karayuki-san's decisions and experiences after retiring from sex work: Focusing on a women's end-of-life care」、International Association For Feminist Economics、2024 年 7 月 3 日(Rome、Italy)

《他大学講演》

2024 神田外国語大学 「ジェンダー論 B」、ゲスト講義、6 月 11 日
2024 慶應義塾大学「「からゆきさん」からみる帝国日本の労働と性」、協生環境推進室ジェンダー・セクシュアリティ論連続公開講座、10 月 22 日
2024 専修大学「シベリア地域の「からゆきさん」とそのネットワーク——尼港事件顛末で忘却されたもの」、科研「19-20 世紀転換期ドイツ・中東欧における反人身売買運動の国際化に関する研究」研究会、11 月 16 日
2025 福岡女子大学「国際社会とジェンダー」ゲスト講義 1 月 7 日

《競争的資金》

- 科学研究費基盤研究 C(課題番号:23K11676)「『からゆきさん』にみる性・移動・再生産領域」、2023 年〜2025 年度、研究代表者
- 科学研究費基盤研究 A(課題番号:24H00106)「『奴隷制の想像力』——地中海型奴隷制度論の動態的検討」2024 年〜2027 年度(研究代表者:清水和裕・九州大学)、研究分担者

特任リサーチフェロー 本山 央子

専門分野：ジェンダー研究、フェミニスト国際関係・国際政治経済学

所属学会等 日本平和学会
国際政治学会
国際ジェンダー学会
日本フェミニスト経済学会

【担当業務】

- 研究プロジェクト「グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー」（17 頁参照）／「日本による親ジェンダー外交の展開：安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析」（20 頁参照）／「フェミニズム理論による新たな国家論の構築：ケア概念と安全保障概念の再構想から」（18 頁参照）
- 国際ワークショップ「アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー」企画・報告（35 頁参照）
- 『ジェンダー研究』28 号特集国際シンポジウム「フェミニズムとコモニング」司会（23 頁参照）
- 『ジェンダー研究』27・28 号編集（58～60 頁参照）
- 海外からの問合対応・客員研究員受け入れ対応

主な業績

《学会報告・講演》

2025"Imperialism and feminism in the new security policy of Japan,", presentation at International Studies Association (ISA) 2025 Annual Convention – March 2-5, 2025, Chicago

2024「帝国主義とフェミニズムの新しい関係？　価値の外交とジェンダー主流化」日本国際政治学会 2024 研究大会 2024 年 11 月 15～17 日＠札幌コンベンションセンター

2024「日本の国家安全保障再定義と普遍的価値・ジェンダーの領有」日本平和学会 2024 春季研究大会自由論題部会　2024 年 6 月 1 日＠学習院大学

2024“Feminist agenda in imagined fraternity: A study of 2023 G7 Hiroshima summit”, presentation at International Studies Association (ISA) 2024 Annual Convention - April 3rd - 6th, 2024

《競争的資金》

科学研究費若手研究（課題番号：23K17134）「日本による親ジェンダー外交の展開：安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析」、2023～2027 年度、研究代表者

科学研究費基盤研究 B（課題番号：23H03654）「フェミニズム理論による新たな国家論の構築：ケア概念と安全保障概念の再構想から」、2023～2026 年度（研究代表者：岡野八代・同志社大学）、研究分担者

●学内研究員

学内研究員 棚橋 訓

基幹研究院人間科学系・教授
文教育学部人間社会科学科
人間文化創成科学研究科 博士後期課程 比較社会文化学専攻
人間文化創成科学研究科 博士前期課程 ジェンダー社会科学専攻

専門分野: 文化人類学、オセアニア地域研究、ジェンダー文化論、
セクシュアリティ研究

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー

学内研究員 小玉 亮子

基幹研究院人間科学系・教授
文教育学部人間社会科学科
人間文化創成科学研究科 博士後期課程 人間発達科学専攻
人間文化創成科学研究科 博士前期課程 人間発達科学専攻

専門分野: 子ども社会学、教育学

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー

学内研究員 石丸 径一郎

基幹研究院人間科学系・教授
生活科学部心理学科
人間文化創成科学研究科 博士後期課程人間発達科学専攻発達臨床心理学領域
人間文化創成科学研究科 博士前期課程人間発達科学専攻発達臨床心理学コース

専門分野: ジェンダー心理学、認知行動療法

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー
『ジェンダー研究』編集委員

●客員研究員

客員研究員 足立 眞理子

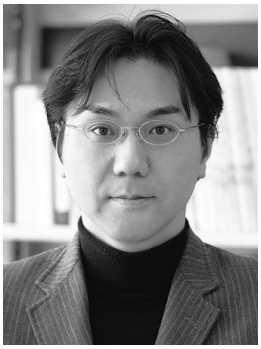
（本学名誉教授）

委嘱期間: 2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々

●研究協力員



研究協力員 板井 広明

（専修大学経済学部教授）

委嘱期間：2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々

参加イベントと報告タイトル

IGS 研究協力員 研究報告会

ベンサムの性的快楽主義の位相：同性愛行為の非犯罪化論と女性の地位の変革

研究協力員 平野 恵子

（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授）

委嘱期間：2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究（科学研究費基盤研究 B 課題番号： 23H00888）

参加イベントと報告タイトル

IGS 研究協力員 研究報告会

インドネシア家事労働者保護法案を取り巻く現状

研究協力員 仙波 由加里

（一般社団法人ドナーリンク・ジャパン代表理事）

委嘱期間：2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

参加イベントと報告タイトル

IGS 研究協力員 研究報告会

日本における精子の親族提供

研究協力員 英 美由紀

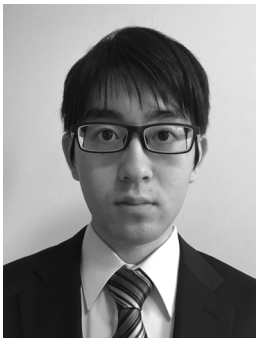
（藤女子大学教授）

委嘱期間：2024年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

参加イベントと報告タイトル

IGS 研究協力員 研究報告会

モナ・アワド『ファットガールをめぐる 13 の物語』：ケア、ネットワーク、第四波フェミニズム



研究協力員 左髙 慎也

（学振 PD）

委嘱期間：2024年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

参加イベントと報告タイトル

IGS 研究協力員 研究報告会

フェミニスト制度論的政治理論に基づいた『ジェンダー平等のための議会』の考察：制度の『経験的分析』から『規範的構想』へ

●特任アソシエイトフェロー

特任アソシエイトフェロー 黒岩 漠

主担当業務:ジェンダー研究所事務局統括

- ジェンダー研究所全体予算管理
- 『ジェンダー研究』編集員
- 国際シンポジウム等運営
- 各種報告書・データ作成 ほか

●アカデミック・アシスタント

アカデミック・アシスタント 稲垣 明子

主担当業務:シンポジウム等運営関連

- AIT ワークショップ事務
- 研究所事業事務(大学本部各種調査対応含む)
- 会計事務
- IGS 史料電子化作業
- 書類作成・書類整理 ほか

アカデミック・アシスタント 梅田 由紀子

主担当業務:文献収集・資料整理・附属図書館収蔵資料管理関連

- IGS 史料電子化プロジェクト電子化作業管理
- 研究所事業事務
- シンポジウム等運営事務
- 会計事務
- 書類作成・書類整理 ほか

アカデミック・アシスタント 関根 里奈子

主担当業務:広報・情報機器管理

- ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報
- シンポジウム・セミナー・研究会ポスター作成
- オンラインイベント開催時の Zoom Webinar ホスト担当
- 情報機器・ネットワーク管理 IGS ウェブサイト運営技術担当、情報更新作業 ほか

●アカデミック・アシスタント

アカデミック・アシスタント 滝 美香

主担当業務:会計事務関連

- 研究所事業事務
- シンポジウム等運営事務
- IGS 史料電子化作業
- 書類作成・書類整理　ほか

アカデミック・アシスタント 花岡 奈央

主担当業務:広報・情報機器管理

- ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報
- オンラインイベント開催時の Zoom Webinar ホスト担当
- IGS ウェブサイト運営技術担当、情報更新作業
- IGS セミナーの企画・運営
- AIT ワークショップ コーディネーター　ほか

アカデミック・アシスタント 許 美善

主担当業務:広報・情報機器管理

- ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報
- オンラインイベント開催時の Zoom Webinar ホスト担当
- IGS ウェブサイト運営技術担当、情報更新作業

アカデミック・アシスタント 和田 容子

主担当業務:成果発信関連

- 年次事業報告書編集
- 『ジェンダー研究』日本語原稿校閲
- 成果発信日本語原稿校閲
- 栞・リーフレット企画制作
- 会計事務
- 研究所事業事務補佐　ほか

【資料】② 2024 年度研究プロジェクト一覧

1）IGS 研究プロジェクト

プロジェクト名	担当
「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	申
東アジアにおけるエコロジーと生存のフェミニスト分析	大橋
資本と身体のジェンダー分析	大橋・足立・板井
性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析	嶽本
反公害／環境運動史におけるジェンダー／フェミニズム分析	嶽本
グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー	本山
文学・芸術文化表象とジェンダー	戸谷

2）外部資金による研究プロジェクト

プロジェクト名称	期間（年度）	担当
科学研究費 挑戦的研究（萌芽）（課題番号：24K21404） ジェンダーパリティ議会の実態調査による日韓比較	2024～2025	申
科学研究費基盤研究 B（課題番号：23H03654） フェミニズム理論による新たな国家論の構築：ケア概念と安全保障概念の再構想から	2023～2026	申 本山 （分担者）
科学研究費基盤研究 B（課題番号：23H00888） 日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究	2023～2025	大橋 平野 （分担者）
科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）（課題番号：21KK0033） 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー	2021～2024	大橋 （分担者）
科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603） 香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析	2019～2024	大橋
科学研究費基盤研究 C（課題番号：23K11676） 「からゆきさん」にみる性・移動・再生産領域	2023～2025	嶽本
科学研究費基盤研究 A（課題番号：24H00106） 「奴隷制の想像力」：地中海型奴隷制度論の動態的検討	2024～2027	嶽本 （分担者）
科学研究費若手研究（課題番号：23K17134） 日本による親ジェンダー外交の展開：安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析	2023～2027	本山

3）海外の助成金によるプロジェクト

ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku の UTFORSK プロジェクト（戸谷）2021 年 8 月～2025 年 7 月

【資料】③ 協力研究者一覧

氏名・所属	協力事業*	参照
【海外】		
ジャン・バーズレイ （Jan Bardsley） ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米	『ジェンダー研究』編集委員	58 頁
ジェニファー・ブロンラ （Jennifer Branlat） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	49 頁
カン・シケツ （Chih-chieh Chien） 台湾伴侶権益推進連盟・台	（セ）台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり	29 頁
ツァイ・イーピン （Yiping Cai） カリフォルニア大学アーバイン校・米	（セ）アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー	35 頁
	（セ）国際社会と中国	37 頁
ウェンディ・ハーコート （Wendy Harcourt） エラスムス・ロッテルダム社会科学大学院大学・蘭	（シ）フェミニズムとコモニング	23 頁
キョ・シュウブン （Victoria Hsu） 台湾伴侶権益推進連盟・台	（セ）台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり	29 頁
グロ・コースニス・クリステンセン （Guro Korsenes Kristensen） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	49 頁
日下部京子 （Kyoko Kusakabe） アジア工科大学院大学・タイ	（連）AIT ワークショップ	47 頁
プリシラ・リングローズ （Priscilla Ringrose） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	49 頁
佐藤千寿 （Chizu Sato） ワーゲニンゲン大学・蘭	（シ）フェミニズムとコモニング	23 頁
ソウ・ショウホウ （Shaopeng Song） 中国人民大学・中	（シ）中国における農村・ジェンダー・モダニティ	26 頁
	（セ）国際社会と中国	37 頁
シリ・エイスレボ・ソレンセン （Siri Øyslebø Sørensen） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	49 頁

*（シ）シンポジウム、（セ）セミナー・国際フォーラム、（国）国際共同研究プロジェクト、（連）国際ネットワーク

氏名・所属	協力事業*	参照
【国内】		
秋林こずえ （Kozue Akibayashi） 同志社大学	（セ）アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー	35 頁
岩島史 （Fumi Iwashima） 京都大学	（シ）フェミニズムとコモニング	23 頁
小田原琳 （Rin Odawara） 東京外国語大学	（シ）フェミニズムとコモニング	23 頁
河野禎之 （Yoshiyuki Kawano） 筑波大学	（セ）台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり	29 頁
金井郁 （Kaoru Kanai） 埼玉大学	『ジェンダー研究』編集委員	58 頁
桐山節子 （Setsuko Kiriyama） 同志社大学	（セ）沖縄における共有地とジェンダー	39 頁
北原恵 （Megumi Kitahara ） 大阪大学	『ジェンダー研究』編集委員	58 頁
リンダ・グローブ （Linda Grov） 上智大学	（シ）中国における農村・ジェンダー・ モダニティ	26 頁
ミーシャ・ケード （Misha Cade） 東京大学総合文化研究科博士後期課程	（セ）一緒に学ぼう！性的同意と第三者介入ワークショップ	31 頁
治部れんげ （Renge Jibu） 東京工業大学	（セ）メディアにおける『炎上』の構造と発信者としての私たち	33 頁
田原史起 （Fumiki Tahara） 東京大学	（シ）中国における農村・ジェンダー・ モダニティ	26 頁
戸邉秀明 （Hideaki Tobe） 東京経済大学	（セ）沖縄における共有地とジェンダー	39 頁
長島佐恵子 （Saeko Nagashima） 中央大学	（セ）台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり	29 頁
三浦まり （Mari Miura） 上智大学	『ジェンダー研究』編集委員	58 頁
姚毅 （Yi Yao） 大阪公立大学	（シ）中国における農村・ジェンダー・ モダニティ	26 頁
李亜姣 （Yajiao Li） 宇都宮大学	（シ）中国における農村・ジェンダー・ モダニティ	26 頁

*（シ）シンポジウム、（セ）セミナー・国際フォーラム

氏名・所属	協力事業*	参照
【学内】		
石井クンツ昌子 (Masako Ishii-Kuntz) 理事・副学長・グローバル女性リーダー育成研究機構	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	49 頁
小林誠 (Makoto Kobayashi) 基幹研究院人間科学系	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	49 頁
天野知香 (Chika Amano) 基幹研究院人文科学系	『ジェンダー研究』編集委員	58 頁
森義仁 (Yoshihito Mori) 基幹研究院自然・応用科学系	『ジェンダー研究』編集委員	58 頁
倉光ミナ子 (Minako Kuramitsu) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	58 頁
脇田彩 (Aya Wakita) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	58 頁
宝月理恵 (Rie Hogetsu) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	58 頁

*（シ）シンポジウム、（セ）セミナー・国際フォーラム、（国）国際共同研究プロジェクト、（連）国際ネットワーク

【資料】④ シンポジウム・セミナー一覧

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催国際シンポジウム		
7/31	IGS 国際シンポジウム フェミニズムとコモニング：ポスト資本主義におけるフェミニズムの位相 【報告】佐藤千寿（ワーゲニンゲン大学講師） ウェンディ・ハーコート（エラスムス・ロッテルダム社会科学大学院大学教授） 【コメンテーター】小田原琳（東京外国語大学教授） 岩島史（京都大学講師） 大橋史恵（IGS 准教授） 【司会】本山央子（IGS 特任リサーチフェロー） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日英（同時通訳有） 【参加者数】204 名（対面参加 23 名、オンライン参加 181 名）	23 頁
IGS 共催国際シンポジウム		
12/7	IGS 国際シンポジウム 中国における農村・ジェンダー・ モダニティ 【基調報告】宋少鵬（中国人民大学教授） 【報告】姚毅（大阪公立大学客員研究員） 田原史起（東京大学教授） 李亜姣（宇都宮大学助教） 【ディスカッサント】リンダ・グローブ（上智大学名誉教授） 【司会】大橋史恵（IGS 准教授） 【閉会挨拶】 戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授） 【主催】ジェンダー研究所 【共催】中国女性史研究会 【言語】日本語、中国語普通話（逐次通訳有） 【参加者数】85 名	26 頁
IGS 主催 IGS セミナー		
4/17	IGS セミナー 台湾と日本における、トランス・インクルーシブなキャンパスづくり 【講師】許秀雯（台湾伴侶権益推進連盟弁護士） 簡至潔（台湾伴侶権益推進連盟事務局長） 【進行・コメント】長島佐恵子（中央大学教授） 【コメント】石丸径一郎（お茶の水女子大学教授） 河野禎之（筑波大学助教） 【総合司会】戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授） 【通訳】八木はるな（中央大学准教授） 魏韻典（東京大学博士後期課程） 【主催】ジェンダー研究所 【共催】中央大学ダイバーシティセンター 【言語】日本語、中国語（逐次通訳有） 【参加者数】44 名	29 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
4/24	IGS セミナー（学内限定） 一緒に学ぼう！性的同意と第三者介入ワークショップ 【講師】Misha Cade（東京大学総合文化研究科博士後期課程） 今村さくら（一般社団法人ちゃぶ台返し女子アクション、お茶の水女子大学大学院ジェンダー社会科学専攻卒業生） 【司会】花岡奈央（IGS アカデミック・アシスタント） 【主催】ジェンダー研究所、『リプロダクティブ・ジャスティス』翻訳プロジェクト 【言語】日本語 【参加者数】18 名	31 頁
6/14	IGS セミナー（学内限定） メディアにおける『炎上』の構造と発信者としての私たち 【基調講演】治部れんげ（ジャーナリスト、東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授） 【パネリスト】宮川さおり（共同通信津支局長） 河原千春（お茶の水女子大学博士前期課程ジェンダー社会科学専攻／信濃毎日新聞社記者） 【司会】浅野優菜（お茶の水女子大学博士前期課程ジェンダー社会科学専攻） 唐井梓（お茶の水女子大学博士前期課程ジェンダー社会科学専攻） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日本語 【参加者数】34 名	33 頁
12/5	IGS 国際ワークショップ アジア太平洋をめぐる地政学的抗争とジェンダー 【報告】蔡一平（カリフォルニア大学アーバイン校博士後期課程／Development Alternatives with Women for a New Era （DAWN）） 本山央子（IGS 特任リサーチフェロー） 【コメント】秋林こずえ（同志社大学教授） 【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師） 【主催】ジェンダー研究所 【共催】科研費若手「日本による親ジェンダー外交の展開：安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析」（23K17134） 【言語】日英（逐次通訳有） 【参加者数】38 名	35 頁
12/6	IGS セミナー 国際社会と中国：フェミニスト的好奇心から振り返る 【報告】蔡一平（カリフォルニア大学アーバイン校博士後期課程／Development Alternatives with Women for a New Era （DAWN）） 宋少鵬（中国人民大学教授） 【司会・コメント】大橋史恵（IGS 准教授） 本山央子（IGS 特任リサーチフェロー） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日英（逐次通訳有） 【参加者数】23 名	37 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
2/10	IGS セミナー 沖縄における共有地とジェンダー：家父長制と軍事化の相関を問う 【報告】桐山節子（同志社大学嘱託研究員） 【コメント】戸邉秀明（東京経済大学教授） 大橋史恵（IGS 准教授） 【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師） 【主催】 ジェンダー研究所 【言語】日本語 【参加者数】73 名	39 頁
IGS 主催 IGS 研究会		
3/7	IGS 研究協力員研究報告会 【報告】板井広明（専修大学教授／IGS 研究協力員） 左髙慎也（独立行政法人日本学術振興会特別研究員（PD）／IGS 研究協力員） 仙波由加里（一般社団法人ドナーリンク・ジャパン代表理事／IGS 研究協力員） 英美由紀（藤女子大学教授／IGS 研究協力員） 平野恵子（横浜国立大学准教授／IGS 研究協力員） 【挨拶・コメント】戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授） 【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日本語 【参加者数】18 名	41 頁
IGS 後援イベント		
8/3	日本フェミニスト経済学会 2024 年度大会 共通論題 フェミニスト経済学とエコロジー：人間と環境のウェルビーイングを模索する 【座長】岩島史（京都大学） 大橋史恵（お茶の水女子大学） 【報告】佐藤千寿（ワーゲニンゲン大学） 湯澤規子（法政大学） 嶽本新奈（お茶の水女子大学） 福永真弓（東京大学） 【コメント】小林舞（京都大学） 伊田久美子（大阪公立大学） 【主催】日本フェミニスト経済学会 【後援】ジェンダー研究所	43 頁
IGS 共催研究会		
9/19	国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー（IMAGE）分科会 第 3 回研究会 『在日フィリピン人社会』をジェンダーの視点から読む 【報告】高畑幸（静岡県立大学） 【コメント】大野恵理（獨協大学） 伊藤るり（一橋大学名誉教授） 【司会】小ヶ谷千穂（フェリス女学院大学） 【主催】国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー（IMAGE）分科会 【共催】ジェンダー研究所 【後援】科研費基盤研究（B）「日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究」（課題番号：23H00888）	44 頁

【資料】⑤2024 年度新規収蔵図書・資料

・2024 年度、寄贈により以下の書籍が新規収蔵された。［寄贈者名『書名』（著者名）］（敬称略）

Louise Rouse『Archival glitch : art + feminism seminar series』(Deanna MacDonald and Louise Rouse[編])／小林牧人『LGBTQ+性の多様性はなぜ生まれる? : 生物学的・医学的アプローチ』(小林牧人)／ドメス出版『生きにくさを生きる : 人権・戦争・原発』(山村淑子)／吉川弘文館『江戸のキャリアウーマン : 奥女中の仕事・出世・老後』(柳谷慶子)／白澤社『結婚の自由 :「最小結婚」から考える』(植村恒一郎 [ほか著])／"北樹出版『現代文化への社会学 : 90 年代と「いま」を比較する』(高野光平／ 加島卓／ 飯田豊[編著] ; 林田新 [ほか著])"／昭和女子大学女性文化研究所『コロナ禍の労働・生活とジェンダー』(昭和女子大学女性文化研究所[編])／洲崎圭子『ジェンダー研究が拓く知の地平』(東海ジェンダー研究所記念論集編集委員会[編])／日本学術協力財団『女性の政治参画をどう進めるか』(日本学術協力財団編集 ; 三浦まり [ほか執筆])／昭和女子大学女性文化研究所『女性リーダー育成への挑戦 : 昭和女子大学創立 100 周年記念出版』(昭和女子大学女性文化研究所[編])／千種キムラ・スティーブン『漱石と姦通罪 : 前期三部作の誕生と家父長制批判』(千種キムラ・スティーブン)／品川洋子『つなぐ : 女性の中学校長から : 北九州市で坂道の先へ』(品川洋子)／久保桂子『共働きと男性の家事労働』(久保桂子)／福村出版『なぜ愛に傷つくのか : 社会学からのアプローチ』(エヴァ・イルーズ[著] ; 久保田裕之[訳])／グラフィック社『日本の女性・ジェンダーのいちばんわかりやすい歴史の教科書』(飯田育浩)／千種キムラ・スティーブン『「パンデミック」とフェミニズム : 新・フェミニズム批評の会創立 30 周年記念論集』(新・フェミニズム批評の会[編])／北樹出版『ゆさぶるカルチュラル・スタディーズ』(稲垣健志[編著])

・2024 年度、寄贈、購入によりジェンダー研究所から以下の書籍が新規収蔵された。［『書名』（著者名）］

『ACE : アセクシュアルから見たセックスと社会のこと』(アンジェラ・チェン[著] ; 羽生有希[訳])／『Contours of feminist political ecology』(Wendy Harcourt [and four others edited].)／『Gender history in China』(Masako Kohama and Linda Grove[edited])／『Gender theory in troubled times』(Kathleen Lennon & Rachel Alsop)／『家族計画 = The family planning(復刻版『家族計画』;2)』(日本家族計画普及会)／『家族計画 = The family planning(復刻版『家族計画』;3)』(日本家族計画普及会)／『家族計画 = The family planning(復刻版『家族計画』;4)』(日本家族計画普及会)／『家族計画 = The family planning(復刻版『家族計画』;5)』(日本家族計画普及会)／『家族計画 = The family planning(復刻版『家族計画』;6)』(日本家族計画普及会)／『家族計画= The family planning(復刻版『家族計画』;1)』(日本家族計画普及会)／『教室から編みだすフェミニズム : フェミニスト・ペダゴジーの挑戦』(虎岩朋加)／"『クリエイティブであれ : 新しい文化産業とジェンダー』(アンジェラ・マクロビー[著] ; 中條千晴／ 竹崎一真／ 中村香住[訳])"／"『グローバリゼーションと変わりゆく社会』(千田有紀／菊地英明[編著])"／『ケアする惑星』(小川公代)／『行動する女たちの会資料集成(編集復刻版第1巻)』(高木澄子 [ほか編])／『行動する女たちの会資料集成(編集復刻版第2巻)』(高木澄子 [ほか編])／『行動する女たちの会資料集成(編集復刻版第3巻)』(高木澄子 [ほか編])／『行動する女たちの会資料集成(編集復刻版第4巻)』(高木澄子 [ほか編])／『行動する女たちの会資料集成(編集復刻版第5巻)』(高木澄子 [ほか編])／『行動する女たちの会資料集成(編集復刻版第6巻)』(高木澄子 [ほか編])／『行動する女たちの会資料集成(編集復刻版第7巻)』(高木澄子 [ほか編])／『行動する女たちの会資料集成(編集復刻版第8巻)』(高木澄子 [ほか編])／"『持続するフェミニズムのために : グローバリゼーションと「第二の近代」を生き抜く理論へ = For persistent feminism : survive globalization and the ""second modernity""』(江原由美子[著])"／『ジェンダーと政治理論 : インターセクショナルなフェミニズムの地平』(メアリー・ホークスワース[著] ; 新井美佐子 [ほか訳])／

『ジェンダー研究 : お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報 = Journal of gender studies』(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター [編])／『ジェンダー事典』(ジェンダー事典編集委員会[編])／『女性の暮らしと生活意識データ集<2025>』(食品流通情報センター [編])／『女性画家たちと戦争』(吉良智子)／"『セクシュアリティの人口学』(小島宏／ 和田光平[編著])"／『セックスする権利』(アミア・スリニヴァサン[著] ; 山田文[訳])／『占領下の女性たち : 日本と満洲の性暴力・性売買・「親密な交際」』(平井和子)／『戦前日本の私娼・性風俗産業と大衆社会 : 売買春・恋愛の近現代史』(寺澤優)／『多様性との対話 : ダイバーシティ推進が見えなくするもの』(岩渕功一 [編著])／『男女共同参画社会データ集 = Statistical data of gender-equal society<2024>』(三冬社編集制作部)／"『「地方」と性的マイノリティ : 東北 6 県のインタビューから』(杉浦郁子／ 前川直哉)"／『中国と日本における農村ジェンダー研究 : 1950・60 年代の農村社会の変化と女性』(堀口正 [ほか編著])／"『中絶と避妊の政治学 : 戦後日本のリプロダクション政策』(ティアナ・ノーグレン[著] ; 塚原久美／ 日比野由利／ 猪瀬優理 [訳])"／『なぜ男女の賃金に格差があるのか : 女性の生き方の経済学』(クラウディア・ゴールディン[著] ; 鹿田昌美[訳])／『日中戦時下の中国語雑誌『女声』 : フェミニスト田村俊子を中心に』(山﨑眞紀子 [ほか著訳])／『認識的不正義 : 権力は知ることの倫理にどのようにかかわるのか』(ミランダ・フリッカー[著] ; 飯塚理恵[訳])／"『働く母親と階層化 : 仕事・家庭教育・食事をめぐるジレンマ』(額賀美紗子／ 藤田結子)"／『ハロー・ガールズ : アメリカ初の女性兵士となった電話交換手たち』(エリザベス・コッブス[著] ; 綿谷志穂[訳])／『被害と加害のフェミニズム : #MeToo 以降を展望する』(クォンキム・ヒョンヨン[編著])／『姫とホモソーシャル : 半信半疑のフェミニズム映画批評』(鷲谷花)／"『フェミニスト経済学 : 経済社会をジェンダーでとらえる = Introduction to feminist economics : the Japanese feminist perspective』(長田華子／金井郁／古沢希代子[編著] ; 李素軒 [ほか著])"／"『フェミニズムとレジリエンスの政治 : ジェンダー、メディア、そして福祉の終焉』(アンジェラ・マクロビー[著] ; 田中東子／河野真太郎[訳])"／"『プロレタリア文学とジェンダー: 階級・ナラティブ・インターセクショナリティ』(飯田祐子／中谷いずみ／笹尾佳代[編著])"／『分析フェミニズム基本論文集』(サリー・ハスランガー[ほか著]; 木下頌子[ほか編訳])／『ホワイト・フェミニズムを解体する: インターセクショナル・フェミニズムによる対抗史』(カイラ・シュラー[著];川副智子[訳])／『マスキュリニティーズ: 男性性の社会科学』(レイウィン・コンネル[著];伊藤公雄[訳])／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 1 巻)』(松原洋子[編])／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 2 巻)』(松原洋子[編])／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 2 期(市民運動編)第 1 巻)』／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 2 期(市民運動編)第 2 巻)』／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 2 期(市民運動編)第 3 巻)』／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 2 期(市民運動編)第 4 巻)』／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 2 期(市民運動編)第 5 巻)』／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 2 期(市民運動編)第 6 巻)』／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 2 期(市民運動編)第 7 巻)』／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 2 期(市民運動編)第 8 巻)』／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 3 巻)』(松原洋子[編])／『優生保護法関係資料集成:編集復刻版(第 4 巻)』(松原洋子[編])／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 5 巻)』(松原洋子[編])／『優生保護法関係資料集成: 編集復刻版(第 6 巻)』(松原洋子[編])／『ロシア文学とセクシュアリティ: 二十世紀初頭の女性向け大衆小説を読む』(安野直)

【資料】⑥ 史料電子化プロジェクト：電子化イベント一覧

女性文化資料館（1975-1985）/女性文化研究センター（1986-1995）イベント一覧				
年度	活動区分	開催日	イベントタイトル	登壇者
1977	講演会	1977/9/22	湯浅年子先生講演会	湯浅年子
(S52)	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1978/1/14	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	
	研究会	1978/2/8	山川菊栄と女性解放思想(木下　研究会)	
	研究会	1978/3/6	社会学における家族	
	研究会	1978/3/22	山川菊栄研究	
1978	研究会	1978/6/6	女性史研究会　欧米の女性論	
(S53)	研究会	1978/7/27	女性史研究会　欧米の女性論	
1979	研究会	1979/5/24	女性の教育と女性問題	
(S54)	研究会	1979/10/4	アメリカ婦人労働の法的諸問題	
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1980/1/26	総合科目「婦人問題」に関するｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	
	研究会	1980/2/12	中山みきの思想と歩み―陽気づくめの世界をめざして 50 年―	吉原敬子
		1980/3/1	杉田和子、小島栄子、岩本のり子　於:中村屋	
1980	研究会	1980/4/1	平安時代の相続制と女子相続権―『平安遺文』文書を中心として―	服藤早苗
(S55)	研究会	1980/4/23	〔マーガレット・ミードの女性研究Ⅰ〕	村松弘子ほか
	研究会	1980/5/29	〔マーガレット・ミードの女性研究Ⅱ〕	田中和子ほか
	研究会	1980/7/3	インドにおける女性の政治的役割	Chandra Mudaliar
	研究会	1980/10/18	〔コペンハーゲン婦人会議及び婦人差別撤廃条約について〕【婦人問題懇話会 講演会】	船橋邦子ほか
	研究会	1980/10/20	性役割とセクシズム	小林啓子
	研究会	1980/11/5	Feminist Literary Criticism からみた『砂の女』	Chigusa Kimura-Steven
	研究会	1980/12/25	目黒依子『女役割』について	田中和子ほか
	研究会	1981/2/12	アメリカの女性史	金子幸子ほか
	研究会	1981/3/27	フランス社会史の動向と女性史	小島智恵
1981	研究会	1981/5/27	人類学者のみた個人的アメリカ女性史	Frederica de Laguna
(S56)	研究会	1981/5/29	Role's of Women's College	Frederica de Laguna
	研究会	1981/6/12	『性の署名』について(1)	内藤和美ほか
	研究会	1981/7/4	『性の署名』について(2)	平川和子
	研究会	1981/7/12	高群逸枝の婚姻・家族形態研究の意義について	関口裕子
	研究会	1981/9/9	カナダの女性学について	Patricia Morley ほか
	研究会	1981/10/16	家族・親族理論研究動向	田中真砂子
	研究会	1981/11/25	兼業農家女性の就労形態の変容―長野県諏訪地方の場合―	久保桂子
	研究会	1981/12/15	オーストラリアと日本の婦人運動／ニュージーランドの女性の地位について	Romanovsky Ulrike ほか
	研究会	1982/1/27	千葉県における廃娼運動―国防婦人会との関連において―	船橋邦子
	研究会	1982/3/24	近現代日本の社会教育と婦人団体	木下　ユキエ
1982	研究会	1982/4/23	女子大学の存在意義を考える―アメリカ・フランス・インド等の各国を見て―	広中和歌子

(S57)	研究会	1982/5/22	女性学研究会　井上輝子、目黒依子	
	研究会	1982/6/4	近世における女性と家族	林玲子ほか
	研究会	1982/10/22	平安時代の養子制度について―日本家族の特質をテーマに―	William Mccullough ほか
	研究会	1982/11/24	バングラディシュの女性について	武藤敦子
	研究会	1982/12/13	Consort, mother, beloved, "Vamp"; the symbolic depiction of womanhood in Indian calendar art	Patricia Uberoi ほか
	研究会	1983/1/24	出産の社会史―家族の近代化に関連して―	落合恵美子
	研究会	1983/2/15	韓国の女性について	鄭金子ほか
	研究会	1983/3/22	『巫女の文化』について―古代女性史の見直しのために―	倉塚曄子ほか
1983	研究会	1983/5/30	ガブリエラ・ミストラルと『女性読本』について	田村さと子
(S58)	研究会	1983/6/30	Japanese-German Marriage in Japan: a fentative approach	Irene Hardach-Pinke
	研究会	1983/7/29	『性の深層』をめぐって―現代西ドイツの女性運動との関連で―	大沢三枝子
	研究会	1983/9/26	『妻と夫の社会史』について	山本郁子ほか
	研究会	1983/11/1	女性の側からジェンダーを考える	若井文恵ほか
	研究会	1983/11/21	Intellectual Differnces between Woman and Man "Inherited or Acquired?"	Virginia Mann ほか
	研究会	1983/12/15	機械女工たちの近代	古庄正
	研究会	1984/2/22	『婦女新聞』の出発	石崎昇子ほか
	研究会	1983/3/13	フィリップ・アリエス研究―子ども・教育・女性―	波多野完治ほか
1984	研究会	1984/4/24	日本の離婚調停に関する研究	Taimie Bryant
(S59)	研究会	1984/5/15	『更級日記』作者の宗教的コンプレックス	高木きよ子
	講演会	1984/5/31	お茶の水女子大学百年史刊行記念講演会	林太郎ほか
	研究会	1984/6/20	キリスト教文化と女性	杉田弘子
	研究会	1984/7/6	The Function of Libraries,Women' Centers,and "Women's Studies" in doing Feminist Research	Helen Wheeler ほか
	研究会	1984/10/23	『私生子』概念の発生と消長―明治期を中心とする法制・歴史と実際の扱い―	田中弘子
	研究会	1984/11/20	Woman and Nature	Susan Griffin ほか
	研究会	1984/12/11	中国女性史研究―小野和子『中国女性史』を読んで―	加藤直子
	研究会	1985/2/25	樋口一葉の文学―『十三夜』と『人形の家』の比較を中心に―	フランチスカ・フンチカ
	研究会	1985/3/14	近世関東農村における女性労働者の存在形態―年季・日雇奉公人の分析から―	青木道子
1985	研究会	1985/4/26	ユートピアと性	倉塚平
(S60)	研究会	1985/5/29	西欧近代の結婚観―キルケゴールをめぐって―	野村明代
	研究会	1985/6/12	清代において模範とされている女性について	Susan Mann
	研究会	1985/6/13	食事が子供の身体と心に与えるもの	
	研究会	1985/7/4	韓国女性の政治的、社会的地位	白京男
		1985/10/5	第三世界の女性たちと私たち―ナイロビ報告（日本婦人問題懇話会）	
	研究会	1985/10/28	『源氏物語』にみる婚姻と居住形態と相続―光源氏と紫の上と明石君をめぐる―視角―	木下ユキエ
	研究会	1985/11/15	主婦とテレビ	香取淳子
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1985/11/27	産むことを考える	加藤シヅエほか
	研究会	1985/12/18	イタリア女性解放思想の歴史と今日的な段階―19 世紀末から現在に至る主要な事項―	Argnani Fausta

	研究会	1986/1/16	スイスにおける女性史研究―論文集『女性』と『イティネラ』にみる女性史家の研究動向―	佐藤るみ子
	研究会	1986/3/3	「円地文子論―"自然な女"の周辺―」	宮内淳子
1986	研究会	1986/4/25	フランス現代女性思想の流れ―ボーヴォワール・クリスティヴァ・イリガライ	棚沢直子
(S61)	研究会	1986/6/24	日本文化における『悪女』	Valerie・L・Durham
	研究会	1986/10/3	航空史における女性の役割―ドイツ女性スポーツ史の視角から	Gertrud Pfister
	研究会	1986/11/20	韓国の家族について	徐炳淑
	研究会	1986/12/8	バングラディシュの女性―女性政策の視点から―	Jowshan Ara Rahman ほか
	研究会	1987/1/14	中東世界の女性―イスラームの原理と実像	黒田美代子
	研究会	1987/3/3	マレーシアの女性	Goh Beng Lan
1987	研究会	1987/4/23	公民の妻/青年団における女子活動の設立	渡辺洋子ほか
(S62)	研究会	1987/5/15	Impact of Economics & Technological Change on Women	Tamara・Hareven
	研究会	1987/6/24	円地文子の描いた女性像	アイリーン・マイカルス・アダチ
	研究会	1987/7/14	家計構造の長期的変容	田窪純子
	研究会	1987/8/25	舞踊と語り……祖母の語りとその姿	江川まゆみ
	研究会	1987/10/26	ラテン・アメリカの女性像	三田千代子
	研究会	1987/11/25	和泉式部と仏教	小野美智子
	研究会	1987/12/16	タイ社会における女性の役割	小野沢・ニッタヤー
	研究会	1988/2/10	日本における転勤の問題とデュアル・キャリア・ファミリーについて	青木由紀
	研究会	1988/3/10	新しい家庭科をめざして	西谷洋子
	研究会	1988/3/10	家庭科における消費者教育	小関禮子
1988	研究会	1988/4/11	Income Generation of Women in Rural Bangladesh	Kohinoor Begum
(S63)	研究会	1988/5/26	South Asian Women: Challenges & Prospects	Urmila Phadnis
	研究会	1988/6/22	Some Implications of Women's Status in China	Beverly Y. B. Hong
	研究会	1988/7/8	性役割意識に関連する韓国人の価値観	金炳端
	研究会	1988/9/7	こどもの虐待と放置―小児科の全国調査から―	内藤和美
	研究会	1988/11/25	フェミニスト研究の軌跡―Stanley & Wise の『フェミニズム社会科学に向かって』が提起するもの―	矢野和江
	研究会	1989/2/21	アジアにおける女性と仕事	Noeleen Heyzer
	研究会	1989/3/7	日本のフェミニストの意識と alternative な生活スタイル	ゴー・ベン＝ラン
1989	研究会	1989/4/5	男女平等教育の実践に向けて	Peggy McIntosh
(H1)	研究会	1989/4/14	Education of Scientist who Happen to Be Women	Emily L. Wic
	研究会	1989/6/1	鎌倉期の乳父について―その存在形態と乳母との関連	秋山貴代子
	研究会	1989/6/12	Modernisation en Iran et Le Changement Socio-cultural de Role de la Femme	Nasrin F. Hakami
	研究会	1989/7/17	Problems of Homeless Children in India	Rajani Paranjipe
	合評会	1989/9/11	原ひろ子著『ヘアー・インディアンとその世界』について	田中真砂子
	研究会	1989/10/4	スペイン内戦下の女性たち	秋山充子
	研究会	1989/11/17	Women and / in Media	Ann Simonton
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1989/12/13	お茶の水女子大学留学生懇談会	

	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1989/11/29,12/20,1990/3/19	特定研究「女性のライフコースの多様化と女子大学の役割」	Peggy McIntosh
1990 (H2)	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1990/4/23,24	『母性』をめぐる日独ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	舘かおるほか
	研究会	1990/5/18	Systematic Planning for Women's in Development and Activities	Barbara Knudson
	研究会	1990/6/14	マレー農村社会における性役割―東南アジアの伝統とイスラム規範のはざまにて	花見槙子
	研究会	1990/6/26	Women's Mothering and Working Roles in Japan and the United States	Brenda Bankart
	研究会	1990/9/25	中央ユーラシア遊牧民の歴史にみる女性像	宮脇淳子
	研究会	1990/10/23	福沢諭吉の女性論	杉原名穂子
	研究会	1990/11/22	日本近代女性の自伝を読む	Ronald P. Loftus
	研究会	1990/12/5	精神的母性	Elisabeth Gössmann
	研究会	1991/3/13	女性の自然科学研究者の進路決定要因の研究について	ビヴァリー・ゲッツイ
1991 (H3)	研究会	1991/5/29	大正時代の『令女会』の歌曲―女学生の歌唱と女学生向け創作歌曲の一考察	坂本麻実子
	研究会	1991/6/10	An Anthropological Study of Gender Science in Japan & U.S.	Sharon Traweek
	研究会	1991/6/18	To a Safer Place	Dane Raphael
	研究会	1991/10/4	Woman's Movement in Comparative Perspective	Ilse Lenz
	研究会	1991/10/9	Women of the Tlingit Society in Historical Perspective	Frederica de Laguna
	研究会	1991/10/31	Confusionism and Modern Chinese Women's Family Life	黄育馥
	研究会	1991/11/15	フェミニズムの方法としてのメモリーワーク	Frigga Haug ほか
	研究会	1991/11/19	クリスティヴァ『女の時間』を読む	棚沢直子
	研究会	1991/12/19	The Situation of the Swedish Women Today	Malin Ronnblom
	研究会	1992/1/30	自治体における女性学	粟国千恵子
	研究会	1992/2/12	中国の少数民族における女性	劉耀荃
	研究会	1992/2/20	アメリカ女性学の現段階: 女性学の理論家と県空者養成システム	三宅義子
	研究会	1992/3/13	『女性と労働』日独ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	
1992 (H4)	研究会	1992/4/15	Women's Studies in Canada	Naomi Black
	研究会	1992/4/20	Sexuality and Reproduction in Women's Utopian Dystopian Literature	Blaine Martin
	研究会	1992/6/19	湯浅年子博士資料的研究の歩み	松田久子
	研究会	1992/6/22	ジェーン・アダムスの思想と行動	米澤正雄
	研究会	1992/7/20	女性と開発をめぐる諸問題	村松安子
	研究会	1992/10/26	沖縄における女性の就労と性役割分業観	国吉和子
	講座	1992/11/21,28,12/5	次世代育成力を考える	原ひろ子ほか
	研究会	1993/1/28	南インド・ナガラッタールにおける親族・婚姻及び女性	西村祐子
1993 (H5)	研究会	1993/5/18	中国における職業分化に伴う女性の価値観と行為方式の変化について	沙蓮香
	研究会	1993/6/24	女性と表彰―"模範嫁"表彰の聞き取り調査をめぐってー	熊澤知子
	研究会	1993/7/16	ベルリンの老人ホームとケア付き集合住宅	大澤真理
	研究会	1993/9/22	女性の自己表現と文学―野上彌生子におけるフェミニズムと形式―	藤田和美
	研究会	1993/10/15	―政治学者のみたジェンダー研究―オリエンタリズムとの関連―	石田雄

	特定研究懇談会	1993/11/13	Women in Higher Education－A case of the University of California USA－	Dr.Maresi Nerad
	研究会	1993/11/14	変容する男性社会―労働、ジェンダーの日独比較	高島道枝ほか
	研究会	1993/12/3	Gender,Justice and Therapy: Can One Be a Feminist and Practise Family Therapy?	Jan McDowell
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1993/12/14,15	女性とメディア	
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1994/1/20	特定研究「ライフコースの多様化の時代における大学教育と女性」	
1994	研究会/ｼﾝﾎﾟ	1994/4/7	エコロジーとフェミニズムを考える	Maria Mies ほか
(H6)	研究会	1994/6/1	オーストラリア女性史研究―女性史からフェミニスト史へ	Vera Mackie
	研究会	1994/7/27	いけ花と日本女性:知の発達・地から・ジェンダー	飛田尚弥
	研究会	1994/8/29	Feminist Studies and Qualitative Empirical Methods: the Case of Sex Tourism and Traffic in Women	Ilse Lenz
	研究会	1994/9/27	Internationalization and Gender Relations: Theoretical Approaches	Ilse Lenz
	研究会	1994/10/31	家族法改正をめぐる文献とその論点	海妻径子
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1994/11/2	学内共同教育研究プロジェクト・大学における女性学及び女性学研究センターの役割について	
	研究会	1995/1/27	How to combine Parenthood and Work?―Policies on Gender in Sweden―	Rita Liljestrum
	研究会	1995/2/21	Current Trends in Women's Studies in India: Gender,Development and Empowerment/	Malavika Karlekar ほか
	研究会	1995/3/1	Women, Education, and Development in Bangladesh	Saleha Begum
1995	研究会	1995/4/13	日本の女性国会議員―その形成と構造	大海篤子
(H7)	研究会	1995/5/12	姉さん女房の社会学	Ursula Richter
	研究会	1995/6/16	女性と政治	Elic Plutzer
	研究会	1995/7/3	遺伝子とジェンダー	Joan Hideko Fujimura
	研究会	1995/9/18	アメリカのフェミニスト法理論の現在	Frances Olsen
	研究会	1995/10/13	社会主義フェミニズムの観点から見る『雁』	玉枝 Prindle
	研究会	1995/11/24	エコロジーとフェミニズム	山本良一
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1995/12/2	湯浅年子メモリアルカンファレンス―エレーヌ・ランジュヴァン・ジョリオをむかえて	Hélène Langevin-Joliot
	研究会	1995/12/19	The place of women in Egyptian Society	Samia Khedr Saleh
	研究会	1996/2/14	ネパールにおける Management と WID の視点	福士恵理香
	研究会/ｼﾝﾎﾟ	1996/3/19	日本の学問研究とジェンダー	舘かおる

●2024 年度に電子化したイベント一覧

2000	夜間ｾﾐﾅｰ	2000/11/8	『西洋フェミニズム』はなぜ不適切な名称か？（夜間セミナー8-1）	Tani E. Barlow
(H12)	夜間ｾﾐﾅｰ	2000/11/15	非ナショナル（もしくは地域的）フェミニズムの主体とは何か？（夜間セミナー8-2）	Tani E. Barlow
	夜間ｾﾐﾅｰ	2000/11/22	女の歴史は、社会的出来事の残滓、流動する言語使用、政治的偶発性、ナショナリスト的で反植民地主義的な開発戦略のなかからいかにして引き出せるか？（夜間セミナー8-3）	Tani E. Barlow
	夜間ｾﾐﾅｰ	2000/11/29	植民地的近代という特定の歴史のなかで女の主体性や、市民性、優生学、人種改良、「セクシュアリティ」、人類学などが包含するインターナショナルな問題を、私たちはどう読むべきか？（夜間セミナー8-4）	Tani E. Barlow
	夜間ｾﾐﾅｰ	2000/12/6	(ポスト)社会主義的近代とは何か？またそれと「中国」フェミニズムとの関係は何か？（夜間セミナー8-5）	Tani E. Barlow

	夜間ｾﾐﾅｰ	2000/12/13	普遍的な『ポスト西洋的』フェミニズムの歴史の記述はネーションから地域への移行（いわゆるグローバル化）のなかでどのような課題に直面しているのか？（夜間セミナー8-6）	Tani E. Barlow
	ゼミ	2001/1/29	タニ先生意見交換会	Tani E. Barlow
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	2001/3/22	アジアにおけるグローバル化とジェンダー	Tani E. Barlow ほか
2001 (H13)	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/5/16	移動研究とジェンダー研究をつなぐ―両者の接点を求めて（夜間セミナー9-1）	Mirjana Morokvasic-Muller
	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/5/23	ゲスト・ワーカーから超国境的移動者へ―1989 年を分岐点として（夜間セミナー9-2）	Mirjana Morokvasic-Muller
	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/6/6	ヨーロッパ経済への『他者化された』女性の編入―衣服産業,家事代行業、性産業（夜間セミナー9-3）	Mirjana Morokvasic-Muller
	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/6/13	女性移動者の抵抗戦略―サン・パピエ、自営業、通勤としての移動（夜間セミナー9-4）	Mirjana Morokvasic-Muller
	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/6/20	強制移動と移り変わるアイデンティティ―ユーゴスラヴィアのバイナショナル・カップルをめぐって（夜間セミナー9-5）	Mirjana Morokvasic-Muller
	講演会	2001/9/22	ポスト・コミュニズム時代のヨーロッパにおける人の移動とジェンダー	Mirjana Morokvasic-Muller
	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/11/7	ジェンダーとグローバル化を考える（夜間セミナー10-1）	Vera Mackie
	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/11/14	グローバル化と身体（夜間セミナー10-2）	Vera Mackie
	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/11/28	グローバル化と表象（夜間セミナー10-3）	Vera Mackie
	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/12/5	グローバル化とセクシュアル・アイデンティティ（夜間セミナー10-4）	Vera Mackie
	夜間ｾﾐﾅｰ	2001/12/11	グローバル化とトランスナショナル・フェミニズム（夜間セミナー10-5）	Vera Mackie
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	2002/3/2	トランスナショナル・フェミニズムの可能性	Vera Mackie
2002 (H14)	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	2002/5/25	国際協力における大学の役割―ジェンダー課題を中心に―	Carla Risseeuw ほか
	夜間ｾﾐﾅｰ	2002/7/3	ケア、社会政策、ジェンダー―概念的検討（夜間セミナー11-1）	Carla Risseeuw
	夜間ｾﾐﾅｰ	2002/7/10	地球的課題としての高齢化―南北のジェンダー政策課題（夜間セミナー11-2）	Carla Risseeuw
	夜間ｾﾐﾅｰ	2002/7/17	福祉国家の撤退―オランダの事例（夜間セミナー11-3）	Carla Risseeuw
	夜間ｾﾐﾅｰ	2002/7/24	ケアと文化的相違―東アフリカの伝統治療とケア（夜間セミナー11-4）	Carla Risseeuw
	夜間ｾﾐﾅｰ	2002/7/31	社会調査と倫理―フェミニスト的ケア観を中心に（夜間セミナー11-5）	Carla Risseeuw
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	2002/11/21	グローバル化とオランダの福祉国家―ケアにおける私的領域・公的領域の問題をめぐって―	Carla Risseeuw
2003 (H15)	講演会	2003/9/22	メキシコの女性とフォークアート	Eli Bartra
	講演会	2003/10/6	トリン・T・ミンハ新作映画上映会＆講演会	Trinh T. Minh-ha
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	2003/11/15	ジェンダー研究の理論と表象分析のいま―国家・資本・表象の共謀と攻防	天野知香ほか
	講演会	2003/11/21	セクシュアリティ研究と文学研究	J. Keith Vincent
	研究会	2004/1/20	「ポスト国家／ポスト家族」言説のフロントー上野・西川・春日・竹村論文をめぐる応答ー	上野千鶴子ほか
	研究会	2004/3/17	マッチョな男と金欠女はどこへ行く？―ポストコロニアルな文化地勢（「英語圏ジェンダー理論／表象研究会」2003 年度年次大会）	越智博美ほか

	講演会	2004/3/17	父の娘と母の娘と　田嶋陽子、〈学問／感性／政治〉を斬る（「英語圏ジェンダー理論／表象研究会」2003 年度年次大会）	田嶋陽子
2004 (H16)	研究会	2004/10/2	Anne Mclintock,Imperial Leather: Race, Gender, and Sexuality in the Colonial Cotest（「英語圏ジェンダー理論／表象」研究会　第 2 回文献討論会）	上野和子ほか
	講演会	2004/10/11	No Turning Back：　The History of Feminism and the Future of Women	Estelle B. Freedman
	セミナー	2004/11/18	グローバル化時代の女性のセクシュアリティ―女性のセクシュアリティの脱領域化、再領域化、そして位階化―	金恩實
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	2004/12/11	いかにして権力はパフォームするのか―暴力の再現前とジェンダー配備―（第1回 F-GENS　シンポジウム「グローバル化、暴力、ジェンダー」分科会 A）	Anne Cubilie ほか
	研究会	2005/2/19	セクシュアリティの地平―いま見る・読む・感じる表象批評の冒険（「英語圏ジェンダー理論／表象研究会」2004 年度年次大会）	小谷真理ほか
2005 (H17)	研究会	2005/10/8	Elizabeth Grosz, Volatile Bodies: Toward a Corporeal Feminism（「英語圏ジェンダー理論／表象研究会」第 5 回文献討論会）	鵜殿えりかほか
	講演会	2006/1/14	Undoing Gender	Judith P. Butler
2006 (H18)	研究会	2006/7/9	Donna Haraway, Simians, Cyborgs, and Women を読む（「英語圏ジェンダー理論／表象研究会」第 7 回文献討論会）	上野直子ほか
	研究会	2007/3/10	Laura Mulvey, Visual and Othder Pleasures および　Death 24×　a Second　第5章を読む（「英語圏ジェンダー理論／表象研究会」第 9 回文献討論会）	斉藤綾子ほか
2007 (H19)	研究会	2007/6/23	Nancy F. Cott, Public Vows: A History of Marriage and the Nation を読む（「英語圏ジェンダー理論／表象研究会」第 10 回文献討論会）	高橋裕子ほか
2008 (H20)	講演会	2008/5/31	女子大学とフェミニズム/ポストフェミニズム	海老根静江

【資料】⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則

（平成 27 年 3 月 25 日制定）

(趣旨)

第 1 条　この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構規則第 4 条第 2 項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下「研究所」という。)に関し必要な事項を定める。

(目的)

第 2 条　研究所は、グローバル女性リーダー育成研究機構に附属する研究所として、ジェンダーに関する総合的、国際的な研究及び調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資することを目的とする。

(研究及び業務)

第 3 条　研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる研究及び業務を行う。

(1)　ジェンダーに関する国際的研究及び調査

(2)　ジェンダー研究に関する教育研修

(3)　ジェンダー研究に関する文献・資料の収集および整理

(4)　ジェンダー研究に関する情報の提供

(5)　その他前条の目的を達成するために必要な業務

(組織)

第 4 条　研究所は、次に掲げる者をもって組織する。

(1)　研究所長

(2)　教員

(3)　研究員

(4)　その他学長が必要と認めた職員

2　研究所に、次に掲げる者を加えることができる。

(1)　副研究所長

(2)　特別招聘教授

(3)　特任職員

(4)　客員研究員

(5)　研究協力員

(研究所長)

第 5 条　研究所長は、男女共同参画を担当する副学長並びに基幹研究院人文科学系、人間科学系及び自然科学系の系会議構成員(以下「系会議構成員」という。)である教授のうちから学長が任命する。

2　研究所長は、研究所の業務を掌理する。

3　研究所長の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

4　研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(副研究所長)

第 6 条　副研究所長は、系会議構成員のうちから、研究所長が指名する。

2　副研究所長は、研究所長から指定された業務を掌理する。

3　副研究所長の任期は、1 年とする。ただし、再任を妨げない。

4　副研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(研究員)

第 7 条　研究員は、第 3 条に掲げる研究及び業務に従事する。

2　研究員は、基幹研究院に所属する教員のうちから、学長が任命する。

3　研究員の任期は 2 年とし、その終期が研究員となる日の属する年度の翌年度の末日を超えることとなる場合は、翌年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第 8 条　客員研究員は、第 3 条に掲げる研究及び業務に参画する。

2　客員研究員は、本学専任の教員以外の者を、学長が委嘱する。

3　客員研究員の任期は 1 年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(研究協力員)

第 9 条　研究協力員は、第 3 条に掲げる研究及び業務に協力する。

2　研究協力員は、本学専任の教員以外の者を、研究所長が委嘱する。

3　研究協力員の任期は 1 年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(運営会議)

第 10 条　研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、ジェンダー研究所運営会議(以下「運営会議」という。)を置く。

2　運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。

(1)　研究所長

(2)　副研究所長

(3)　第 4 条第 1 項第 2 号に掲げる教員

(4)　第 4 条第 1 項第 3 号に掲げる研究員のうちからグローバル女性リーダー育成研究機構長(以下「研究機構長」という。)が指名する者

(5)　その他研究機構長が必要と認めた者

3　運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。

4　運営会議の構成員は、第 2 条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。

5　研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

6　本条に定めるほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第 11 条　研究所の事務は、企画戦略課が行う。

(雑則)

第 12 条　この規則に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附　則

1　この規則は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

2　国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究センター規則は、廃止する。

附　則

この規則は、令和 2 年 4 月 1 日から施行する。

附　則

この規則は、令和 4 年 4 月 1 日から施行する。

【資料】⑧『ジェンダー研究』編集方針・投稿規定

《編集方針》

1.『ジェンダー研究』(以下、本誌)は、学際的・国際的なジェンダーに関する最新の研究成果を発信し、グローバルなジェンダー研究の発展に寄与する。

2. 本誌は、特集記事・投稿論文・書評からなる。

3. 本誌は特集記事を企画し、時宜にかなったもの、国際的な関心の高いもの、新領域を開拓するものなど、現在のジェンダー研究にとって重要であるテーマで、質の高い論文を掲載する。

4. 投稿論文は、国内外・学内外を問わず公募し、厳正な審査を経て掲載することで、質の高い学術論文の国内外への頒布を進める。

5. 書評は、国内外のジェンダーに関する書籍を厳選し、最先端の研究動向の紹介およびそれについての考察を加えた論評を行う。

6. 本誌の刊行により、国内外・学内外のジェンダーに関する研究の発展を促進し、グローバルかつ有機的な研究交流の構築を目指す。そして、国立大学法人として、男女共同参画社会の実現に貢献する等の、社会的要請にも応える。

《投稿規定》

1　投稿する論文は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。

2　投稿者は、国内外を問わず、学際的に女性学・ジェンダーに関する研究に従事する、原則として修士号取得相当以上とする。

3　投稿する論文は、未発表の論文に限る。また、他誌などとの二重投稿は認めない。他で審査中のもの、掲載予定となっているものの投稿は、二重投稿とみなす。なお、この規程に違反した場合、新たな投稿を受け付けないなど、しかるべき措置をとる。

4　論文執筆における使用言語は、原則として日本語または英語とする。日本語／英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。

5　投稿論文は、

- 日本語の論文は、注・図表・参考文献を含めて 20000 字以内
- 英語の論文は、注・図表・参考文献を含めて 8500 ワード以内
- なお、1 図表 500 字相当、1 ページを要する場合は 1000 字相当とする
- 挿図の場合は、1 ページあたり 1000 字、刷り上がり 20 頁内に入ることを原則に、およそ 20 点までとして全体を構成する
- 挿図に用いる図版の掲載許可については、投稿者が自らの責任において然るべき手続きをとる。なお許可に要する費用は、投稿者負担とする。

＊ 定められた字数などの制限を超えた場合、形式において甚だしく不備がある場合には、受理できない。

6　論文の提出時には、以下をそれぞれ個別のデータファイルにして提出すること。6-1 から 6-3 までは Word ファイルで作成のこと。

6-1 表紙。論文タイトル(副題も含む)と投稿者氏名・所属を日本語と英語とで記す。 (タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。)

6-2 要旨とキーワードを日本語と英語で提出。日本語は 400 字以内、英語は 200 ワード以内(ネイティブチェック済みのもの)。キーワードは日英ともに 5 語以内。

6-3 本文。注と参考文献を含む。

6-4 図表・図版。 図表は Word または Excel で作成。写真は JPEG または PDF で作成。
なお、執筆者を特定しうるいかなる情報(謝辞、科研番号)も 6-1 以外には記載してはならない。

7 投稿予定者は指定の期間に、ジェンダー研究所ウェブサイト上のエントリーフォームより、事前エントリーを行うものとする。エントリー後の投稿とりやめ、題目・内容の多少の変更は問題なく、連絡の必要もない。

8 投稿論文は、ジェンダー研究所ウェブサイト上の、以下のいずれかの投稿フォームより、 必要事項を入力したうえで、アップロードすること。

日本語投稿フォーム

https://form.jotform.me/72482244933459

英語投稿フォーム

https://form.jotform.me/72488720633461

9 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。その際の費用に関しては投稿者が負担する。

10 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める＜『ジェンダー研究』執筆要項＞に従う。英語の投稿論文は Style Sheet for Journal of Gender Studies とする。

11 投稿論文の掲載の可否は、査読者による審査のうえ、編集委員会が決定する。ただし、本投稿規定・執筆要項や本誌の趣旨に合致しない原稿、また学術的論文としての水準を著しく達していないと判断された場合、審査の対象外とする場合もある。

12 編集委員会は、査読者の審査にもとづき、投稿者に論文の修正を求めることがある。求められた投稿者は、速やかに論文を修正し、修正対応表をつけて、メールにて提出しなければならない。

13 投稿者による校正は原則 2 回までとする。

14 投稿後、投稿論文を取り下げる場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。

15 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表・写真などが多い場合には、執筆者による自己負担となることがある。

16 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、編集委員会の許可を必要とする。

改訂

1. 2017 年 10 月 27 日制定
2. 2021 年 5 月 14 日改訂
3. 2024 年 1 月 16 日改訂

『ジェンダー研究』web サイト　https://www2.igs.ocha.ac.jp/gender/

【資料】⑨ ジェンダー研究所ウェブサイト　プライバシー・ポリシー

1. 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所（以下、本研究所）ウェブサイトでは本研究所のイベント開催に際して、イベント参加申込者の個人情報（氏名等により特定の個人を識別できるもの）を、本ウェブページ上にて収集することがあります。

2. 収集した個人情報はイベント開催における会場手配や安全確保、配布資料作成の参考として利用するものであり、本研究所のイベント開催通知以外では利用することはありません。

3. 収集した個人情報の管理は、ウェブ担当者が漏洩、紛失、改竄等に対する安全対策を行うことで保護し、その責任は本研究所所長が最終的に負います。

4. 本研究所では、プライバシー・ポリシーを改定することがあります。改定する場合は、当ウェブサイトでお知らせします。

附　則
このプライバシー・ポリシーは、2015 年 7 月 1 日から施行します。

国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
ジェンダー研究所（IGS）
2024（令和６）年度事業報告書

編集担当：申琪榮・和田容子

発行：お茶の水女子大学ジェンダー研究所
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
Tel: 03-5978-5846
igsoffice@cc.ocha.ac.jp
https://www2.igs.ocha.ac.jp

2025 年９月作成

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

Institute for Gender Studies, Ochanomizu University
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610 Japan

TEL: 03-5978-5846　FAX: 03-5978-5845
igsoffice@cc.ocha.ac.jp
https://www2.igs.ocha.ac.jp

iGS
Institute for Gender Studies
Ochanomizu University